
死書長 - 忘れられた図書館 -

ジャン太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死書長・忘れられた図書館

【Nコード】

N9017N

【作者名】

ジャン太

【あらすじ】

剣と魔法の異世界冒険譚！！……ではなく。優柔不断^{ヘタレ}主人公のドタバタラブコメディ！！……でもなく。ダークでサイコでホラーでサスペンスな本格ミステリー！！……ですらない。そこは見渡す限りに本棚が並び、右も左も前も後ろも上も（流石に下は地面だが）どの方向を向いても、半ば強制的に”本”という情報記録媒体を見せつけられているかのような、そんな場所。”出来損ない”で”不安定”な連中が最後に辿りつき、役割を与えられる場所。《図書館》この物語は、図書”棺”の中央区画第十二階層32番地の片

隅で” 牢働” する4人の” 従人” が繰り広げる、非日常的な日常風景を綴った、ただの業務記録である。

1ー0. とある死書長補佐のプロローグ（前書き）

ド素人で超初心者な作者の初投稿作品です。

1—0. とある死書長補佐のプロローグ

『本』

『本』
『本』

『本』
『本』
『本』

[illegible]

[illegible]

視界に映る全てが。右も、左も。前も、後ろも。

あろうことか上方ですら（さすがに下は地面である）『本』という情報記録媒体で埋め尽くされたその場所で、彼女は、”ラプラス”は頬を引き攣らせながら立ちつくしていた。

黒髪に、黒いレディーススーツと、個性と言ってしまうえば元も子もない短めの黒いオフィススカートを纏った、黒一色の女性。

ココまで黒ければ、もしかすれば下着さえも黒いのではないだろうか。

黒い髪はセミロングに切り揃え、そこから覗くのは理知的な顔立ちと、そしてこれまた知知的な光を宿した瞳である。

そして女性としては”わりと”長身の部類に入る彼女の容姿は、美人と表現して誇張ではない程度に整っていた。

普通に美人である。

メリハリは少々乏しいが。そんな女性。

しかし現在、理知的な外見の彼女の眉間には形の良い眉が寄せられて深い皺が形成されており、右の頬は不規則に痙攣して、やはり形の良い口を引き攣らせている。

彼女は今、壁に包囲されていた。

否。彼女を取り囲むのは壁ではなく、本棚である。

その本棚は、”わり”と長身であるラプラスのさらに数倍は高さがあり、その棚には隙間という単語を忘れさせられるほどに、一分の一切の隙間がなく『本』が納められていた。

説明する必要もないと思われるが、彼女は完全に完璧に包囲されているというわけではなく、正確には、規則正しく整列する本棚と本棚の間の、通路とも呼べなくもない空間に突っ立っているだけである。

なんとなくイメージを持っていただけだと思うので、そろそろ彼女の現状について説明しよう。

別に彼女は、その視界に映る悪夢的な数量をほこるであろう『本の『軍勢』に慄いて、茫然自失となっていたワケではない。

ましてや、彼女がそれなりに尊敬している彼女の上使から、この『本の軍勢』を全て”読み伏せろ”などという、意味のわからない、絶望的で、もはや狂氣的な指令を承ったワケでもない。

ではどうして彼女は、生理的な気持ち悪ささえも感じそうな、この『本の軍勢』たちの中心で立ちつくしているのかと言うと、彼女の名誉のためにも言うが、決して、なんらかの歪んだ性癖によるものではない。

確かに、ここは息のつまりそうな疑似閉鎖空間である。

しかし別に、「閉鎖空間って最高!!」心臓が締め付けられるような拘束感と脊髄がゾクゾクする束縛感がたまらないわ!!」と、一般常識を覆すような性癖を、彼女は持っていない。

そもそも彼女はそんな口調ではないし。

重ねて言うが、読者様方がラプラスの人格設定を誤って認識してしまいう前に否定するが、彼女にそんな設定はない。ないったらない。

彼女がここにいるのは、この場所に來たのは、指令である。

彼女の受けた指令は実際のところ、要約すれば「業務に必要な”処物”があるからとってきて」という、長々と前述した文章を全く意味のない文字の羅列へと変化させてしまう、なんの面白みもないモノである。

ただし。

もはや恐怖すらも感じそうなこの『軍勢』の中から、その必要な“処物”を、上使曰く”たった二百冊”ほど探さなければならぬという、彼女の心境を考慮すれば、もう少し。否。面白くこそはないが、かなり同情的な感想を持つことができるだろう。

お使い、みたいなものである。

もちろん、そんな可愛らしいものでは決してなくて、むしろ嫌がらせの類であろう。

幸いなことに彼女ならば、この暴力的な視覚的效果を持つ『本の軍勢』の中から目的の”処物”を見つけたことは容易だろう。

彼女は、そんな感じなのだ。ココは、そんな感じなのだ。

ただし、あくまで探し出すのが容易なだけで、回収するのは己自身でやらなくてはならないし、なにより、”処物”のあるエリアまでは、己の脚で”歩いて”いかなければならないということである。

嫌がらせだ。パワハラとはこういうことを言うのだろう。

しかし、である。

ここで彼女の、ラプラスの都合を当てはめて考えれば、これがまた厄介な話になるのである。

厄介とは言っても、悪い意味ではなくて。

むしろいい意味で、である。

というのは、嫌がらせの中にも、ココに配属されて間もない彼女を
気遣い、この一見パワハラとも見て取れるような仕事を押し付けた
と見せかけて、彼女にこの中央区画第十二階層32番地の土地勘を
育ませようという優しさを、彼女の上使がチラつかせている、とい
うことなのだ。

なにより、件の上使さえその気なら、ラプラスがわざわざ直接回収
に出向かなくても済むのである。

何気ない顔で無理難題を言い、素知らぬ顔で自分を扱き使う癖に、
なんだかんだで自分の手助けをしてくれる、あの、憎たらしくも敬
愛するあの男のことが、彼女にとっては厄介だった。

事実として、このリストの”処物”すべてを集め終える頃には、あ
らかたこの本棚の『迷宮』を歩き尽くしてある程度は、この中央区
画第十二階層32番地の土地勘をなんとなく得た自分の姿が、彼女
に”視えている”ことが、なよりの証拠であり証明となっている。

それはともかくそういった事情があって、彼女はお使い感覚で、指
定されたこの場所に参じたわけだ。

彼女が茫然としていたのは、理不尽で無理難題で面倒くさいこの指
令の裏に秘められた、憎らしさと敬愛では憎らしさのほうが断然勝
るあの上使の優しさに気づいてしまい、不覚にも、不覚にも、ちょ
っとだけトキめいてしまった自分に対して、茫然と、いやこの場合
は自己嫌悪していたためであった

ラプラスの眼の前には運搬台車、いわゆるカートがあり、その取っ

手には彼女の右手が添えられている。

そして彼女の左手には、必要な”処物”のリストが記されたA4サイズの紙が握られている。

じつに一分半ほど（じつはそんな大した時間ではない）茫然と、自己嫌悪していた彼女ではあったが、とうとう引き攣らせていた頬と口を引き締め、理知的な、凜々しい双眸で『軍勢』をキッと睨みつけた。

さんざん理知的と表現されてきた彼女は、確かに頭は良いが外見ほど知性的ではないし、思考もどこか子供っぽく、それに意外なほどに不誠実で、この場所に来るまで、嫌だなあ、面倒だなあとか考えていたくらいである。

見た目と内面が合致する道理はないが、彼女の場合、見た目が見た目名だけに、かなり残念である。

しかしそんな彼女が、とうとうやる気を出した。

右を見る。本棚の並木が、それなりに視力の良いラプラスが、通路の先が霞んで見えない程にまで続いていた。

左を見る。以下同文。

前を見る。やはり通路の先が霞んで見えなかった。

後ろは振り返らない。振り返っても、きっと同じ光景が映るだけだろう。

上を見た。天井の概念を覆すかのような、彼女の周りに立ち並ぶ本棚と同様に、そこには隙間なくぎっしりと『本』が詰まっていた。

物理法則を無視した現象ではあるが、生憎と、こういうところなのだ。ココは。

そういうところなのだ。ココは。

『本』の『迷宮』

軽く、鬱になった。

鬱屈した気分をこらえて、下を見る。よかった。ただの地面だ。

そして、視線を前方に戻す。

「ふう……よし。行きますか」

少々低めの、しかし女性らしい透き通るような声で、彼女は宣言する。

ラプラスは軽く息を吐き、気分を落ち着かせた。

あの憎たらしくも敬愛する上使は、まあどうでもいい。

しかし、自分の仕事が遅れれば"同僚二人"にも迷惑がかかる。

それだけは避けなければならない。

もう思考はしない。

彼女は再び”視て”、自分の立つ位置から最も近いであろう本棚に向けて歩きだした。

目的の”処物”を取りに向かうために、ラプラスは歩きだした。

リストを片手に、カートを片手で押して（片手で使えば不安定なはずなのに）、本棚の樹海へ、『本』の『迷宮』へと。

この物語は、ココではない何処かに確かに存在して、決して存在しない場所。《図書館》の中央区画第十二階層32番地で牢働する4人の従人たちが繰り広げる、異世界でも現実が舞台でもない、非日常的な日常風景を綴った、ただの業務記録である。

ちなみに。

最も近い目的の本棚が二キロ先だったということは、ラプラスは考えないようにした。

1-0. とある死書長補佐のプロローグ（後書き）

プロローグで後書きも糞もないのですが、はじめまして。 ジャン太です。

なにぶん初心者でして、文章力に自信はありませんが、ここまで読んでいただけると幸いです。

まず、いろいろと意味不明な単語が出てまいりましたが……

図書”棺”てw w w ” 処” 物てw w w ” 従” 人てw w w 上”
使”てw w w ” 死” 書長てw w w

まあ、わかりにくくて申し訳ないですが、誤字じゃないです。

読み方はそのまま、” としょかん ” ” しょもつ ” ” じゅうにん
” ” じょうし ” ” ししよちょう ” です

ちゃんと意味があります。それは追々ということ。

彼女、ラプラスは主人公ではありません。主要キャラの一人です。

この物語には戦闘はありません。ラブコメもありません。ただの作者の自己満足です。

本当はもつと色々書きたいのですが、後書き故に、今回はこれで。

最後に、こんなしょうもない作者の妄想に付き合っていたいただいた皆様方に感謝と敬意を。

そして今後とも、付き合っていただけたら、と思っております。

それでは、『死書長―忘れられた図書館―』をよろしく願います。

1-1. 中央区画第十二階層32番地

歩いては行けないどこかに存在して、しかし決して存在しない場所。ありとあらゆる”いかげん”で”不安定”な連中が最後に辿り着く、そんな場所。

”図書棺”

図書”館”ではなく、図書”棺”。

その全貌を完全に把握しているものはおらず、”自称棺長”いわく、どうしようもなく広くて圧倒的に狭いらしいという矛盾を抱えた、そして、その矛盾が許される場所。

とにかく”図書棺”の、その中央区画第十二階層32番地の中心付近。

長い、長い、長い通路を歩く女性がいた。

黒髪の女性。黒髪の、スーツを纏った女性。黒髪の、スーツとオフイススカートを纏った女性。

理知的な、そこそこな長身の、少々身体的なメリハリの乏しい、美人。

とにかく、そんな女性が通路を歩いていた。

否。通路と表現はしたが、はたしてそれが通路と言えるのか。

通る路という意味ならば通路なのだろうが、常人ならば、およそ目を疑う光景であることには間違いない。

なぜなら、先ほど通路と表現したそれは、右も、左も。前も、後ろも。天井さえもが全て『本棚』と、それにギッシリと隙間なく納められた大量の『本』で構成されているからだ。

『本棚』のトンネル。

かろうじて、彼女の歩く地面は木張りの床ではあったが、物理法則の一切を無視して天井に”敷き詰められた”『本』や、どの方向を向いても（ただし下方をのぞく）半ば無理やり視界に入ってくる『本』の『軍勢』を見続けていれば、何かしらの異常をきたすだろう。

主に、精神の。

もしかしたら、もはや狂氣的とも言えるその光景に、発狂してしまうものもいるのではないか。

およそありえない状況に混乱するのが人間である。

しかし、それはあくまで”人間”のはなし。

今まさに、この通路のど真ん中を歩く、できる女のオーラのようなものが漂ってきそうなその女性。

”ラプラス”には、とてもじゃないが関係が無く、そして無縁な話である。

精神に異常をきたしそうなその光景を目の当たりにしても、彼女には関係が無かった。

彼女はそういうものなのだ。彼女たちはそういうものなのだ。

”人間ではない”彼女たちには、無縁な、どうでもいいことなのだ。さて、もしかしたらのもしかしたらで、本好きの者たちには前後左右上方と（下は除く）本で埋め尽くされたこのこの光景が、この場所が楽園のように映るかもしれない。

しかし、その光景の意味を正しく知る者がいれば”即座に”楽園という言葉を否定しただろう。

なぜなら、ここは”棺”だから。

”出来損ないども”を管理し、埋葬し続ける、棺桶なのだから。

1-1. 中央区画第十二階層32番地

ようやく”通路”から抜け切ったラプラスを出迎えたのは、やはり大量過ぎてうんざりするほどの『本』の『軍勢』であった。

しかし目に映る光景は、先ほどよりも幾分かましだろう。

広間。広すぎない程度に広く、もし”王族”だとか”貴族”とかいう人種がこの場に集まれば、社交界のダンスパーティーができる程度には広い、広間。

広間の中央には四つの執務机があり、その卓上には塔と見紛うばかりの『本』がいくつも積み重ねられている。

それどころかこの部屋の四隅には、今まで彼女が歩いてきた”本棚のトンネル”のような規則性を、まったく言っていないほどに無視して積み重ねられた、大量の『本』があった。

というか、乱雑に積み重ねられすぎた『本』によって壁が見えないでいた。

ふとラプラスは天井を見上げるが、しかし、そこそこ視力のいいはずの彼女の瞳には天井は映らない。

暗闇。恐ろしいほどに高い、吹き抜け天井。

先ほどの通路のような、今にも大量の『本』が押しつぶさんとしてくるような圧迫感はないが、天井が高すぎるせいで、もはや暗闇としてしか映らない吹き抜けは、それはそれで恐怖感を煽る。

この広間は、”図書棺”の中央区画第十二階層32番地の、ちょうど中心部にあたる。

広間の片隅には螺旋階段があり、上階と下階を繋げている。だからといってこの階段が第十一階層と第十三階層に繋がっているかと言われれば、そうではない。

この広間からは下階の様子こそうかがえないが、吹き抜けによって上階の、各階の真四角に切り取られた空間の、その外側ならかろうじて見えなくもない。

まあ、説明するまでもなく『本棚』とそれに押し込まれた『本』しか見えないが。

ちなみに、”図書棺”には電灯も、ランプも、文明の遺産がほとんど存在しない。

だというのに、ラプラスが通ってきた通路もこの広間も、”適度な明るさを保っており、不自然に自然な光が”彼女たち”を包んでいた。

なんとなくだがラプラスは、この明るさが読書に最適な明るさに保たれているようにも思えた。

しかしそこで否、と区切る。おそらく、きっと、ほぼ間違いなく。彼女の思った通りなのだろう。

この”図書棺”という空間全域が、”本が読みやすいよう”に、適度に明るさを保っている。

理由なんてないし、理由なんていらぬ。

そういうところなのだ。ココは。

ここ配属されてしばらく経つが、ラプラスは、未だにこの空間に慣れないでいた。

まあ、それはともかく。

先ほど、”彼女たち”と記したとおり、この場所にはラプラス以外

の人影が三つほど在る。

一人は、ラプラスとは真反対に、何もかもが白い青年。

一人は、淡い青を基調とした寒色系のゴスロリ服を着た少女。

一人は、地味ではないが派手でもない、茶色いスーツを纏った少年。

皆一様に、執務机に向かっており、その手は作業を止めることなく、忙しなく動いている。

では一人一人紹介していk「お、なんだ来てたのか」―――空気を読んでほしい。

ふう、とラプラスは息を吐きだし彼女の思考に介入してきた人物、白い青年に避難の目を向ける。

「これから私、みなさんを一人一人親切丁寧に紹介しようと思っ
いたんですけど…」

「御前は何を言っているの？」

白い男が呆れ顔で突っ込む。

理知的な雰囲気のラプラスではあるが、中身がそれに伴うとは限らない。

実は外見からは想像もできないほどに彼女は子供っぽいところがあることを、この場にいる彼女以外の三人は知っている。

「そんなことよりもです！とにかく私は皆さんの人物紹介をするつもりだったんですよ！いいんですか！？このままだと皆さん”白い男”に”ゴスロリ服の少女”に”茶色いスーツの少年”みたいな感じで認識されちゃいますよ！！」 読者様方に！！！」

「読者様とか言うな。それに、誤魔化せるとか思ってたの？」

「ッ！？なにがですか…？」

「……はあ」

ラプラスの思考に介入（これだけだと何かしらの特殊能力みたいに聞こえるが、この青年はそんな能力を持ち合わせていない）した青年が大きく溜息をつく。

白い男。髪も、服も、その上に纏うコートも。純白の化身であるかのような何もかもが純白の青年。

ただ唯一両の瞳は蒼いが、それ以外はまさに穢れの無い純白のようである。中身がそうであるとは限らないが。

中央区画第十二階層32番地担当死書長。

ラプラスの”上使”。

”マクスウェル”

それが、この白い男の呼称である。

呼称というのも、彼がそう呼ばれているというだけで、彼本来の別

の名前があつたのかもしれないし、もしかしたら名前なんて無かつたのかもしれないが、今現在において彼を”マクスウェル”としか呼ぶことができない。

しかし、そのことは彼の知人全員が納得していることだし、もちろん、この場にいる彼以外のラプラス含む三人も納得していることだ。というか、厳密には、”図書棺”に存在するモノたちに明確な名称は存在しない。

そもそもの話、本来なら”図書棺”という空間において名前なんてものに意味はない。

意味は、なかったのだ。

しかし無いなら無いで不便ということで、この”図書棺”の”自称棺長”が、一人一人にそれらしい名前を、無意味に、無駄に意味深な名称を付けたただけなのだ。

それはラプラスに関しても例外ではなく、この場に存在する”あと二人”もまたその通りだといえる。

まあとにかく。

マクスウェルがラプラスを少々のだれ顔で睨み、同時に”ゴスロリ服の少女”と”茶色いスーツの少年”もまたラプラスに顔を向ける。

「遅刻だ」

マクスウェルがだれ顔で言い放ち、

「遅刻よ」

”ゴスロリ服の少女”がジト目を向けて言い放ち、

「遅刻です」

”茶色いスーツの少年”がニコニコ笑顔で言い放った。

そう。彼女は遅刻したのだ。

「うぐう……」

ラプラスの顔が引き攣った。自覚はあるらしい。というか。もしかしたら、ここまでの長々しい文章は、彼女の現実逃避だったのかもしれない。

否。作者の実力不足である。

言い返したいのだろうが、マクスウェルよりも、”ゴスロリ服の少女”よりも”茶色いスーツの少年”よりも。こも場にいる誰よりも。遅刻したという事実を除いても。

できる女風の理知的な美人、ラプラスは立場が下だったのだ。

まだ配属されて十二日目の新入りである。雑用も任され放題である。

それはともかく。

”図書館”には、時間というものが存在しない。

過去はないし、未来もないし、限りなく現在が続くだけである。

理解不能な空間。理解を求めてはいけない空間。それが”図書館”。

しかし、それでも過去はあるし、未来だってあるし、現在もまた移り変わっていく。

そういうところなのだ。ココは。

まあ時間はなくとも時計（数少ない文明の遺産である）は存在し、時間が存在しないゆえに針を進めない時計も、今は”理由”があつて時を刻んでいる。

そんなわけで、この広間に存在する立派な四つの執務机には、それぞれに一つずつ、大小種類様々な時計が居座っている。

「あの、聞いてください。これには深い理由があつて――」

「知らなかった。”寝坊”というのは遅刻の、それも深い理由に定義されているのか？」

「ちょっと!! なんで寝坊したのなんで知ってるんですか!？」

「オレが”そういう存在”であることを、御前は知っているはずだが？」

「ちくしょうッ!？ そうだった!!?」

美人（設定上）が”ちくしょう”とか叫ばないでほしい。ラプラス

は理知的な美人なのだ（これも設定上）。

外見上は、だが。

理知的で、できる女のオーラを放つ女性（中身がそれに伴うとは限らない）が騒いでいるが、マクスウェルはゴスロリ少女とスーツ少年に問いかけるが、もちろん答えなんてわかりきっている。

寢坊。当然ながら深い理由ではないし、遅刻していい理由なはずがない。

「そんなわけじゃないじゃない。ていうか、寢坊で遅刻なんて子供のいい訳じゃないの？ その身長を私に寄せさせてのよ」

「まあ、落ち着いてください。ラプラスさんが子供っぽいのは今に始まったことではありませんし」

「そ・れ・で・もッ！　なんでこんな見た目だけのアホな奴の身長が高くてワタシがこんなに小さいのよーッ！！！」

「僻まないでください。でも、”また”遅刻ですか。いい加減にしてくれないと困りますよ。ああ別にボクが困るのはこの空間の風紀が乱れるというだけで、貴女が遅れた分の仕事についてはどうでもいいんです。どのちみち大した量ではありませんしね。この際だから言いますけど僕は貴女に期待なんかしていませんし」

酷い言われよう（途中から妬み、最後は悪口）であるが、この二人の言うとおりである。

実はこのラプラス、この中央区画第十二階層32番地に配属されて

から、かれこれ12回の遅刻をしている。――配属されて、毎日遅刻している。

そしてそのラプラスと言えば

「……………」

落ち込んでいた。

三人に背を向け、膝を抱えて”の”の字を書いていた。うざい。そして子供っぽい。

未だに騒ぐ”ゴスロリ少女（少々省略）”と”スーツ少年（少々省略）”は一先ずおいといて、さすがに不憫に思ったのか、マクスウェルは助け船を出す。

「まあ、あれだ。知的ぶるのは別にいいけど安心しろ。ここにいるのはオレを含めて全員が全員、御前の残念さの具合に気づいてるから」

「どこをどう安心しろって言うんですか！！ 欠片も安心できる要素が見当たりませんッ！！？」

「おお、復活した復活した」

ガバツと起き上がったラプラスがマクスウェルに詰め寄った。

どうやら助け舟を出したわけではなかったらしい。結果として、ラプラスは復活したが。

と、そこにいままで騒いでいた”ゴスロリ少女”とニコニコとラプラスを罵倒していた”スーツ少年”が声をかける。

「で？　いつまでこんな遣り取り続けるワケなのよ。こんな調子だと読者様に飽きられちゃうじゃない。」

「読者様とか言わないでください。同感ですけどね。とにかく、急ぎの用件という訳ではありませんが、その役立たず……無能に任せるなら早めのほうがよろしいのでは？」

「ああ。俺もそう思っていた」

「もういいですよー（いじけた）——ッて、私に用事ですか？　というか、もしかして——」

またもや精神にチクチクガリガリとダメージを与えられていたラプラスだが、何やら自分に仕事があるらしいという雰囲気は一瞬で立ち直った。

仕事だけは、真面目にこなすのである。遅刻はするが。

ラプラス。”図書棺”中央区画第十二階層32番地”軌録”室に所属する”死書長補佐”。

主な業務は”処物整理”に”処物軌録”、あと——雑用。

そして、

「ああ。”真路”相談だ」

結末に迷った物語たちの――”手助け”である。

「ああそれと、そろそろ御前視点でのストーリー進行は終了するか
ら」

「……え？」

1-1. 中央区画第十二階層32番地（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございます。

ジャン太です。

長々とすみませんでした。初心者ゆえに省略できるところを省略できず、やたらと表現したがつてしまいました。

そのあたりの感覚が分かるようになります。

なによりも、やばい……話がほとんど進んでないです。

どうしよう。ていうか今回三人ほどキャラが登場したけど名前を出すことができたのが一人って……

公開しても仕方ないので、後書きします。

いませんか？ 外見と中身が伴っていない人。

いやいや、いいですよ？ 作者的にはそういう人があるのは当然だと思ってますし、

そういう人がいてもいいと思います。

つまり、”ラプラス”ちゃんはそういう存在なんです。

”ラプラス”と聞いてピンとくる方もいるかもしれませんが、彼女の名前や存在については今後、物語で描けたらいいなと思っています。

では、いくつか作中用語について。

” 図書館 ”

……意味不明ですね。この物語の舞台となる空間のことです。舞台となる”世界”ではありません。あくまで”空間”です。とにかく大量の『本』と『本棚』があって、とにかくクソ広い場所をイメージしていたらいいと思います。

” 従人 ”

……やっぱり意味不明ですね。”従う人”たちのことです。”図書館”に存在する”意志を持った存在”のことを指します。何に従っているのかは追々…

” 処物 ”

……これも意味不明ですね。これからは『本』のことを”処物”と表現させていただきます。現時点で言えることは、これらに記されているのは『物語』である、ということだけです。

” 軌録 ”

……ごめんなさい。これも意味不明ですね。作中では”軌跡を記録する”という意味で使用されています。

” 死書長補佐 ”

……”ラプラス”ちゃん（あ、いまさらですが作者は登場キャラクターのことは”ちゃん”、”くん”と呼びます）の役職です。業務内容については次話で。

意味不明な作品だと作者自身感じています。所詮は自己満足の作品です。

もし、この作品を理解しようと思ってくださる方がおられるのなら、完結まで付き合っていたただけたら幸いに思います。

駄文に付き合っていたいただいた読者様方に最大の感謝を送りたいと思います。

次回からはストーリー進行の視点が”マクスウェル”くんに変わります。

それでは次回もよろしく願います。

1-2. 真路相談（前書き）

ラプラス

「ああ！！ 本当に視点変わってるし！！」

マクスウェル

「だからそう言っただろうが」

1-2. 真路相談

” 真路相談 ”

” 進 ” 路相談ではなく、 ” 真 ” 路相談。

もしくは、 ” 新路相談 ” とも言われることがある。

” 死書長 ” と呼ばれるモノたちの主な業務内容の一つに数えられ、同時に次期 ” 死書長 ” 育成のための ” 最重要カリキュラム ” とも言われている。

次期 ” 死書長 ” とは、つまりは ” 死書長補佐 ” のことである。

黒い髪の理知的な美人、ラプラスもまた ” 死書長補佐 ” であり、彼女もまた次期 ” 死書長 ” となるべき存在とされている。

” 真路相談 ” の、その業務の内容を語る前にまずは ” 図書館 ” について少々の説明をするべきだろう。

” 図書館 ”

見渡す限りという訳ではないが、視界に入る情報に必ずと言っていいほどに、確実と言っていいほどに『本』という情報記録媒体が映り込む、そんな場所。

前後左右上方（さすがに下方は地面）のあらゆる場所という場所に『本棚』が規則正しく設置されており、その『本棚』の中には『本』が無駄なく、隙間なく詰められているという、そんな常軌を逸脱し

た空間。

何時から存在するのか、何時から存在しているのか。あるいは存在していない時期があったのか。

そう言った疑問が、まったくと言っていいほどに意味が無くなるくらい、”ソレ”は在り続けている。

どこかに存在し、しかしどこにも存在しない空間。

ありとあらゆる”どうでもいい”こと、または”定義不定”な存在たちが最後に辿り着いて役割が貰える場所。

本好きの人間が見れば楽園と称してもおかしくないこの場所は、しかし、真の意味でこの場所を認識している存在にとてはそうではなくなる。

”棺桶”

”出来損ない”たちを監理し、埋葬し続ける巨大な棺桶。

それが”図書棺”。ゆえに”図書棺”。

その”図書棺”に辿り着き、役割を得た存在たちのことを”従人”という。

それらの存在は、何かに尽き従うかのように”牢働”する。

無自覚に、自分の意思で。

しかし、今は彼らのことは置いておこう。

今まさに重要なのは別にある。

”処物”

それは、完全を模範した劣化複写の記録。

それは、完璧になり損ねた中途半端な世界。

それは、完結を目指した創造者たちの残骸。

”処理されるべき出来損ないの物語”

さて、ここで話を戻そう。

”真路相談”とは、そういった”出来損ない”にすら成りかねているどうしようもない物語を、”一応の終焉”に導く作業のことを言う。

そしてそれは、ある意味”世界を終わらせる”為の作業とも言えることを、彼女は、ラプラスは知っていた。

1-2. 真路相談

あまりにも広大で、しかし同時に限りなく狭いとされる矛盾が許される空間、”図書館”。

その『本棚』と『本棚』をつなぎ合わせて形成されている通路（本来の意味はともかく、通る路という意味での）を進む四つの影が在った。

一つは長身の青年。一つは割と長身の女性。一つは成長期手前の少年。一つは小柄な少女。

その先頭を歩く青年、ありとあらゆる要素が、あまりにも白すぎる青年、”マクスウェル”が口を開く。

「今の今まで配属されてから主に残念な部分しか目立たなかった御前だが、今回ばかりは雑用だとか雑務とか言う言葉とは無縁の、死書長補佐としての初めての業務になる」

少々の軽薄さが伺えるが表情は真剣そのもので、彼を構成する要素の中で唯一蒼色な両眼が、彼の隣を歩く女性”ラプラス”を射抜く。

一步一步と歩を進めるたびに、彼の纏った白すぎるロングコートがはためいて、ちょっとした格好良さを演出している。

「おおまかな内容は先程に話したとおりだが、別に心配する必要はない。今回はあくまで、”この業務”がどんなものか御前に認識してもらうためだけに用意された特別なヤツだ。失敗なんて考えずにとにかくやってみることだ」

普段の、いい加減で意地の悪い表情はなりを潜め、今現在の彼は誠実そのものである。

もともとそれなりに、否。それなりどころか、美形と表現されて恥ずかしくないほどの、いやいやむしろ、美形という言葉が裸足で逃

げ出すような端正な顔立ちを（実は）しているマクスウェルである。もしこの場に彼を初見で眼にする女性でもいれば、一瞬でトキメいていたかもしれないが、そんな都合のいいことなんておこらないし、現実としてこの場にいる女性は普段の彼をよく知る二人がいるのみで、そんな展開に発展することは断じてない。

普段のマクスウェルは、意地が悪いながらも言葉の裏に優しさをちらつかせるという、非常に面倒くさいスタンスを取っているが、コレは彼の”全て”に影響を与えた”とある人物”によってもたらされた結果の産物である。

”図書館”に来る以前の彼を知っているものが見たら、マクスウェルの普段の姿にしつる真面目な表情にしろ、どちらにしても信じられない姿だろう。

まあ、そんなことはこの場に存在するものたちの知ったことではないし、この物語には関係のないことなので詳細は省略する。

「とまあ、いつになく真面目になってみたんだが——どうした？
とんでもなくテンション低いんだけど」

「——本当に終わってるし……」

「いやいや、なにが？」

マクスウェルの疑問もつともである。彼女は、本当に何の話をしているのか。まさかストーリー進行の視点が彼女からマクスウェルへ変わったという訳でもあるまいし。

いや、まあ…変ったんだけど。

とにかく、今度はマクスウェルとラプラスの後ろを歩く”二人”が口をはさむ。

「終わってるって：自分の頭のことじゃないの？ 自分の頭の残念さをようやく理解したにしても、ずいぶん遅すぎるわね。ねえ、このことを”ルール”ならどう例えるのかしら？」

最初に届いた声は、少女らしくも大人っぽさを含ませた口調の、やはり少女らしい高い声。

鈴のよう、とは誇張であるが、そうでなくても、聞いていると落ち着く不思議な高い声。

淡い寒色系のゴスロリ服を着た少女。

ゴスロリ服を着た、大人っぽい少女。低身長。きれいな銀髪。

あと、ツリ目。

あからさまに狙ったようなキャラ設定だが、彼女はそういうものらしい。

彼女は”エリユション”

呼称ではあるが、間違いなく彼女を表す名称であろう。

そして彼女に話題を振られた人物、彼女の隣を歩く存在が口を開く。

「いえいえ。あまりボクを過大評価されても困りますよ”エリユシ

オン”さん。正直な話、こんなゴミのようで、かろうじて容姿にか取り柄のない存在を表現するには、ボクの語学力では到底不可能ですよ。役立たずで業務の邪魔にしかならないうえに、配属されてから十二回の出勤を十二回とも遅刻してくるような女性ですよ？ コレは。しかしまあ、今回の”真路相談”を経て少しはマシになってほしい程度の希望くらいありますよ。……期待はしてませんが、ね」

次に聞こえたのは少年特有の柔らかさを残した、これまた少年らしい声。

茶色いスーツを着こなした少年。

茶髪をきつちりと切りそろえ、目が悪いのか丸眼鏡をかけている、そんな少年。

ニコニコとした嘘っぽい笑顔を浮かべ、しかし同時に騙されるものは騙されそうな、人の良さそうな笑顔を浮かべながら平気でラプラスを罵倒してのける少年。

やっぱりあからさまに狙ったようなキャラ設定だが、彼もまた、そういうものなのだ。

彼は”ルール”

やはり、呼称である。

「御前ら……少しは容赦しろって。特にルール。コイツが”真路相談”前に使い物にならなくなったら御前のせいだからな……おい、大丈夫か」

珍しくマクスウェルが本気でラプラスを氣遣っているが、その心配は無用となる。

「二人の名前……あっさり出しちゃうんだ」

どうやら問題はないようだ。しかも気にしないでいいことまで気にしているし。

「……あっそう。大丈夫そうだな」

マクスウェルもとうとう諦めたらしい。否。もしかしたら真面目なキャラを通すのが面倒になったからかもしれない。いや、きっとそうだろう。

四人が辿り着いたのは小部屋である。

中央区画第十二階層32番地の一角。通称”面説室”。

「あの…死書長、ここでやるんですよね？ ”真路相談”」

そこには割と立派な執務机と、その机を挟んでこれまた立派な椅子が二脚在るのみで、普段から異常な光景に見慣れているラプラスにとっては、少々拍子抜けな光景が広がっていた。

説明するまでもないが、やはりこの部屋も『本』と『本棚』で構成されているということは言うまでもない。

ようやく名前の出てきた”エリュシオン”と”ルール”の二人は”面説室”の外に待機している。

「さて、ラプラス。今回の”真路面接”はあくまで実習だ。つまり、本番ではない」

本来の”真路相談”は一对一で行われる。

面説対象者と死書長の、二人。

しかし、この場にはマクスウェルとラプラスがいる。つまり、死書長サイドが二人存在することになるが、今回の”真路相談”は、あくまでラプラスの実習である。

マクスウェルはフォロ―。メインとなるのはラプラス自身であると、彼女は認識していた。

ラプラスは用意された椅子に座り、卓上に並べられた資料を見る。

分厚い『本』が二つと、一纏めにされた書類が十数枚。

彼女にとっては見慣れた、見飽きた『本』。

つまりは”処物”。”処理されるべき出来損ないの物語”。

この”面説室”に来るまでの通路でも、目が腐るのではないかと言うほどに目にした。腐らないけど。

というか、ラプラスが”図書館”で自己を認識した瞬間から目にし

てきた、『本』。

どれもこれもが一定のサイズと大きさに統一されており、その内容は文字だとか文章では到底表現しきれなくらいに複雑で、一次的で二次元的で三次元的で、究極的には多次元的なものであるということを、彼女は知っている。

ようやく、自分の置かれた状況に実感が持てたのか、彼女特有の雰囲気。できる女の雰囲気が増えだしてきた。

彼女は無能ではない。思考回路が、ちょっと残念なだけである。

気持ちを落ち着けて、腹を括る。

「よしッ!」と己に気合を入れて、卓上の”処物”の表紙を見た。

そこで、再び彼女の張りつめた雰囲気が途切れた。

表紙を見る

見る。

再び見る。

目をこすって、もう一度見た。

……『魔剣天使ロイアルまりん!?!』

「……あの、”コレ”……どういことなんでしょうか?」

「“処物”だ」

「いやあの、そうじゃなくて…ですね？」

一気にだらけた雰囲気が漂いだす。マクスウェルは真面目モードだが、ラプラスは先程の凜とした雰囲気がどこに飛んで行ってしまったんではないかというくらい、だらけていた。

「気持ちわかる。しかしそれは紛れもなく“処物”で、どうしようもない現実だ。問題無い。初めはそんなものだ」

「いつになく真面目口調なのが逆に不安なんですけど…」

もう一つの『本』も………『魔剣天使ロイアルまりん!?!』

手元にあるのは二つの『魔剣天使ロイアルまりん!?!』

それを眺めているのは黒髪黒衣の知的な美人。シニールである。

「あのお、マクスウェル死書長？」

「なんだ？」

「本当にあってるんですかコレ？　なんか同じ“処物”が二つあるんですけど…というか、この光景を否定したい気持ちでいっぱいなんです」

「言っただろう？　今回は御前の…”死書長補佐”の実習だから、通常とは少々異なる仕様になっている」

「はあ……」

”真路相談”とは、完結の目処が立ってない物語を”完結に導く”という、”死書長”の業務の一つ。

それは死書長補佐という役職に就く直前に彼女が大雑把に説明されたことと、”面説室”へ至る道中で聞かされた予備知識を彼女なりにまとめたものだ。

ラプラスはそう認識していたが、どうしていきなりこんな事態になったのであろうか？

そういえば、どちらの説明にしても、一度実践してみれば嫌でも理解できる、と言われたような気がしたが、コレがそういうことなのだろうか？

二つの”処物”とともに卓上に並べられた書類を手に取り、パラパラと捲りながらその内容を読む。

前半分…というか最後の一枚以外は『魔剣天使ロイアルまりん！？』の概要のようだ。

主人公の”花宮まりん”が魔法の剣を拾って（読み飛ばした）の、長編アニメ。

全6部作。深夜アニメとしては異例の（読み飛ばした）二次創作作品や同人作品なども数多く存在し……

だめだ。これ以上は読む気が起きない。

二つの『本』の表紙を見る。

十歳前後の少女がアニメ調で描かれており、タイトル通りなのであれば”魔剣”なのであろう巨大な剣を構えてポーズを決めている。

それだけならまだいいが、服装が異様にきわどいもので、正直現実世界にいたら補導されるのではないかと思ってしまうようなソレだった。

「いいや間違いない。その二つのうち一つが、今回の”真路相談”の”処物”になる」

否定したかった事実には、マクスウェルが止めを刺した。

つまり、彼女の初の”真路相談”は、この”萌え系バトル魔法少女”的な物語の、”面説”になるようだった。

書類を読み進めると、面説対象者は22歳の男性らしい。

やる気が削がれる。

「……私に、どうしろと？」

「その男を導いてやってくれ」

「聞いたことがありそうな賢者みたいな台詞で誤魔化さないでくださいよう……」

『真剣天使ロイアルまりん！？』への転生希望。

さらに書類を読み進めると、趣味はアニメ鑑賞。

職業……無職。

「……………」

「がんばれよ」

後ろの”白いの”がうるさいが、それどころじゃあない。

”いろいろ”あって死書長補佐という役職に就き、はじめこそ乗り気ではなかったが、ラプラス的にはかなり真面目に取り組んできたつもりだったし、それに忌々しいが後ろの”白いの”のことはそれなりに尊敬している。

たしかにラプラスの認識が少々甘かったことは、認めなければなら
ないのだろう。

しかし実習とはいえ、初の”真路相談”が”ニートのロリコン野郎
(彼女の勝手な妄想。あながち間違いではない)”というのは、あ
んまりではないだろうか？

「何を落ち込んでるのかは知らんが、いや、なんとなくは理解でき
るが、落ち着け」

「もうイヤですう。勘弁してくださいようううう……」

「幼児退行するな。御前の身長と無駄に知的な顔立ちだと気持ち悪
くて仕方がない。諦めろ」

ふう。とマクスウェルは息を吐く。

まあ、”図書棺”にいる存在は、本来性別に意味の無い半端物のようなものではあるが、やはり女性体として存在するからには、その”テ”の連中は苦手なのであろうか。

ともかく、マクスウェルは”自分用に配布された手元の書類”を流し見る。

この書類の情報が確かならば、おそらく、彼女の死書長としてのいい経験になるだろう。

どうもラプラスは、”真路相談”に対して妙なイメージを持っているらしいことを、マクスウェルはこのやり取りで感じ取っていた。

まあ、”真路相談”が持つ本来の意味と役割を”あえて”教えなかったのはマクスウェルであるし、むしろそれは、この”図書棺”における”死書長”育成の方針みたなものであるから仕方ないのかもしれない。

渋々と（本当に諦めたらしい。覚悟を決めたともいう）事前知識の書かれた書類をパラパラめくっているラプラスを視界に収め、マクスウェルは思案する。

ラプラスは”新入り”である。

中央区画第十二階層32番地の、ということではなく、”図書棺”に彼女が”発生”してから、という意味だ。

彼女は知らなすぎるのだ。

この”図書館”を。

そして”処物”とよばれる物語たちが……”ソレら”が、如何に歪で、救いがないのかを。

マクスウェルの持つ書類の、ラプラスが持つ書類には書かれていない、最後の項。

書類の最後にはこう書かれていた。

物語状況…打ち切り、と。

1-2. 真路相談（後書き）

どうも、ジャン太です。

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございます。

ここまで読んでくださらなかった方々も、ありがとうございます。

相も変わらず長々しくて意味不明で申し訳ありません。

今回の後書きは短く済ませます。今回は特に言うことは、ジャン太としてはありませんので。

もっと、短くて分かり易くて面白い作品を目指して精進したいと思っています。

では、作中用語をいくつか。

” 真路相談 ”

……意味の無い当て字ですね。作者も理解してます。作者としては、” 物語の完結への真なる路を相談する ” という意味合いを持たせてます。

” 中央区画第十二階層32番地 ”

今回ようやく名前の出揃った四人が業務に勤しむ場所。無駄に長くて申し訳はないのですが、” 図書棺 ” がメチャクチャ広いということを意識してもらうために、わざと長々とさせました。

”死書長”

……各階層の番地ごとに存在する、そのエリアの最高責任者のことです。

”処物”

……もうちょっと具体的な情報を本編で出せたときに説明をさせていただきます。

それでは、次回もまた読んでいただけたら幸いです。

1-3. 処物(上) (前書き)

この物語は作者の趣味で描かれています。

独自理論展開中です。理解不能な可能性が高いです。

それでもよろしければ、どうぞ。

1-3. 処物(上)

” 処物 ”

それは、完全を模範した劣化複写の記録。

それは、完璧になり損ねた中途半端な世界。

それは、完結を目指した創造者たちの残骸。

” 処理されるべき出来損ないの物語 ”

” 図書館 ” はそれらを監理し、そして ” 死書長 ” たちによる ” 真路相談 ” によって、 ” 一応の終焉 ” へと導かれる。

しかし ” 図書館 ” で監理される ” 処物 ” の全てに ” 真路相談 ” が必要かと聞かれれば、そうではない。

監理されているうちに自己終結してしまう ” 処物 ” もあれば、終結した状態で ” 図書館 ” に納められる ” 処物 ” もまた、存在する。

物語とは、つまり ” 世界観 ” である。

そもそのところ ” 処物 ” とは、とある ” 完全 ” で ” 完璧 ” で ” 完結 ” した世界を基盤として模範された、あるいはその世界から溢れて零れ落ちた、 ” 異世界 ” ないし ” 平行世界 ” の記録を多次元的に書き留めたものなのだ。

そういう意味では、 ” 処物 ” とは世界そのものであると言ってもい

いだろう。事実、その通いな訳なのだが。

そして世界を書き記した”処物”ではあるが、前提として、それらが物語として成立しているのならば”主人公”というものが存在しているのは当然のことだろう。

”真路相談”とは、そういった物語の”主人公”と”面説”し、物語を終焉に導く手助けをするのだ。

そして中央区画第十二階層32番地の一角、通称”面説室”。

その片隅に佇む何もかも白い青年。

マクスウェルの視線の先で、部屋の中央で立派な執務机と椅子に鎮座している、何もかもが黒い理知的な美人、ラプラスは今まさに、その”真路相談”と”処物”の本質を目の当たりにしていた。

1-3. 処物（上）

転生。

てんせい。

「生まれ変わる」意の漢語的表現。てんしょう。「輪廻転生」

しかし、今回は「輪廻転生」という概念とはまったくもって無縁な話なので、コレは放置しよう。

今回注目すべきなのは、正しく「生まれ変わる」という意味である。創作小説や二次創作小説において、わりとメジャーなジャンルであり、この”図書棺”に納められる”処物”の一部もまたコレを題材とした物語が多々ある。

転生系二次創作と称されることもあり、その物語の主人公は転生系オリジナル主人公……通称”転生オリ主”などと呼ばれることもある。

それに転生と一言にいても、そこから更にジャンルが存在し、一つ一つ挙げていけばキリがない。

それは置いていて。

不慮の事故、神の悪戯、死神の手違い、自殺などの原因にして……：というか、元も子もない言い方をすれば、そういった”設定”を持ってに物語に介入する、または介入してしまう主人公を”転生オリ主”という。

ときには特別な力を授かり、ときには理不尽な展開を決定され、ときには原作の根本を崩壊させる等、とにかく”原作と異なった展開”を演出するために、彼らは生みだされるのだ。

とにかく、今まさにラプラスの目の前、立派な執務机を挟んだ反対側の、これまた立派な椅子に突然と現れ、異様なテンションではしゃいでいる人物、22歳無職の男性もまた、”オリ主”なのであった。

「ぬうおッ！！　　なんかクールビューティーな美人がいるしッ！？」

なんだなんだ誰だ誰だ!? オリキャラかッ!!!」

……いいや、そうであればよかったのだが、そうではないのだ。

この男性は、現実からファンタジー世界へと”事実として”転生させられる途中なのであった。

まあ、ある意味では正しく”オリ主”なのだが、彼は二次創作を盛り上げる要素としての”オリ主”ではないと理解してくれればいい。

「ていうかここどこッ!! 狭いし本は一杯だしッ!! ああッ! ? なんか隅っこに”白いの”いるしッ!!!」

男性がうるさいし、そろそろ本編を進めないといけないので、男性の異様なテンションに逆に落ち着いてしまった(引いたとも言ふ)クールビューティーな美人、ラプラスには事前に説明された手順どおりの対応をしておらおう。

ちなみに”白いの”とは、言うまでもなく”マクスウェル”である。

ともかく、マニュアル通りにラプラスが切り出す。

「■■■■様でございますね。私はラプラスと申します。今回のみに限り、■■■■様のサポートをさせていただきます」

思考の残念さを、凜とした佇まいで覆い隠して対応するラプラスの姿は、ただしくオフィスレディである。

「は? サポート? いやいや神の野郎は何にも言ってなかったけど、え? そんなサービスまでしてくれんの?」

ラプラスの残念具合は、この無職男性の知ったことではないだろうが。

ふと、この短いやり取りの間に、能力だけは優秀なラプラスは違和感を覚えた。

この男性、テンションや言動の切り替わりが早い。

どころか、こんな状況にも既に適応し始めている。

”人間”という存在には、およそ当てはまらない状況適応能力。

ラプラスはそこまで思考したが、その違和感の解答はあっさりと見つけた。

この男性は現実からの転生希望者（というか転生の真っ最中）で、それによって紡がれる『魔剣天使ロイアルまりん!?』を原作とした”処物”の主人公である。

”事前知識”の通りなら、もしかしたら、既に主人公らしい”属性”が植えつけられているのかもしれない。

これが、物語の”主人公”なのか。

ラプラスはそう自己完結したが、それが当たらずとも遠からずであることを、この後すぐに知ることとなる。

「ていうか、え？」 図書館”？ たしかに本はたくさんあるけど………もしかして”アカシックレコード”!!!?」

「ちがいます」

「あ、ちがうんだ」

コホンと息を吐いて、ラプラスは手元の書類を見る。

「我々は”アナタのような存在”を導くために存在しています。転生直前の人間に関与して、彼らの思うような物語を築くための、さやかなお手伝いをさせて頂いております」

「へえ。つまりは一回だけのナビゲーター、てことでok？
つか神の野郎は何にも言ってなかったんだけど？」

「前半に関してはその認識でよろしいかと。後半に関しては、我々は”そういった存在”とはまた別の存在である、という認識を持っていただければ……お望みでしたら説明しますが？」

嘘だが。ナビゲーター云々は半分合っているが、後半は完全に嘘である。

まあ、嘘もこの業務の一環らしいのだが。

「いや、いいいいいよ。とにかく……えーと、ラプラスさん？は俺の手助けをしてくれるんだよね？ ……もしかして攻略対象だったりする？」

「しません」

もちろん即答である。ここで作者（ジャン太）の意思を介入させる

が、この作品にラブコメ要素を取り入れる気は一切ないらしい。

「……あ、ああそう。じゃあさ、ラプラスさんの後ろの人は誰よ？ さっきから部屋の隅にいて気になってたんだけさ？」

部屋の隅。マクスウェルのことである。

「彼は……私の”上使”です」

「上司？ ラプラスさんの部下じゃなくて？」

「はい。……そうですね、彼は監督のようなものだとは認識してください」

「ふん」

しげしげと、という訳ではないが男性はチラチラとマクスウェルを見ている。外見だけなら”できる女”に見えなくもないラプラスである。男性は、ラプラスが上司でマクスウェルがその部下か何かだとも思っていたのだろう。

「では、よろしいでしょうか■■■■様？ そろそろ本題に入らせていただきます」

いまだにマクスウェルとラプラスを「やっぱラプラスさんのほうが上司っぽいんだけどなあ」などと見比べていた男性が、背を正す。さすがに空気を読んだのか、今まで騒がしかった口を閉じた。

というか机を挟んで真正面に座る理知的な女性に見つめられて、少々の緊張を見せていた。

「まずは、■■■■様。あなたは『魔剣天使ロイアルまりん!?!』の世界に転生をご希望のようですが、間違いありませんね?」

「ああ。神も転生させてくれるって言ってたし……アレ? もしかして転生できないのッ!?!」

「できます」

「あ、できるんだ……よかったあああああ。てっきり転生ができなくなったものかと思って焦っちゃいましたじゃないか……あ、話続けて」

「……。まあとにかく、アナタは転生後に主人公である”花宮まりん”の幼馴染ポジションとなるわけです。……確認しますが、アナタは『魔剣天使ロイアルまりん!?!』の世界へと転生して、その世界で生きていく覚悟はありますか?」

覚悟。とラプラスは言ったが、この確認の答えを彼女は理解していた。

彼女が直接”視る”必要もない。

「ん、あたりまえだ。そりゃあ死んだ時はさ、いろいろ焦ったし茫然としたけど、これだけははっきりと言えるよ」

ラプラスは思う。人間はそうそう簡単に割り切れる生物ではないし、なによりも究極的な話、根本的なところでは”フィクションをフィクションとして受け入れ”、現実的には否定しているのだ。

”ファンタジー”を。

顔には出さないが、やはりラプラスは、男性に言葉にできない”違和感”を感じていた。

「”覚悟はある”」

男性の真剣な眼差しを受けるラプラスは、反対にどんどん思考が冷めていく。

まあとにかく、今の彼女は”真路相談”をするにはうってつけの精神状況と言えるだろう。

「わかりました。では……少々失礼」

言って、ラプラスは身を乗り出す。知的な光を宿した双眸が見開かれ、黒い瞳孔が男性を”捕えた”。

「ら、ラプラスさん!？」

「問題ありません。少々”視させて”いただいてるだけです」

しばらく見つめ合い（男性主観）、ラプラスが口を開く。

「……あれ？」

「ん？ ラプラスさん？」

「い、いえ……問題ありません。早速ですが……その、なんというか」

ラプラスの先程までの落ち着いた姿勢が嘘のように乱れ、挙動が怪しくなる。

つまり、落ち着きがない。

対する男性は、いままでずっと理知的で冷静沈着な女性だと思っていたラプラスが別人のように取り乱すので、彼女とは別の意味で落ち着かない。

それを部屋の隅から眺めていたマクスウェルは「やっぱり」視えた”か」と呟く。

「あの、どうしたんだ？　ラプラスさん、なんか、落ち着きがないみたいだけど」

「へえあッ!？」

「うおおッ!!?」

ラプラスはなんだか無駄に敏感になって、目の前にいる人物に話しかけられただけで飛び上がってしまった。

心配して声をかけた男性も、思いもよらないラプラスの奇声に飛び上がる。

混沌。いい加減に”真路相談”とやらをやれと思われているであろう読者様方。もうしばらくお待ちいただきたい。

そんなグダグダで、もはや出来の悪い喜劇のような訳のわからない

状況を納めたのは、彼らを部屋の隅から様子をうかがっていた”白いの”。

マクスウェルであった。

「ラプラス。もういい」

「…え？……えええ！？ 死書長、そんな！ まだ私何も――」

「いいや”コレ”でいい。目的は達成したし、今を持って御前の実習も終了だ。あとは任せて、”外の二人”と合流しろ」

と、椅子に座るラプラスに近づき彼女を無理やり立たせる。

「お、オイあんたッ！！」

「失礼、彼女はまだ未熟でして。それになにやら今回は不調のようです。以後は私が……」

男性が騒ぎますが、男性にマクスウェルは「申し訳ありません」と、ラプラスの知る彼とは真面目すぎて別人かとさえ思ってしまう謝辞を入れる。

しかし、やはり納得がいかないのは、男性よりもラプラスである。

そんな自分の意思をマクスウェルに伝えようとするが、

「”視たんだろ”」

その一言で、黙らされる。

そう。彼女は”視た”。

沈黙したラプラスを確認して、卓上に置かれた『本』…『魔剣天使ロイアルまりん!？』の一つを彼女に手渡しす。

「後は任せろ。最初から、こういう手筈だったんだ」

”面説室”を退出したラプラスを確認したマクスウェルは、男性に向き合う。

男性は、不満や怒りを隠そうともしない表情でマクスウェルを睨みつけるが、マクスウェルは知ったことかとも言うようにそこそこに立派な椅子、男性の対面の位置に座る。

「…あんたがラプラスさんの上司なのはわかったけど、乱暴すぎるんじゃないか？」

まあ、そういう風に捕えられて仕方のない光景ではあったが、さすがにマクスウェルにとっては心外である。顔には出さないが。

これが”図書棺”に存在するマクスウェルの知人たちとのやり取りであれば、彼はうんざりした顔で否定したのであろう。

しかし、今この場にいるマクスウェルは、普段の気だるげな彼ではない。

中央区画第十二階層32番地を管轄する最高責任者：”死書長”マクスウェルである。

「アナタには関係の無いことでしよう。それにそんなことは、今
は問題ではありません」

「ッ！　なんだって？」

マクスウェルのもの言いに男性が怒りを露わにするが、それさえも無視してマクスウェルは続ける。

「それでは、”真路相談”をはじめましょう。警告しますが、今から申し上げますことは紛れもない真実であり、あなたが干渉しなければ、避けようの無い現実的未来になるということを心に留めておいてください」

「はあ！？　だからッ！　なんのことかって聞いてんだよッ！！」

激昂する男性。まあ原因の大半はマクスウェルにあるのは事実であり、むしろ煽っているのもまた、マクスウェル本人である。

今後の展開を考えると、一度感情を高ぶるせたほうが、予想外の展開が起こった時に意外と冷静になれる。

ラプラスと対面していた時とは明らかに異なる反応をする男性を視界に収め、マクスウェルは強引に会話を成り立たせる。”真路相談”のように胸糞悪い業務は、手早く終わらせるに限る。

「ではまず、『魔剣天使ロイアルまりん』の主人公、”花宮まりん”は原作で言うところの第一話に—————」

「死亡します」

1-3. 処物(上) (後書き)

どうも、ジャン太です。あとがきです。

まずは、こんな駄文に付き合ってくださる読者様方に感謝を。

作者は皆様を崇拝しております。

いきなりですが本編に関係ない話を一つ……

この話を投稿した現在、就活中だったりします。

面接を終えて、さあ後は結果待ちという状況ですが…皆さんもうすうす感づいているのではないのでしょうか？

作者はビビりです。

内定をもらえなかったら……ビククリして死ぬでしょう。

内定をもらえても……ビククリして死ぬでしょう。

それだけの話です。

まあ、ジャン太のつまらない私生活事情なんて放っておきましょうか。

最初に、作者は二次創作を否定批判するつもりはございません。恐れ多いです。

この話は、作者が”物語”というものに対して常々抱いていることを表現しただけです。

もし、いらぬ誤解と不快感を駄目作者が与えてしまったのならば、お伝えするべきがありませんが、誠心誠意の謝罪を送ります。

もうしわけありませんでした。

しかし、相変わらずの独自理論で申し訳ないです。

文章も汚いですし。

国語力や言語表現力の向上を目指し、一層の精進をしたいと思います。

さて、あとがきらしいこともちょっとだけ。

この作品に登場する”図書館”の”従人”たちは、何かしらの能力を持っているという設定です。

ただし、凄そうな能力を持っていても戦闘描写はありません。

絶対に、ありませんので。

そして作者は歪曲解釈が好きです。大好きです。

彼らの能力もまた、作者の独自理論をもとにして訳のわからないような能力となっています。

それは追々。

本編に関することで挙げることもあるとすれば、ラプラスが何を視たのか？ ということですかね。

これらは”図書棺”の成り立ちや、”真路相談”のシステムに関わっていることです。

次回で、”外の二人”がいろいろ説明します。

そうですね、具体的には、作者の設定によるかなり特殊な平行世界理論を展開させる予定です。

最後に、相も変わらず見苦しい文章に付き合っていたいただきありがとうございました。

よろしければ、今後とものお付き合いをお願いしたく思います。

それでは、また次回。

1-4. 処物（下）（前書き）

独自理論が本格的に展開されています。ご注意を。

1-4. 処物(下)

” 処物 ”

それは、完全を模範した劣化複写の記録。

それは、完璧になり損ねた中途半端な世界。

それは、完結を目指した創造者たちの残骸。

” 処理されるべき出来損ないの物語 ”

” 図書館 ” はそれらを監理し、そして ” 死書長 ” たちによる ” 真路相談 ” によって、 ” 一応の終焉 ” へと導かれる。

しかし ” 図書館 ” で監理される ” 処物 ” の全てに ” 真路相談 ” が必要かと聞かれれば、そうではない。

監理されているうちに自己終結してしまう ” 処物 ” もあれば、終結した状態で ” 図書館 ” に納められる ” 処物 ” もまた、存在する。

物語とは、つまり ” 世界観 ” である。

そもそのところ ” 処物 ” とは、とある ” 完全 ” で ” 完璧 ” で ” 完結 ” した世界を基盤として模範された、あるいはその世界から溢れて零れ落ちた、 ” 異世界 ” ないし ” 平行世界 ” の記録を多次元的に書き留めたものなのだ。

そういう意味では、 ” 処物 ” とは世界そのものであると言ってもい

いだろう。事実、その通りな訳なのだが。

と、ここまでは前回の冒頭で説明したとおりのことである。

読者様方に手を抜くな！　と思われてはたまらないので、ここからは真面目に新しい文を…。

『魔剣天使ロイアルまりん！？』はすでに完結した物語である。

主人公の”花宮まりん”が幾多もの出会いと冒険を経て成長していく様が6部作に渡って描かれており、最終的な結末としてはハッピーエンドを迎える

しかし重要なのは、その過程。

”萌え系”アニメとは思えないほどの複雑で難解な人間模様が意外なほどに支持されて、『魔剣天使ロイアルまりん！？』は人気を得たということであろう。

まあ、ここで『魔剣天使ロイアルまりん！？』の物語を説明することには大して意味はない。

先程も言ったが、『魔剣天使ロイアルまりん！？』は既に完結しているのである。

完結した物語を語っても特に意味はないだろう。

完結。

しかし、とここで疑問が出る。

『魔剣天使ロイアルまりん!?』は完結はしているが、はたしてその物語が完璧であったのか? ということだ。

完結したのだから完璧に決まっているじゃないか。と、読者様方は思われるかもしれない。

申し訳ないが、もう少しだけ作者の戯言に付き合っていただきたい。

もし、究極的な『魔剣天使ロイアルまりん!?』の物語があるとするとならば、それは出演するキャラクターが誰一人として欠けることなくエンディングを迎える結末……いわゆる”大団円”というものだ。

しかし、それでは物語は完結はするだろうが、それが完璧な物語とはいえないだろう。

それがアニメとして成り立つのなら第3者の視点、『魔剣天使ロイアルまりん!?』の場合なら、アニメを視聴する視聴者の視点に加わってくる。

彼らを楽しませる展開ないし要素がなければ、完璧な物語とはいえないだろう。

ここでもうすれば面白いのではないか? ここでこうなれば楽しめるのではないか?

そういった思考錯誤が在って、物語は完成するのだ。

もし世界が人の意思によって形成され、創造されるのならば、『魔剣天使ロイアルまりん!?!』の世界のほかに、前述した思考錯誤の果てにボツとなった『魔剣天使ロイアルまりん!?! モドキ』の世界もまた、可能性としては存在することになるだろう。

もしかしたら、予測もつかないようなバッドエンドを迎えた世界もあったのかもしれない。

それらは決定的に違うが、しかしどれもが『魔剣天使ロイアルまりん!?!』であることには間違いはないだろう。

つまり何が言いたいのかというと、前話で登場した転生希望の無職男性。

彼の正体は、どこかの誰かが思い描いた『魔剣天使ロイアルまりん!?!』の転生系主人公の物語から創造された世界の、その登場人物であったということだ。

彼はオリジナル主人公であり、オリジナル主人公ではない。

そして彼は展開どおりに死亡し、彼が言うには神という存在によって転生が約束され、展開通りならば彼は『魔剣天使ロイアルまりん!?!』の世界に辿り着き……といった具合な感じで物語を紡ぐはずだった。

ところが、彼の物語はココでいったんの中断となる。

なぜなら、ここで物語が途切れてしまったからだ。

彼と言う存在を考え出した存在が物語を投げ出したのか、あるいは別展開を考え出して本筋が変わってしまったからなのか。

あるいは、設定そのものが中途半端であったからなのか。

それが悪いことかと聞かれれば、べつにそうではない。

そうではないが、”もしも”である。

その物語を無理やりに”一応の終焉”へと導く存在がいたとして、そして例えば、『魔剣天使ロイアルまりん!?』に、転生を果たそうとしていた男性。

もし彼が、彼自身の設定上でいわゆる大団円……ハッピーエンドを望んでいたとしても、その物語の本来の傾向上、物語の展開がそれを否定するような流れであったのなら、そしてその物語が完結に導かれてしまったのなら、そしてそれが現実の世界として成り立ってしまったのなら、それがどれほど滑稽で救いがないことか。

ラプラスは、そんな彼の未来を”視て”しまったのだ。

ラプラスは、勘違いしていたのだ。

”真路相談”とは、完結の見込みの無い物語を”一応の終焉”に導く業務だとラプラスは思っていたのだが、いや、実際にはその通りなのだが、ニュアンスの差だろうか。

結局。

”真路相談”とは、結末に関係なく”処物”に記された物語の、世界の登場人物に干渉することで、

”無理やり”に

そして、

”無責任”に、世界を確立させることを言うのだった。

1-4. 処物（下）

「……それで死書長に追い出されてしまった、と。まあ当然ですね。もともと、そういう段取りでこの”実習”は行われる予定でしたので」

「“中”のことなら気にしないでいいわよ。死書長ってあんなだけども力つくくらい優秀でしょ？ 多々っていうか、確実にアンタなんかよりもうまく”真路相談”をやったのけるわよ」

「……………納得いきません」

中央区画第十二階層32番地の一角。通称”面説室”の外。

そこに、黒い理知的な美人”ラプラス”と、寒色系のゴスロリ服の少女”エリュシオン”と、茶色いスーツの丸眼鏡が似合う少年”ルール”たちはいた。

「納得しなくなっちゃっていいわよ、ていうか納得する必要なんてないわよ。”マクスウェル”に言われなかった？ もともとこういう手筈だった、て。…………ルール、説明して」

「承りました。コレに説明するのは少々面倒ですが、仕方ありませんね。…………今回の実習はですね、アナタに”自覚”しておらうことが第一の目的だったんです。アナタが”面説室”から出てきたということは…………”視た”ということで間違いないですか？」

「…………はい。”視ました”。というか、”アレ”ってどういうことなんですか？」

彼女は”視た”。それによって彼女の实習は終了し、”面説室”から追い出された。

「どういふこともなにも。そのことを説明するために”ボクたち”がいるんですよ」

「書類は見たんでしょ? 『魔剣天使ロイアルまりん!?!』だっけ? そのことも含めて、先ずはアンタがどう感じたのか言ってみなさいよ。というか手っ取り早くアンタが”視た”ことも言っちゃいなさい」

彼女は”視える”。それが彼女と言う存在の根源にある概念であり、彼女が彼女であらんとする証明でもある。

彼女は”任意で対象の未来を垣間見る”ことができる。

正確には未来ではなく、対象となったものがこれから如何するべきなのか、どう在るべきなのかという確定事項のようなものを、その瞳に移すことができるのだ。

”未来”という不確定要素に干渉する。

それが彼女の、ラプラスの能力。

「ラプラスさん。アナタが”視た”あの男性の、『魔剣天使ロイアルまりん!?!』の物語はどんなものでしたか?」

ラプラスが一度俯き、そして再び顔を挙げ話し出す。

「ワタシが”視た”『魔剣天使ロイアルまりん!?!』の物語は……
…」

言いづらそうにしていたが、結局彼女は割り切って、言う。

「惨劇でした」

主人公”花宮まりん”。『魔剣天使ロイアルまりん！？』でいうところの第一話。本編開始時に死亡。

死因は物語において敵に定義される存在、墮天使に惨殺されるというもの。

それを皮切りにして登場人物の大半が死亡してしまうという、そんな世界を彼女は、ラプラスはアニメとしてではなく、現実の光景としてその瞳に移し”視てしまった”。

惨劇を回避できる未来も彼女は”視た”。

内容は長くなるので省略するが、しかし、どんな結末であれ”凄惨”でドロドロでグチャグチャな内容だったということだけは言っておこう。

少なくとも、先程までラプラスが対面していた無職男性の望んだ展開は、およそ訪れることはない。

未来とは確かに不確定で、それであるがゆえに希望が持てる。しか

し、ある意味では決定的で避けようがないとも言えるだろう。

ラプラスには”そんな未来”が明確な映像として”視える”。

何故か？ と聞かれてもしようがないが、答えようがない。

彼女はそういうものののだ。そんな感じなのだ。彼女は。

もし彼女がどういった存在なのかと説明を求められても、解答は難しい。

だがあえて説明するならば、この”図書館”に流れ着いた”未来”という不確定で不安定な概念が”人間”のような形を持った存在、としか言いようがないだろう。

”図書館”は、”いい加減”で”不確定”な存在たちが最後に辿り着く場所。

彼女もまた、不安定であるがゆえに”図書館”に辿り着いた存在の一つだった。

話は戻るが、外見だけは知的な女性であるこのラプラス。

その彼女の思考回路は意外なほどに残念で、そしてビックリするくらい子供っぽい。

まあ彼女という存在が、生まれて間もない存在であるという事実を知っていれば、仕方の無いことかもしれない。

マクスウェルとエリュシオンにルールたちと比べても、この”図書

棺”という空間で、彼女はぶっちぎりで新入りなのだ

”外見”はともかく。

とにかく、無職男性が転生を希望しているという事実を除けば、『魔剣天使ロイアルまりん!？』はそれなりに彼女の趣味思考にあった物語であった。

それだけに、あの凄惨な光景には堪えたのだろう。

「”惨劇”……ですか。ふむ。しかし、見方次第では、ソレは喜劇なんですよね。コレがまた」

「喜劇……ですか？」

普段は口の悪いルールが、珍しくラプラスを罵倒しないで説明する。

ラプラスも、やはり気分は下降気味ではあるが、真面目に聞く姿勢を取る。

ところで、惨劇をある意味では喜劇と表現したルールではあるが、もし、そんな彼を非難する存在がいたとしたら、それは件の”無職男性”だけだろう。

この場にいる三つの存在たちは人間ではない。見ず知らずの世界の惨劇を嘆くような精神構造を、彼らは持ち合わせていない。

誤解の無いように言っておくが、ラプラスですら、別に『魔剣天使ロイアルまりん!？』の世界に訪れるであろう悲劇を嘆いているわけではなく、自分好みの物語の凄惨な様子を”視て”、”少々”気

分を悪くしてしまったただけである。

「ええ”喜劇”です。アナタも知っているように”処物”というのは、どこかの世界の誰かが思い描いた理想、または妄想によって創造されています。アニメや漫画など、二次元的な要素ですら世界として創造されます。”処物”とは、そういったモノたちの記録を書き留めたものなんです」

「つまりね、平行世界の概念にのっとった確立による世界の分岐にじゃなくて、まさに人間が思い描いた幻想が、世界となるわけよ。でも、ここで問題がおこるわけなんだけど……何だかわかる？」

「……………いえ」

「まったく。本当なら罵りまわしたいところなのですが、今回はそう言った展開は無しだと”駄目作者”に釘を刺されているので、本当に残念なんですが説明を続けましょうか」

「ちよっとルール。”駄目作者”とか言わないの。そういうのは本編に関係ないところでやってよね」

「これは失礼しました」

まったく。本編に作者の事情を出すのはあれほどやめてくれと頼んだのに。勘弁してほしい。

それはそれとして、「あの、”駄目作者”ってなんのことですか？」
「気にしないでいいわよ」などという遣り取りのあと、ようやく説明が再開する。

「さて、その問題なんですが……物語と定義されるのならば、当然な結果としてそれらには”結末”があります。別に物語としての結末を迎えたからといって、世界そのものが消滅するわけではありません。それから世界は続いて行きますよ。まあ、”処物”には記されませんが」

「”処物”に記されるのは、あくまで主人公の視点によって展開される世界観だけなのよ。よく勘違いする連中がいるみたいだけど、”書物”の中には世界は展開されてないわ。確かに”処物”と、その世界は連動しているけど、”処物”に記されているのは物語。『本』：つまり”処物”は世界の設計図なのよ」

「……世界の設計図。ということは、仮にその設計図が未完成なら、世界そのものが成り立たない……ということですか？」

「今までも説明してきたが、能力だけは優秀なラプラス。だんだんと、二人の説明を理解し始める。」

「まあ、理知的な美人が少年と少女の二人に教育されているというのは、考えるまでもなくシュールな光景である。」

「そうです。物語と連動している以上、その物語をなぞらなければならぬ。しかし、物語が完結していなければ物語をなぞることができない。その矛盾を避けるために、”真路相談”はおこなわれる、という訳です」

「知ってるでしょ？」 図書館”に時間は存在しない。だからこそ、世界が矛盾を抱えてしまう前に処置を……”処理”をするのよ。その役目を担っているのが”死書長”ってわけね」

「処理」……………」

例えそれが、その世界を滅ぼす結果になろうとも。

「気に病んでいるということはないのですが、一応、気にする必要なんではありませんよ。あの男性がどんな物語を紡ごうが、そしてあの物語がどんな結末をたどろうが、ある意味では”あの男性が望んでいた世界”になるわけです」

「…あの男性が？ いやでも、ルールさん。あの人はいわゆるハッピーエンド…大団円を望んでましたし、でも、ワタシが”視た”限りではどうやっても…」

「”望んだとおりの結末”になりますよ。いえ、正確には”そうなること”を望まれた世界の結末を迎えまるでしょう。彼ではない、彼の”オリジナル”が望んだ結末へと」

彼ではない、彼。あの男性はオリジナル主人公であってオリジナル主人公ではない。

つまり、どこかの誰かが妄想した『魔剣天使ロイアルまりん！？』の転生系の登場人物。

その彼を”創造した人物”の望んだ結末。

”バッドエンド”

「じゃあ、彼は…」

”転生”というものは、この創造されることで増殖し続ける物語

群：”処物”に記された世界のどこかなら、あるいはあり得ないこともない現象でしょう。しかし、この男性は違います。彼は”ジャンルとしての転生”を行った、『魔剣天使ロイアルまりん！？』の二次創作作品の主人公です」

その物語を創造した人物は何らかの理由で、男性の物語を打ち切った。

しかし、それでも根本となった残っているわけで、その人物が思い描いた通りに物語は、世界はめぐる。

約束された”バッドエンド”へと。

「”真路相談”で呼び出された主人公、世界の”中心”である彼に、この先訪れるであろう未来の情報を与えることで物語の道筋を造り出した。今回の顛末は、要約すればこんなところですね」

「『魔剣天使ロイアルまりん！？』が完全にファンタジーな物語。だったら、こう簡単にはいかなかったんでしょうけど。それはそれで別の作業が必要になるんだけど、これはまた今度ね」

「長々と説明しましたが、こういったことは実感してみるのが一番なんですよ。どうですか？ ”真路相談”の本質に触れた気分は？」

「ま、別に聞かなくわかるようなもんでしょ？ ”ワタシたち”だってそうだったし」

概ね、理解はできたし、実感した。

ラプラスは、確かに今回のことで”真路相談”と”死書長”の本質

に近付けた。

” 図書館 ”

ありとあらゆる ” いい加減 ” で ” 不安定 ” な存在たちが、最後に辿り着く場所。

” 出来損ないども ” を監理する、 ” 棺桶 ” 。

その存在意義は多々あり、ラプラス自身が知っているものはその一部でしかないのだろう。

どこの誰が造ったのか、いつから存在しているのか。そんな疑問が馬鹿らしくなるくらい矛盾と不自然を抱え、そしてそれが許される場所。

誰も知らない、しかし確かに存在する場所。

故に ” 図書館 ”

” 忘れられた図書館 ”

そんな場所。

結局のところ、ラプラスにはその真相がどうなっているのかなんてわからないし、理解する気もない。

エリュシオンやルールがどう考えているかは分からないし、マクスウェルに関しては考えたくもない。

それでも、今回彼女が感じたことが在るとすればただ一つ。

「なんだか、すごく気分が悪いです」

その一言に尽きるのだった。

1-4. 処物（下）（後書き）

あいもかわらず意味不明な文章で申し訳ありません。全面的に作者の力不足です。

ジャン太です。

ようやく、”図書棺”の設定が書けそうでしょう。

設定として、この物語では可能性や確立によるの分岐ではなく、人間の意思や妄想によって形作られた世界が平行世界として誕生する、という感じですよ。

ですので、”図書棺”に納められた膨大な数の”処物”はそれらの世界の記憶であり設計図で、そしてその”処物”に記された世界から、さら平行世界が誕生していくという訳ですよ。

わかりづらいでしょうね。

作者もそう思います。

悔しいのは、作者の文章表現力ではこの設定をうまく表現しきれないということです。

精進します。

それでは、駄文に付き合ってくださいった読者様方に感謝を。

また次回もよろしく願います。

1-5. 死書長補佐（前書き）

「ふ、ふふっふふふふふふ……」

「どうした？ 気味の悪い笑いなんか浮かべて？」

「マクスウェルさん、気付いてますか？ 前回もそうでしたが、私の視点に戻ってるんですよッ！！ストーリーの進行がッ！！」

「……そうだなあ」

「まったく。思わせぶりな駄目作者にはうんざりですよ」

「……そうだなあ」

「やはり、この物語の主人公は私だったんですね！！」

「……そうかなあ？」

1-5. 死書長補佐

中央区画第十二階層32番地。

その中心部にある広間。部屋の隅には『本』が、”処物”が乱雑に積み上げられ、そのあまりの量に広間の壁と言う壁が隠れてしまっている。

ランプや蠟燭台が存在しないにもかかわらず、そこそこの広さを有するその広間は、なぜだか読書するのに最適な明るさで保たれている。

ではその明るさが日光の恩恵によるものかと聞かれれば、そうではない。

広間の天井は吹き抜けにはなっており、吹き抜けによって広間の形に切り抜かれた上階の、その外側の様子が垣間見える。

しかし、それだけである。

吹き抜けの向こう側は暗闇になっており、少なくとも陽光は入ってきていない。

というか、この”図書棺”とよばれる空間には太陽そのものが存在していない。

とにかく、そんな広間である。

そして広間の中央。

口の字型に並べられた四つの、それぞれがそれぞれに大量の”処物”が積み上げられている、それなりに立派な執務机の、その内の一つで。

”処物”を開き、読書に耽る女性がいた。

ラプラス。中央区画第十二階層32番地を管轄する死書長補佐である。

黒い髪に黒いスーツ黒いオフィススカートと、ありとあらゆる要素が黒い、知的な女性。

そんな彼女が読書する姿は、とにかく絵になる。

似合っている。

ただし。

彼女が手にとって今まさに読みふけている”処物”が、『魔剣天使ロイアルまりん!?!?』の原本でなければの話だが。

「ふう……」

目を瞑り息を吐いて、今しがた読み終わった『魔剣天使ロイアルまりん!?!?』をパタリと閉じる。

そして閉じられた彼女の瞼が開かれると同時に、

「あゝ、おもしろかった」

と言いやがった。

台無しである。

そして、残念である。

何から何まで、あえて言うなら”できる女”の雰囲気を一瞬で、それも自ら吹き飛ばしてしまう彼女の頭が……である。

人の趣味はそれぞれで、そして彼女が外見からは想像もつかないほどに思考が子供っぽいのが原因だとしても、理知的な美人が『魔剣天使ロイアルまりん! ?』を読んでいるのはあんまりな光景である。

しかも表紙に、”ふざけた大きさの剣を構えた十歳前後のきわどい衣装を纏った少女”がイラストされており、それらの要素がさらにシニールさを演出している。

まあこの際、彼女の残念さは放っておこう。

今まさに問題なのは、彼女の背後に立つ人物。

ラプラスとは対象に、来ている服も髪も、何もかもが白く瞳のみが蒼い青年。

「……で、ラプラス。御前は何をしているの?」

マクスウェルが、頬の筋肉をひきつらせながら佇んでいるということである。

” 図書館 ” には時間が存在しない。しかしある ” 例外 ” によって、本来なら時を刻むはずの無い時計は、その役割を正しく果たしている。

そして現在は、業務時間である。

マクスウェルが右手を振り上げる。その手が形作るのは、じゃんけんでいうところの ” グー ” 。

ラプラスは振り返らない。振りかえれない。しかし、今まさに右手で形作られた鉄槌を振りおろさんとしているであろうマクスウェルに対して口を開く。

「弁明をさせてください」

「……聞こうか」

「面白かったので、つい。……………てへ」

1-5. 死書長補佐

死書長補佐。それは次期死書長のことを指す。

死書長へ至るための、研修期間であるといってもいい。

しかし。

その立場は決して高いものではなく、むしろ雑用のような仕事を任されることも少なくはないし、立場が低いゆえに文句を言うことも許されない。

雑用を抜きにした主な業務と言えば、その一つは”真路相談”であろう。

完結の目処が立っていない”出来損ないの物語”を一応の終焉へ導く為の業務。

そして導くだけの、それだけの業務。

事後処理なんてしない、不親切で、無責任な業務。

それ以外にあるとすれば、”処物”の”軌録”だろう。

”処物”と連動する世界の進行状況を記録する業務。

”世界の軌跡を、記録する”業務。

それくらいである。

それくらいではあるが、決して暇なはずもなく、むしろ膨大な蔵書量を誇る”図書棺”において、それはハードワークに違いないのだ。

だというのに。

中央区画第十二階層32番地の中心部に存在する広間。

通称”作業部屋”にて、頭を抑えて転げまわる知的な女性。

業務中に、しかも業務が遅れているにもかかわらず読書にふけていたラプラスがマクスウェルに制裁をくらったのは、それ以前の問題として、当然のことながら文句など言えるはずもなかった。

さて、ここでラプラスが死書長補佐などという、肩書だけなら無意味に凄そうな役職に就くまでの経緯とは、一体どんなものであったのだろうか？

そこで今回は、彼女が中央区画第十二階層32番地に配属される以前の話をしよう。

：

……

………

時期は少々さかのぼり、ラプラスが”死書長補佐”になる前。

彼女がの役職が、”請付”だったころ。

中央区画：ではなく、図書館の従人たちからは主に”エントランス”とよばれている区画。

その片隅の片隅。

そんなところに彼女は、ラプラスはいた。

” 請付 ”

その業務内容を説明する前に、とりあえずは ” エントランス ” と呼ばれている区画の説明をしなければならいだろう。

かなり広大な空間で、とりあえず、そこが ” 図書館 ” であるからなのか、やはり大量の『本』と『本棚』がある。

中央区画のような不気味な静けさはなく、むしろ活気のようなものが……ない。

うごめく ” 人影 ” は大量に存在するが、それらに生氣は感じられず、むしろ無機質で機械的である。

” エントランス ”

なんの捻りもなく、入口である。

しかし入口のようなものは見当たらず、いつの間にか人影が現れ、いつの間にか消えていくという、そんな異常な光景。

” 図書館 ” ならば仕方ないが。

しかもここは”図書棺”で、その入り口であるのだからまともなモノであるはずもないし、そもそもどんな理由でどんな連中がココを訪れるというのか。

というか、どんな連中がやってつくるのか…ということから説明しよう。

影。

影のような何か。

人の形をした、三次元的な、影。

ちなみに”図書棺”において、人型をしているのは”従人”たちのみである。

そういうところなのだ。図書棺とは。

それはともかく、影みたいなヤツである。

まあ、少し考えればわかることだろう。

ここのは大量の『本』が在って、というか『本』しかないわけなのだから、彼らがココを訪れる理由は『本』の、つまり”処物”の閲覧である。

そして”処物”の閲覧とは、その中に記述されている物語に干渉するということと同義である。

それらの存在に呼称をつけるのは難しいが、もし、あえて呼ぶとす

るならば”干渉体”と呼ばなければならない。

やっぱりこれも、なんの面白みも捻りもない呼称である。

ぶっちゃけた話それらは、いままさに物語を創造しようとしている者たちの、無自覚で無意識な、精神体に近い何かである。

無自覚で無意識に、”図書館”に存在する物語を参考にして、新たな物語を創造しようとしているのだ。

それは置いといて。

「それでは、中央区画第三階層155番地になります」

とにかく、”エントランス”の第534番請付口で、ラプラスは牢働していた。

「次の方どうぞー！」

黒髪の、理知的な美人が、何もかも黒い女性が……

「あ、少々お待ちください。”ゆめ”！ 二十二階層の”パンドラ”さん呼んできて！」

受付嬢よろしく業務をしている姿は、なんだか残念だった。

黒い女性……まあ、ラプラスである。

つまりのところ”請付”とはそういった連中たちを、それらが必要としている資料……”処物”のある場所まで導く業務である。

まあ”請付”にも分類すればそれなりの業務があるが、それはまた今度ということで。

そして、交代時間の風景。

エントランス区画にほど近い、否。ありとあらゆるエリアに直結している、図書館の中でも異色な空間。

”喫茶エリア”での、一幕。

オープンカフェ風のテーブルに腰かけた、二つの影が在る。

「はああああああああ……疲れた。ねえラプラスう。お願い、仕事変わってえ」

「”ゆめ”……また”自称棺長”さんに怒られちゃうよ」

二人は、だべっていた。

テーブルの上には、”ゆめ”の頼んだ菓子と紅茶（ゆめが注文し、そして彼女は紅茶と菓子を詳しくない）が並べられており、淹れたての紅茶が湯気をたてていた。

”図書館”に正確な意味での時間は……いや、このことは今まで散々言ってきたことなので省略しよう。

とにかく、交代時間：休憩時間の風景である。

”請付”という役職は、”図書館”の業務のなかでもかなりハード

ワークな分類にあたる。

それゆえに”請付”を担当する”従人”は数多く、当時のラプラスもまた、その”請付”の一人であった。

そしてその隣でテーブルに突っ伏す女性……”ゆめ”もまた”請付”である。

ふわふわした雰囲気的女性で、ラプラスと色違いの服装に身を包んでいた。

ラプラスが黒に対して、”ゆめ”と呼ばれた女性は薄い緑色と白に近い薄黄色といった感じである。

やはり、ふわふわした感じの色調であるが、彼女はそんなものなのだ。

そういう、ものだった。

「そこをなんとかさあ？　ね、お願い！！」

「いやいや、お願いされてもされても困るよ……私だって業務が在るし」

いくら人間ではないとはいえ、”従人”たちにも疲労感や疲れは存在する。

食欲に睡眠欲だって存在している。

そんな連中が休憩、または非番の際にこぞって利用する場所。

それが”喫茶エリア”である。

「ああ。せめて”死書長補佐”クラスなら楽できるのになあ」

「ねえ、”ゆめ”。私は業務とか役職に詳しくはないんだけど、”死書長補佐”てどんな感じなの？」

「ん？ 私だって知らないよ。でも”補佐”て付くくらいなんだし、案外楽な仕事なんじゃない？」

ふわふわした解答である。まあ、彼女という存在がそんな感じなら、仕方ないことだが…。

ちなみにこの二人。ほぼ同時期に”図書棺”に流れ着き、そのまま仲良く”請付”に配置されたという、いわゆる腐れ縁の友人のような間柄である。

「そう…なの、かなあ？」

「きつとお、ていうか多分そうだよ。ワタシも”死書長補佐”に立候補したけど見事に落選しちゃったしい」

いつのまに、とラプラスは思った。そして”死書長補佐”について思考を巡らせる。

これもまた今まで散々説明してきたことだが、いろいろと残念な要素の在るこのラプラス、能力だけは優秀である。

”死書長補佐”……その業務内容はわからないが、”補佐”と就く

くらいなのだし、おそらく”死書長”の助手のような業務なのではないだろうか？

というかこの時点でのラプラスは”死書長”の業務について欠片も知らないわけだが。

「比較的には、楽、なのかな？」

「絶対そうだよぉ」

「……そうかなあ」

こんなゆるい感じで、休憩時間は過ぎていく。

その暫く後。

人間的な感覚で表現するなら、”数日後”くらい。

まさかラプラス自身が、彼女の友人である”ゆめ”が立候補してま
で、結局のところ落選した件の”死書長補佐”に、まさかのまさか
で”推薦”されるなどいうことを、今この瞬間、のんきに紅茶を飲
んでいる彼女には、知る由の無いことであつた。

時間は飛んで、場所は中央区画第十二階層32番地。

その中心部にあたる広間で、ラプラスは相も変わらない黒一色の装いで、佇んでいた。

この場に存在する人影は、四つ

一つは当然ながら、ラプラス。

「死書長補佐」として配属されました、ラプラスです。」図書棺に流れ着いて間もない身ですが、どうぞよろしくお願いします」
とりあえず、外面だけは知的でできる女なラプラスが事務的できっちりとした挨拶をすれば、それはさぞ絵になることだろう。

そしてこの場にいる彼女以外の影の一つ、茶色いスーツを纏った丸眼鏡の似合う、几帳面そうな少年が名乗り上げる。

「ルールと言います。このエリアの”戒説”を担当させていただきますね」

ニコニコと人の良さそうな笑顔で握手を求めるルールの姿は、普段の彼を知らないラプラスに大きな誤解を与えた。

まあ誤解しているという意味なら、この場合両者がそうなのであろう。

「はい。よろしく願います」

ルールの手を握り返し、ここでも事務的に答えてしまったラプラスに非はないが、彼女を優秀な存在だと（優秀といえば優秀なのだが）

ルールが誤解してしまったことが、彼女の悲劇（喜劇とも言う）に繋がってしまうことを、彼女は知らない。

次に名乗りを上げたのは、寒色系のゴスロリ服を着た少女。

「エリュシオン。”蝕員”よ。”面倒なこと”はおこさないでね」

「はい。十分に気をつけさせてもらいます」

容姿こそ幼いながらも、ツリ目が攻撃的な印象を演出しているエリュシオンであるが、ラプラスへの態度は”表向き”好意的である。

握手こそは求められなかったが、印象は概ね悪くないとラプラスは感じた。

まあ、エリュシオンにしてみれば、無意味に陰悪な関係を構築しても無駄で面倒なだけだという思考に従ったまでの行動だったわけだが。

最後に名乗りを上げたのは、白い青年。

「マクスウェルだ。中央区画第十二階層32番地……早い話が、ここを管轄している”死書長”だ。……しかし、なんというか」

何もかもが白い青年。

髪も、服も、その上に纏う足元まであるロングコートも、青年を形成するありとあらゆる要素が白い青年。

瞳は蒼いが、肌でさえ、透き通ってしまうような白さである。

この、白すぎる青年が、”死書長”。

ラプラスの上司になるわけだが、しかし、どうしたのだろうか？

先程から彼の額にしわが寄せられ、その表情は心底からの怪訝さをあらわしている。

「えーと、あの？」

「んー？」

青年が小首を傾げる。

「んー？」

青年が、先ほどとは反対方向に小首を、否、体ごと傾かせる。

「な、なにか？」

ラプラスのほうがこの状況に唸りたいところであったが、その状況はあっさりすぎるほどに、唐突に終わった。

「御前、”残念”だろ」

「は？」

とにかくそんな感じの、彼らとのファーストコンタクトがあったのだ。

この後何だか知らないけど外見少年に散々に罵倒され、外見少女は少年に便乗して散々と罵倒してこられるし、あげく”白いの”には理不尽な雑用を延々と任されることを、彼女は知らない。

ともあれ。

彼女は、このような経緯あって”死書長補佐”となったのだ。

1-5. 死書長補佐（後書き）

はい。ジャン太です。

ここまで読んでくださった読者様方には感謝の気持ちでいっぱいです。

あとがきです。

なんか新キャラが出ましたね。”ゆめ”ちゃんです。

まあ、モブキャラなので出番はもう無いといってもいいでしょう。

あ、やっぱり次回に少しだけ出すことにします。そうします。

しかし、相も変わらない駄文の上にわかりにくい独自理論とか……

毎度毎度すみません。

文章力の向上目指して頑張ります。

さて、次回で”死書長補佐”編のエピローグです。

……え？ いまのいままで”死書長補佐編”だったのかって？

そうだったんです。

その次からは”蝕員編”です。

メインは、”エリュシオン”ちゃんです。

毎回、長々とすみませんでした。

こんな駄文を読んでくださる読者様方には頭が上がりません。

ではでは。次回もまたよろしくお付き合いいただければ幸いです。

1－6. とある死書長補佐のエピローグ（前書き）

死書長補佐編は終了します。

次回からは”蝕員編”を開始します。

1-6. とある死書長補佐のエピローグ

” 図書館 ” の一角。

” 図書館 ” の内部に明確な位置関係は存在しないが、 ” ある区画 ” を中枢部と見立てた場合に ” 図書館 ” のもっとも外側に位置されるであろう場所。

ただでさえ異様な雰囲気 の ” 図書館 ” の、そのなかでも極めて異様な光景が広がる、その場所。

通称、 ” ゴミ箱 ” 。

” 処物 ” や ” 従人 ” と呼ばれる ” 出来損ない ” の存在たちが、まず最初に辿り着く、そんな場所。

理知的でできる女のオーラを放つ女性、ラプラスもまたそれらの例にもれず、 ” ゴミ箱 ” で眼を覚ました。

否。この時点での彼女には ” ラプラス ” という呼称が存在しない。

この時点での彼女は、ただの ” 未来という不確定で不安定な要素 ” である。

どのあたりが ” ただの ” なのか。

しかし、いちいち ” 未来という不確定で不安定な要素 ” と記述するのは面倒なので、結局 ” ラプラス ” と呼称しよう。

話は戻り、”ゴミ箱”などと通称されてはいるが、そこが箱状の空間であるかといえば、そうではない。

どこまでも暗い、闇。

どこまでも続く、闇。

どこまでも深い、闇。

だというのに。

光源など何一つなく、ましてや陽光という言葉が場違いなほどにも思える暗闇のはずなのに、この暗闇に存在するあらゆるものを明確に、視覚的に捕えることができるという、そんな摩訶不思議な空間。

あたり一面視界を遮るものがなく、閉鎖的という言葉とは無縁な、どこまでも暗黒が続いているという、そんな空間。

とにかく、そんな空間で目覚めたことがラプラスの原初の記憶である。

どこまでも無機質な場所。

そして彼女は地面に……否。

地面ではなく、数えるのが馬鹿らしくそして億劫になるような大量の、無秩序にばら撒かれた『本』で築かれた平原の上に佇んでいた。

ラプラスの瞳に映る視界のはるか先は霞んでおり、地平線……ではなく『本』平線というものは見えない。

リ、ボトリ、ボトリ、ボトリ、ボトリ、ボトリ、ボトリ、ボトリ、ボトリ、ボトリ、ボトリ。

異様な光景のど真ん中（ど真ん中かどうかは不明だが）に佇む、黒い髪の、理知的な美人。

少々スタイルのメリハリに乏しい。

シュール……いや、それはそれで絵になる光景かもしれない。

ともかくラプラスは。

不気味で異様で、無機質で無秩序な空間で。

そして、そんな空間の中でも、むしろそれ以上に異様で、圧倒的に胡散臭い存在に、出会った。

「やあ！ 見覚えのないキミは”新入り”さんかな？ かな？ かな？
な？ 答えは聞いてないんだピョン！！」

「……………うわあ」

1—6. とある死書長補佐のエピローグ

「……………という夢をみたんだ」

「という”ゆめ”をみたんだ？———残念だけどそれは”わたし”じゃないよお」

「知ってるよっ！！”ゆめ”じゃなくて夢だってば！！」

少々のキャラ崩壊（普段のラプラスはこんな感じ）が発生しているが、そんな遣り取りをするラプラスとその友人”ゆめ”がいるのは”図書棺”の一角。

”牢働”の休憩時間に、”従人”たちがこぞって利用する、”図書棺”内部において異色の『本』と『本棚』がまったく見受けられないエリア。

”喫茶エリア”

多種多様で、様式も様々な”喫茶施設”の立ち並ぶその区画の片隅。オープンカフェ風の喫茶店、”メビウスの喫茶店”のテーブルの一つを陣取って、ラプラスと”ゆめ”は久しぶりの雑談を交えた、近況報告を行っていた。

「まあ確かにい、”自称棺長”さんにはビックリしたよねえ」。

図書館”に流れ着いて茫然としてたはずなのにいゝ、一瞬で覚醒しちゃったもんねえゝ」

「別の意味で茫然としたけどね……ところでさ、私の時は”ランドセルを背負った女の子”だったけど、”ゆめ”の時はどうだったの？

”パラドクス”さん」

”パラドクス”

”図書館”の”自称棺長”にして、”従人”たちの名付け親。彼らからしてみれば、たとえ名付け親であっても、”パラドクス”を”親”と呼称するのは全力で嫌がるだろう。

”いい加減”で”不安定”な”従人”たちではあるが、その中でも飛びぬけていい加減で不安定な存在が、その”パラドクス”である。

「えゝつとねえ、”マッチョなおじいさん”だったかなあ。本当にビックリしたよおゝ」

「ああ……そう」

”パラドクス”……”矛盾”。

この二つは正確には違う意味で使われているのだが、彼女は”あえて”こう名乗っている。

そう、”名乗っている”のだ。

”図書館”にいる存在たちは”全て”、パラドクスに呼称を与えら

れている。

パラドクスの付ける呼称は全て、それぞれの”従人”の原点を皮肉ったものばかりであり、無駄に適切で、忌々しいほどに的を得ており、そして妥当なのだ。

しかしパラドクスのことは、今回の話ではどうでもいいことなので一旦打ち切ろう。

ラプラスと”ゆめ”は、近況報告のために集まったのだ。

「それでえーラプラスう。”死書長補佐”ってどんな感じなののおー？」

”ふわふわ”した口調でラプラスに話しかけるのは、彼女の友人である”ゆめ”である。

薄緑色とスーツと薄黄色のオフィススカートが彼女の”ふわふわ”した雰囲気によく似合う……否、むしろ彼女が”ふわふわ”した存在だからこそ、その服装なのだろう。

”ゆめ”はテーブルに肩肘を付いて紅茶（ラプラスは紅茶に詳しくないので詳細不明）を飲んでいる。

「夢の話題が無かったことにされてるし……。まあいいや。”死書長補佐”ねえ……まあ、ボチボチかなあ？ 同僚のお二人は……なんだかんだで良くしてくれるし。”死書長”は………忌々しいけど。ていうか、初対面で”御前、残念だろ”ってどんな神経してるんだらう……」

「ラプラスが残念なのはどうでもいいじゃない。そうじゃなくてえ、業務はどんな感じかって聞いているのよお」

理知的な美人のラプラスと、ふわふわしてはいるが柔和な、ラプラスと同程度の美人である”ゆめ”の二人の組み合わせはかなり奇妙だろう。

奇妙ではあるが、絶妙な調和がある。

というか”ゆめ”。さりげなく友人のラプラスを残念扱いしきつた。

その残念扱いされたラプラスは、やはり残念なのかその事実気づきていない。

「うーん……まあ、”ゆめ”が考えていたほど楽な業務ではなかったよ。”請付”とどちらが大変かって聞かれて悩むくらいには」

「んー、そっかあ。……ところでさあ？」

「なに？」

ラプラスは紅茶を啜りながら聞き返す。美味しい、と思うし、鼻孔をくすぐるいい香りもする。

しかし、ラプラスは外見からは想像もつかないほどに子供っぽい部分が在り、その例にもれず味覚も子供よりで、どちらかと言えば甘い物のほうが好みだ。

椅子に座って紅茶を飲む姿も、出来る女の雰囲気相まって相当絵

になる光景なのだが、彼女の中身が中身だけに、”残念”である。

それはともかく、である。

「額……どうしたのお？」

ラプラスの額は、赤く腫れていた。

外見は出来る女なのに額が赤く腫れているなんて。やはり、残念である。

いやいや問題なのは、ラプラスの額が赤く腫れてしまった原因だろう。

まさか、パワハラか？ パワーハラスメントか！？ と、ふわふわした雰囲気とは裏腹にしっかりものである”ゆめ”が、ニコニコと柔和な笑顔の下で思考する。

転んだ拍子に額をぶつけた、などということはあるまいし。

”ふわふわ”した”ゆめ”ですらそんな事故（大げさ）は起こしたことが無い。

パワハラ。もしそうなのであれば、友人として立ち上がらねばならないだろう。

友達思いな”ゆめ”が、ラプラスの”上使”に物申そうかと決断しかけているときにラプラスが口を開いた。

「いや、転んでぶつただけだけど？」

「……………そう。頑張ってねえ」

どうやら、パワハラではないようだ。しかも”ゆめ”は新たに友人の残念な要素を発見してしまったようだ。

「あの…何をがんばれと？」

どうもラプラスは理解できていないらしい。

その後は微妙な空気を保ったまま、雑談や今度は”ゆめ”の近況報告（ほとんどが愚痴）が緩く行われたのだが、いまいち盛り上がり欠けたということだけ言っておこう。

まあ、雑談なんてそんなものである。

そして中央区画。その第十二階層32番地の中心部。

王族や貴族が集まれば、社交界やダンスパーティーができそうな程度には広いその場所だ。

「さて、弁明はあるか」

「ありません」

ラプラスは、正座をしていた。

膝頭をくっつけ、両の膝を折りたたみ、両の足の親指を上下に重ねて背筋を伸ばし、手のひらは腿の上にそえるように置く。

きれいな、手本となるような正座。

そしてラプラスの真正面に立ち、腕を組んで彼女を睥睨する白い青年がいた。

髪も、来ている服も、その上に着込むロングコートも、肌ですら女性が羨むような白さを保つ、何もかもが白い青年。

当然、マクスウェルである。

無表情なマクスウェルが、正座したラプラスを物理的に見下していた。

ここで、どうしてラプラスが正座されているのかという疑問がでてくるのだろうか、答えは単純。

”遅刻”である。

「御前は成長しないのか？　　というか、ただの一度さえ規定の時間通りに来たことが無いってのはどういうことなんだ？　普通あり得ないだろう……まあ、御前がそういう存在だったのは知っているし、図書館で普通を求めるのは馬鹿らしいということも理解しているが………残念だなあ、御前」

「残念とか言わないでくださいよう……それと、そろそろ許してください」

「駄目だ」

誰が遅刻したのかというと、説明するまでもなくラプラスである。

日頃、日常的に”残念”と言われ続けているラプラスではあるが、能力だけは優秀である。

”死書長補佐”としての業務だって難なくこなしているし、なにより仕事が早い。

できる女と言うのはまさにこの事なのだろうが、そしてラプラスはまさにできる女なのだろうが、いかんせん彼女は、残念なのである。

業務中に真面目顔で『本』（最近では『魔剣天使ロイアルまりん！？』）を読み、何かしらの飲料をぶちまけ（被害にあうのは”処物”かマクスウェル）、居眠りはする（大抵の場合はマクスウェルの鉄拳制裁で起こされる）は、いままさに正座されている理由である遅刻（というか遅刻しかしたことがない）するはで、見た目と内面との差があまりにも激しすぎるのだ。

「あ、あの！　そろそろ足が限界なんですけど！」

「知るか。いやいや、ここはほかのやつらの意見も聞こう。”エリュシオン”！”ルール”！　こんなこと言っているが、どうする？」

マクスウェルが振り返り、この広間にいる残り二つの”従人”であ

る淡い寒色系のゴスロリ服の少女と、茶色いスーツの少年の意見を聞く。

この場にラプラスの味方はいない、ということだけ先に明言しておこう。

「ワタシはどうでもいいんだけど、考えるの面倒くさいからルールにパス。勝手にやっちゃって」

「ちょッ!? エリュシオンさん」

少女特有の高い声、しかしなんとなく聞く人に安心感を与えさせるような声で宣言されたのは、ラプラスにとっては死刑宣告に近いものだった。

茶色いスーツの、丸眼鏡が似合う少年：ルールは、ラプラスを嫌っているのだから。

「やれやれ、決断を託されたのならば仕方ありませんね。真面目に審議しましょう」

「あ、あれ？ 普段なら即断即答で罵倒されるのに……いやいや逆に怖いですって!!」

即断即答。几帳面にも、地味に心を抉る罵倒をするルールが一旦の間をおいたことにラプラスは不信感を覚えたが……やっぱり安心なとできるはずもなかった。

「失礼ですねえ。こんな”残念”なモノのために脳神経を使って思考しなければならぬというのは苦痛でしかありませんが、しっか

りと、冷静に、合理的に、公平に、客観的に判断しましょう……………
………継続で」

「ほらッ！！ やっぱりこんな感じになると思っていましたよッ！
」

「ラプラス。ちょっと黙れ」

黙った。黙りこくった。

どうやらラプラスには逃げ場はないらしい。逃げ道もないのだから
当たり前かもしれないが。

この場にいる誰よりも、ドレよりも、ラプラスの立場は下だった。

しかしである。雰囲気的にそろそろ第一の罰（正座）は終了だろう。

マクスウェルの手口がだいたい理解できる程度に、彼女はこういった
喜劇じみた罰を受け慣れてしまっていたのは悲しい事実である。

「しかし、そろそろ正座させるのにも飽きたわけだが……次は何を
させようか？」

来た。

マクスウェルが宣言する罰によって、彼女の運命は決まる。

ラプラスは何をさせられるのだろうか？

十中八九、理不尽なもんだろう。精神的なものかもしれないし、肉

体的なものかもしれない。

「やっぱり……………」あれ” だな。うん、そうしうか」

”あれ”…とは？」

ラプラスが戦々恐々と”あれ”についての説明を求めるが、マクスウェルは無視して広間の中央部、口の字型に配置された四つの執務机のうち、彼自身が使用している席に着く。

四つの執務机はそれなりに立派なもので、それと対になっている椅子もまたそれなりに立派なものである。

その立派な執務机の上には積み重ねられた『本』が塔のように幾つも立ち並んでおり、ラプラスの執務机もまた、同じような様相である。

”死書長補佐”の業務に”軌録”というものがあるが、コレは物語の進行状況や物語の方向性を記録して、”真路相談”のための資料を作製するための業務である。

というか、中央区画で”牢働”する”従人”たちの大半は、この業務を主としている。

ちなみに”軌録”という業務は図書館においては雑務に定義されており、作業自体は単純であるが、いかんせん量が多い。

そしてラプラスはこの場において一番立場が下なわけで、他の連中からよく”軌録”を押しつけられている。

しかし、ラプラスは文句を言えない。言えるはずもない。

なぜなら、幾ら”軌録”を押しつけられても、結局、最終的にはこの場に入る誰よりも処理数量が少ないという事実が在るからだ。

嫌がらせである。嫌がらせを受ける当人に文句を言わせないのが、正しく嫌がらせなのだ。

ともかく。

彼女が今回こなさなければならぬ罰は何なのかと言うと。

「これちよつと取ってきて」

ラプラスが手渡されたのは、数枚のA4サイズの紙が一纏めにされた……リスト。

内容は、『本』……というか”処物”のタイトルが記されただけの簡潔なもの。

しかしラプラスは、このリストの意味をよく理解していた。

身をもって……である。

「あ、あの……マクスウェルさん？　これって——」

「見てわかるだろう。リストだ」

「いやいや、そうではなくって……ですね？」

ここは、” 図書館”

” 出来損ない” で” 不安定” な連中が最後に辿りつき、役割を与えられる、そんな場所。

そして” 図書館” の中央区画第十二階層の、32番地。

そんなところに、彼女はいた。

黒髪に、黒いレディーススーツと、個性と言ってしまうえば元も子もない短めの黒いオフィススカートを纏った、黒一色の女性。

黒い髪はセミロングに切り揃え、そこから覗くのは理知的な顔立ちと、そしてこれまた知性的な光を宿した瞳である。

そして女性としては”わりと”長身の部類に入る彼女の容姿は、美人と表現して誇張ではない程度に整っていた。

普通に美人である。

メリハリは少々乏しいが。そんな女性。

しかし現在、理知的な外見の彼女の眉間には形の良い眉が寄せられて深い皺が形成されており、右の頬は不規則に痙攣して、やはり形の良い口を引き攣らせている。

言うまでもなく、ラプラスである。

ラプラスという事実が、前述した数行の文章を一気に無意味な文章に変えてしまうが、とにかく彼女は口を引き攣らせていたのだ。

彼女の視界に映るのは、『本』

『本』

『本』 『本』

『本』 『本』 『本』

『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』
『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』
『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』
『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』
『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』
『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』
『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』
『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』
『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』
『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』	『本』

[illegible]

『本』 『本』 『本』 『本』 『本』 『本』 『本』 『本』
『本』 『本』 『本』 『本』 『本』 『本』 『本』 『本』
『本』 『本』 『本』 『本』 『本』 『本』 『本』 『本』

視界に映る全てが。右も、左も。前も、後ろも。

あろうことか上方ですら（さすがに下は地面である） 『本』という
情報記録媒体で埋め尽くされたその場所で、彼女は、”ラプラス”
は頬を引き攣らせながら立ちつくしていた。

「ふう……本当に。なんでこうなるかなあ」

ラプラスが遅刻したのが原因である。

圧倒的に己に非があるはずなのに、彼女は現状に理不尽を感じて
いた。

今回彼女が申し付けられたのは、要約すれば「業務に必要な”処物”
”があるからとってきて」という、なんの面白みもないモノである。

お使い、みたいなものらしい。

もちろん、そんな可愛らしいものでは決してなくて、むしろ嫌がら
せの類であろう。

いいや今回は、今回ばかりは明らかに嫌がらせだろう。

しかし、幸いなことに彼女ならば、この暴力的な視覚的效果を持つ
大量の”処物”の中から目的の”処物”を見つけたことは容易だ
ろう。

”未来”という不確定要素そのものである、彼女ならば。

「嫌だなあ……」

ただし、あくまで探し出すのが容易なだけで、回収するのは己自身でやらなくてはならないし、なにより、”処物”のあるエリアまでは、己の脚で”歩いて”いかなければならない。

面倒だ。そして、腹立たしくて忌々しい。

なにより、件の上使さえその気なら、ラプラスがわざわざ直接回収に出向かなくても済むのである。

しかし不本意ながら”前回”の経験も相まって、前回ほどしんどい思いはしなくて済むだろう。

このエリアの全貌はなんとなく掴んでいるし、土地勘みたいなものも彼女の中で順調に育まれてる。

「帰って『魔剣天使ロイアルまりん!?!』読み直したいなあ………
…よしっ!! なんかやる気でてきた!」

ラプラスの眼の前には運搬台車、いわゆるカートがあり、その取っ手には彼女の右手が添えられている。

よくよく考えれば、この台車にリストに記された全ての”処物”が乗り収まるわけがない。

往復しなければならぬのだろう。

ラプラスは少し鬱になるが、これも『魔剣天使ロイアルまりん!?!?』のためだと、己に言い聞かす。

彼女の左手には、必要な”処物”のリストが記されたA4サイズの数枚の紙が握られている。

しかし、そんな彼女がとうとうやる気を出した。

『魔剣天使ロイアルまりん!?!?』のためではあるが。

ラプラスがパンパンと両手で頬を軽く叩いて、気合を入れる。

右を見る。本棚の並木が、それなりに視力の良いラプラスが通路の先が霞んで見えない程にまで続いている。

左を見る。以下同文。

前を見る。やはり通路の先が霞んで見えなかった。

後ろは振り返らない。振り返っても、きっと同じ光景が映るだけだろう。

上を見た。天井の概念を覆すかのような、彼女の周りに立ち並ぶ本棚と同様に、そこには隙間なくぎっしりと『本』が詰まっていた。

もはや見慣れた光景である。

そういうところなのだ。ココは。

続いて、下を見る。よかった。ただの地面だ。

そして、視線を前方に戻す。

「……………よし。行きますか」

少々低めの、しかし女性らしい透き通るような声で、彼女は宣言する。

ラプラスは軽く息を吐き、気分を落ち着かせた。

あの憎たらしくも敬愛する上使（最近の敬愛心も薄れてきている）は……………まあ、どうでもいいだろう。

しかし、自分の仕事が遅れば"同僚二人"にも迷惑がかかる。

いや、とここで首を振る。

むしろ、なぜ遅れたという正論に加えて、無意味に、散々と自分を罵倒してくるのではないか？

それだけは避けなければならない。

絶対に避けなければならない。

もう思考はしない。

彼女は再び"視て"、自分の立つ位置から最も近いであろう本棚に目星をつけて…歩きだす。

目的の”処物”を取りに向かうために、ラプラスは歩きだした。

リストを片手に、カートを片手で押して（やはり片手で使えば不安定なはずなのに）、本棚の樹海へ、『本』の『迷宮』へと。

”死書長補佐”となってそれなり経つが、ラプラス自身、己が未熟であることを自覚している。

ラプラスは『魔剣天使ロイアルまりん!?』の”真路相談”を終えてから、度々の頻度で”真路相談”の実習を行っているが、やはりあの気分の悪さには慣れないでいた。

マクスウェル曰く、慣れないなら慣れないでそれでいい……ということらしいが、あの”白いの”の言っていることなのでイマイチ信用にならない。

そういえば、結局あの”無職男性”はどうなったのであろうか？

正直なところ、”図書館”に流れ着いてから疑問が尽きないと思う。

”図書館”がなんの為に存在し、なんの為に”処物”を管理しているのか。

悩んだところで、結局のところラプラスには割り切ることしかできないのだ。

ここはそんな場所で、そういうものだ。

なんだかんだでラプラスは、ここでの生活が気に入っているのだ。

意地の悪い上司も、タチの悪い同僚二人も、ふわふわした元同僚の友人も、なにかもが。

この”図書棺”という空間を、”死書長補佐”という立場を、彼女はどのようにもなく気に入っていたのだ。

この物語は、ココではない何処かに確かに存在して、決して存在しない場所。

《図書棺》の中央区画第十二階層32番地で牢働する4人の従人たちの、異世界でも、現実が舞台でもない、非日常的な日常風景を綴った……業務記録である。

ちなみに。

今回は最も近い目的の本棚が五キロ先だったということを、やはりラプラスは考えないようにした。

1-6. とある死書長補佐のエピローグ（後書き）

ジャン太です。

いやはや、本当に長々とすみません。

駄文です。どうしようもない駄文です。

しかし、そんな駄文を読んでもくださる方々には感謝してもし足りません。

今回で一区切りです。

次回からは”蝕員編”です。

主要登場人物である四人を、一人一人メインにして書いていくつもりです。

全四部で考えています。

そこまで付き合ってくださいる方はいるのかなあ？

まあとにかく、これからよろしくお願いいたします。

ああ、そうだ。

今回ちよろつと登場した人物。

”パラドクス”さんについてです。

こいつの本質は”矛盾”です。

パラドクスという言葉は矛盾と混同されがちですが、同じ意味ではありません。

ですが、この作品に出てくる存在は”いい加減”で”不安定”です。

”いい加減”で”不安定”な奴らしきないわけですので、あえてパラドクスを名乗らせました。

いやいや意味わからんし、と思われる方も居られるのでしようが、どうかご容赦を。

それでは今回はこれで。

ありがとうございました。

死書長補佐編の登場人物（前書き）

登場人物の簡易紹介です。

死書長補佐編の登場人物

◇ラプラス

死書長補佐編のメインキャラクター。図書館の中央区画第十二階層32番地で牢働する従人。

黒髪をセミロングに切りそろえた黒一色の装いの美人。背が高い。理知的で出来る女のオーラがある。

彼女の正体は、“未来”という不確定要素そのもの。

“図書館”という空間に“疑問”をもっている。

ちなみに設定上の外見年齢は22歳。

◇エリュシオン

図書館の中央区画第十二階層32番地で牢働する従人。蝕員という役職に就く。

淡い寒色系のゴスロリ服を着た外見少女。銀髪。少女らしい高い声だが、どこか安心する響きがある。

“図書館”という空間を“否定”しているらしいが詳細不明。ちなみに設定上の外見年齢は12歳。

◇ルール

図書館の中央区画第十二階層32番地で牢働する従人。戒説という役職に就く。

茶色いスーツを纏った丸眼鏡の似合う少年。茶髪。

“図書館”という空間を“肯定”しているらしいが詳細不明。ちなみに設定上の外見年齢は14歳。

◇マクスウェル

図書館の中央区画第十二階層32番地で牢働する従人。死書長と言う役職に就く。物語の実質的な主人公。

髪も服も、なにかもを白一色の装いで身を固める青年。瞳は蒼い。意地が悪い。

”図書棺”という空間の本質を垣間見たらしい。ちなみに設定上の外見年齢は25歳。

◇ゆめ

図書棺のエントランス区画で牢働する従人。”請付”という役職に就く。

柔和な表情の美人。薄黄緑のスーツと薄黄色のスカートを纏う。髪の色は薄桃色。ふわふわしている。

ラプラスの友人で、元同僚。ラプラスとほぼ同時期に図書棺に流れ着く。

ちなみに設定上の外見年齢は21歳。

◇パロドクス

自称棺長。それ以外の詳細は不明。

◇無職の男性

『魔剣天使ロイアルまりん!?!』に転生を希望している青年。22歳。

”真路相談”の実習で、ラプラスが”面説”した人物。容姿普通の日本人。

その正体は、途中で打ち切られた二次創作小説を素とした世界の住人。

ちなみに無職と言えば無職だが、これは就職活動中だからである。

◇花宮まりん

『魔剣天使ロイアルまりん!?!』の主人公。本編での説明はなかったが達観した少女。

世界平和や愛だとか友情だとかには完全に無縁の、極々普通の少女。

ちなみに設定上の年齢は10歳（作者的な魔法少女適齢期）。

死書長補佐編の登場人物（後書き）

キリのいいタイミングに、また人物紹介をしたいと思います。

ああ、そうだ。

関係のない話ですけど、もしも読者様方の中に『魔剣天使ロイアルまりん!？』の内容に興味のある方がいれば、もしいけば外伝で書きましようか？

暇つぶしで授業中に設定とか書き貯めましたし……どうしよう。

というかそもそも。

こんな駄文を読んでくださるような心が寛大で寛容な方が居られるのかどうか……

感想にでもご要望を書いていただければ……もしかしたら『魔剣天使』、投稿しちゃうかもしれません。

まあ、所詮は作者の妄想です。

ていうか『魔剣天使ロイアルまりん!？』で……タイトルのネーミングは某魔砲少女のものを参考にしましたが……さすがに不味いですかねえ？

修正入れたほうがいい、ですかねえ？

210. とある蝕員のプロローグ

歩いては行けないどこかに存在して、しかし決して存在しない場所。ありとあらゆる”いかげん”で”不安定”な連中が最後に辿り着く、そんな場所。

上下左右上方（流石に下方は床）と、ありとあらゆる場所と空間に『本棚』が配置され、その中には隙間なく規則的に大量の『本』：”処物”が納められているという空間。

”処物”という情報記録媒体を、もはや強制的に見せつけられているのではないかと錯覚してしまいそうになる、そんな場所。

”図書棺”

図書”館”ではなく、図書”棺”。

その”図書棺”の中央区画第十二階層32番地の中心部に存在する、天井が存在しているのかどうか疑問になるほどに高い吹き抜け天井のある、広間。

王族や貴族だとかいう連中が居れば、社交界やダンスパーティーが始められそうな程度には広いその空間で、黙々と作業をこなしている存在が居た。

広間の中央に口の字型に配置された、そこそこ立派な執務机のその一つに。これまたそこそこ立派な椅子に腰掛けた小柄な存在が、居た。

どの執務機の卓上にも、ただでさえ分厚い”処物”が何段も積み重ねられて幾本もの塔を形成していた。

身長が足りていないために両の足が床に着いておらず、しかしこの少女は、だからといってプラプラと足を弄ばせるようなたちではなく、お人形のように姿勢良く、その両足を床に垂直に向けていた。

淡い寒色系のゴスロリ服を着た、腰の位置まで伸ばしてある流れるように美しい銀髪、少々攻撃的な雰囲気のあるツリ目が特徴的な少女。

その細い両足には白色のソックスと、フリルとリボンがふんだんにあしらわれた服によく似合うローファーを履いており、その全貌を伺い見れば先程表現したとおりの、正に人形のような無機質さも見てとれるような、そんな少女。

中央区画第十二階層32番地を管轄担当する”蝕員”……エリユシオンである。

この広間で業務……”牢働”を行う存在は彼女を含めて四人いるが、しかし”普段”なら無駄に、無意味に騒がしいこの空間も、今現在は静寂で満ちていた。

否、時折ペラリ…ペラリとエリユシオンが両手で持ち視線を文面に固定している『本』…”処物”の頁が捲る掠れた音が響くのみで、それ以外の音は彼女自身の呼吸音さえも聞こえてこない。あるいは、もしかしたら本当に呼吸を行っていないのかもしれないが、この”図書棺”に存在する”従人”はただの一つも例外無く”生物”ではないので、この場合は酸素欠乏症の心配は無い。

図書館で牢働する”従人”たちは、”基本的”にヒトの姿形をとっている。

しかしだからって、動物界・脊索動物門・脊椎動物亜門・哺乳綱・サル目（霊長目）・真猿亜目・狭鼻下目・ヒト上科・ヒト科・ヒト属・ヒト種である人間と同様の常識を”従人”に求めるのは無意味な行為であろう。

彼女たちは”出来損ない”で、どうしようもなく”不安定”なのだ。

不安定だからこそ図書館に流れ着いたとも言えよう。

図書館とは、そういう所なのだ。

ともかく。かつての、それこそ”自称棺長”が図書館のシステムを監理する以前の、ただの”無名の空間”であった頃の様に、今現在この広間は静寂で満ちていたのだった。

エリュシオンは、外見こそ釣り上った目付き故に攻撃的で近寄りがたい雰囲気であるが、その内面は少女の様な外見からは思いも寄らないくらいに落ち着いており、それ故に黙っていれば無機質な印象が見てとれる。

落ち着いてると表現はしたが、子供っぽくないのかと聞かれればそうでもなくて、趣味嗜好は外見そのもので、”居住区画”の彼女の自室には彼女の私物である大量のぬいぐるみが存在している。

ただし。彼女も従人であるのだから、一筋縄で済むような簡単でつまらない人格を保有しているわけが在るはずもない。

彼女は、とにかく気だるげなのだ。

外見云々ではなく、思わず雰囲気で察してしまえそうなくらいに気だるげで、面倒臭がり屋さんなのであった。

では何故彼女はこんな誰もいない空間に居るというのか。常人なら、主に精神を病んでしまいそうな常軌を逸脱した『本』の牢獄のようなこの空間に、彼女はこういった意図があって居座っているのか。

その答えは単純で、業務をしているだけなのだ。

これは残業といった類のモノではなく、地球の人間社会で言うところの”早朝出勤”に近い意味をもつものである。

彼女は確かに面倒臭がり屋で、業務態度も一見してみれば、彼女の気だるげな雰囲気も相まってとてもじゃないがやる気があるようには見えない。……ただし一見してみれば、である。

やる気が無いからといって業務に手を抜いているわけではなく、むしろ彼女の作業は正確で的確で、そして何よりも……速い。

やる気の無さと作業能率が比例しない。それがエリクションであり、彼女が常日頃からとっているスタンスなのだ。

とにかく、真面目なのだ。

遅刻なんてしたことが無いし、業務だって、あの”規格外みたいな奴”を除けば真面目一辺倒の”丸眼鏡”よりも早くに終了する。それくらい、真面目だった。

どこの”外見だけ知的美人”に正座させて見習わせたい話であるが、今はどうでもいいことだ。

そして真面目であるが故にこの場で業務を行う誰よりも早く出勤し、一人黙々と割り当てられた業務を

こなしていたわけだ。……別に彼女は読書家という訳ではなくて、むしろそういった作業は苦手なのであるが、これはあくまで”業務”である。

その業務については追々説明するが、さて。ここが中央区画第十二階層32番地の中心部であるのならば、今この場にいない”従人”たちがいずれはこの場に現れるのであろうということは道理であり、必然である。まあ、必然という言葉を図書館で使用するのは無意味であり、そして洒落にならないことなわけだが。

つまりこの静寂に支配された空間に。エリュシオンしか存在しない、無機質なこの空間に。新たな存在が加わったのだ。

広間に、扉の開閉時に聞こえる独特の、鈍くも不愉快の無い音が響いた。

エリュシオンは視線を”処物”から離さないが、この広間の入口を、無駄に豪華で無意味に華美で巨大な扉を押し開けて現れた人物を、彼女は知っている。

白い青年。なにかもが白い青年。髪も、来ているスーツも、靴も、足元までもあるロングコートも。肌ですらも青白すぎる青年。

瞳のみが唯一蒼い青年。エリュシオンの上使であり中央区画第十二

階層32番地の最高責任者でもあるその青年、このエリアを管轄する”死書長”。マクスウェルが現れた。

「へえ。やっぱリエリュシオンは来るのが早いな……どうする？
紅茶でも淹れようか？」

そのマクスウェルの言葉にエリュシオンは、気だるげに一言返した。

「……………」砂糖”は多めにしといてよね」

どうやら、子供っぽいというのは否定しようのない事実であったようだ。

210. とある蝕員のプロローグ

「いやはや、お二人とも相変わらずお早いですね。どこかの塵屑ごみくずにも見習ってほしいものですが、無駄なものは無駄だと割り切るしかないのが辛いところですねえ。そういえば”アレ”がだらし無さ過ぎて忘れがちになってしまいうのですけど……”アレ”は一応は”死書長補佐”ということなんですよ？ ボクは下手をすれば”アレ”の部下になってしまう可能性もあるということなんですかね？
冗談じゃありませんよ」

「いやいや”ルール”。出勤直後にその台詞は”イロイロ”とまづいんじゃないのか？」

エリクションと自分用に紅茶を淹れ、二人で黙々と業務をこなしていたマクスウェルが、この広間の入口を、無駄に豪華で無意味に華美で巨大な扉をくぐって現れた、出勤第一声にこの場に居ない”従人”をひたすらに罵倒する人物をたしなめた。

一息で”とある従人”を罵倒する少年も、その少年をたしなめる青年の姿も、もはやこの広間での日常の一部となりつつある。というか、完全に日常の一部となってしまっていた。

「問題無いでしょう。死書長の御心遣いは痛み入りますが、ボクの読者様方の評価が下がろうが知ったことではありませんよ。というか、こんな駄文なんて読む価値なんてありませんよ。読んでくださっているお方なんて、実はいないんじゃないですか？」

「読者様とか言うんじゃない。しかしまあ、後半に関しては同意だな」

ルールと呼ばれた少年。ルールと呼称された少年。

茶色いスーツを着こなしネクタイを几帳面に締めた、丸眼鏡の良く似合う少年。真面目そうだがニコニコと愛想のいい笑顔を浮かべており、内面はともかく外見だけならできた少年である。

響く声は少年らしくも、徐々に青年の声に移り変わりゆく時期特有のなめらかな響きがあるが、”従人”は基本的に歳を取らず、歳を取らないのだから外見も変化しない。残念なことにルールが青年体になることはあり得ないのだが、ルール自体はそのことを特に気にしていないので、結局はなんの問題もない。

「しかし御前も大概だな。毎回規定前の一定の時間に寸分違い無く

やって来てるわけだし……」

「それがボクという存在ですからね……で、死書長補佐殿は”また遅刻ですね」

ときに、実はこのルールという少年。この場に居ない、この広間で牢働するもう一人の従人のことを、とにかく嫌っていた。嫌っていたというよりは、むしろ八つ当たりの様なものだが詳細は彼をメインとした話で語ろうと思うので、今回は省略。

話を戻して、図書館に存在する従人は、唯一の例外を除いてとある”従人”に呼称を与えられている。

”パラドクス”。

いい加減で不安定な連中しかいないこの図書館においても、飛びぬけていい加減で不安定な存在であり、これ以上ないくらい胡散臭いという、そんな奴。詳細は省くが”ソイツ”は”矛盾”という存在そのものであり、それ以上は説明のしようがない。

”自称棺長”を名乗り、図書館のシステムを監理しているという、図書館の全貌を唯一把握していると言われているが、この話は今は関係が無いので追々。

「決めつけるのは良くないが、遅刻だろうなあ」

「遅刻でしょうねえ」

溜息を吐くマクスウェルも、呆れ果てるルールも、これもまた見慣れた光景である。

「……仕方ない。これだけは使うまいと心に決めていが、致し方あるまいな。ルール！ エリュシオン！ 扉前にトラップを仕掛けようと思うんだが、不都合はあるか？」

トラップ。説明するまでもなく、罠である。

マクスウェルがエリュシオンとルールに不都合の確認をするが、彼は既に扉前にかがみこんで、ごそごそと何やら怪しい音を響かせながら”トラップ”を設置し始めていた。

マクスウェルのその様子にルールと、興味を惹かれたのか一旦の業務を中断してエリュシオンが近づく。

「罠……ですか？ 新しいパターンですね。……で、ソレにはどんな効果が？」

「なんだか面白そうじゃないの。手伝うこと、ある？」

マクスウェルは近づいた二人を振り返る。関係のないことだが、マクスウェルはロングコートを着込んでおり、屈み込んだことによって純白のコートが汚れてしまうのではないかという心配は、実は必要ない。

ここまで読んで頂いた読者様方にはこの一言で十分だろう。図書館だから。

まああえて説明するならば、この図書館という空間に常軌を求めることのほうが間違っているのだ。

詳しくは説明しないが、図書館にはゴミはおろか塵一つ積もらない。そういうものなのだ、図書館とは。図書館とは、そういうところなのだ。

ともかく、マクスウェルはただの一言だけ、二人に言い放つ。

「手伝いは入らん……まあ見てろ。絶対に面白いから」

…

…

…

そしてその時。黒髪をセミロングに切りそろえた全身黒衣の理知的な美人、ラプラスが広間に入ってまず感じたことは、違和感でも困惑でもなく、ましてや恐怖でもなかった。

というか、それら全てを含んだ言葉に言い表しようのない戦慄を、彼女は感じていた。

知的な外見にも関わらず、相も変わらなく遅刻してきた彼女は広間に至る道中で、どのような遅刻の理由（言い訳ともいう）なら連中をうまく誤魔化せるのだろうかなどと、彼女にとっては死活問題に関わるのであろうが至極無意味かつ間抜けな事を考えていた。

全面的に彼女に問題があり、というか彼女にしか問題はないのだが、彼女と言う存在が”そういうモノ”なのであれば仕方のないことかもしれない。図書館とは、そういうところなのだ。

彼女の正体は”未来という不確定な要素”そのものであり、同時に未来という可能性そのものでもある。そしてラプラスは”死書長補佐”であり、次期の死書長候補者でもあるのだ。

ここだけ聞けば彼女がとんでもない存在に聞こえるが、いや、実際にとんでもない存在なのは間違いないし、その他の能力も優秀で、おまけに容姿も整っているとくれば、なんだその超人は？などと皆様方は思われるかもしれない。

しかし、そんな要素を帳消しに。否、台無しにしてしまうくらいに彼女は色々と残念なのだ。どのように残念なのかという詳細は省こう。今回の記録のメインキャラクターは彼女ではないのだから。

それはともかくもし彼女が、これから自身に降りかかるであろう災厄を事前に”視て”知っていたのならば、あるいは結果は違ったのかもしれない。

広間の入口、無駄に豪華で無意味に華美で巨大な扉をくぐって、結局巧い理由を考え出すことができなかった彼女を待っていたのは、彼女にとって想像を絶する光景であったのだ。

その光景を造り出す存在たちは、取り掛かっていた雑務を一旦止めて彼女を伺い見た。

「よお……ククッ。相変わらず遅かったな。……寝坊か？……ク

フフッ」

ニヤニヤ。ニヤニヤニヤニヤ。ラプラスの眼前に居る白い青年は、ニヤニヤしていた。とにかく、ニヤニヤしていた。憎たらしいくらいにニヤニヤしていた。普段なら問答無用の鉄拳制裁が飛んでくるはずなのに。

「随分余裕をもった出勤ですねえ、ラプラスさん。本来なら罵倒し倒して差し上げたいところなのですが、生憎とあなたにも都合があるでしょう。今回のみに限って勘弁して差し上げます」

ニコニコ。ニコニコニコニコ。ラプラスの眼前に居る丸眼鏡の少年は、ニコニコしていた。とにかく、ニコニコしていた。逃げ出したいくらいにニコニコしていた。気のせいか、普段よりも罵倒の勢いが無い気がする。”白いの”よりは、まあ信頼できるのだろうか、いつもと何一つ変わらない表情が全然安心感を与えてくれない。

ゴスロリ服の少女はいつもの気だるげな表情であったが、何故かは知らないがコチラをチラチラと伺っているような気もするし。

「べ……別に何もないんだからね？」

しかもローテンションなツンデレで返された日には、いろいろと残念なラプラスでも流石に何かあると気付くのは当然のことだろう。疑問文だし。

「……………私は一体どうすればいいんでしょうか？」

「どうした？　いつもの御前なら下手くそな屁理屈を並べて遅刻の言い訳をしているところなんだが……………なんだか御前変だぞ？」

「変なのはアナタたちでしょうがああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！」

ラプラスの中で不気味さがピークを越えたらしく、とうとういつも通りの逆切れを披露してしまうことになった。いつも通りということは、これもまた見慣れた光景であるということだ。

そしてこのラプラス。期待は決して裏切らない大変空気の読める体質をもっており、その芸人体質だけは流石だといっておこう。何が言いたいのかと言うと、逆切れした際に勢い余って一歩踏み込んだというだけである。

マクスウェルの仕掛けた”トラップ”がある、その場所へと。

そしてその一歩が、そのたった一歩こそが、彼女を恐怖のどん底へ叩き落とすことになる。

突如、ラプラスの視界が歪む。

しかしあまりにも一瞬だったこともあり、というか極度の興奮従体であったため彼女はそのことに気がつかなかった。

そして彼女は……………浮いた。

「うおわッ！？ なっ…なんですか！？　　というか私飛んで！？　　ああ！！　　そんなことよりスカートがッ！？」

彼女の周囲だけ重力が無くなってしまったのではないかと思うくらい、見事なまでに浮いた。この図書館には重力というものは存在せ

ず、だからこそ天井にも本棚があつて、そしてそこに納められた本が落下してこない訳なのだが。しかし重力が存在しないにも関わらず、どうやって”従人”たちは床に立っているのかと言えば、それはココが図書棺で、そして”従人”たちが立つ場所が”床”だからという曖昧な説明しかすることができない。

床。天井の対義語であり、建築物の中で畳を張った、もしくは板敷のところ。とにかく、人が立って歩く場所である。

図書棺内部の通路は、”ある存在によって”そのように”定義”されてるのだ。だからこそ、重力が無いにもかかわらず”従人”は直立して立ちまわることができるわけだ。

なのだが、どういう訳か今現在”浮かんで”いるラプラスには、その定義が当てはめられていないようだ。ちなみに今現在ラプラスは、重力が無効化されて捲れ上がってしまった「あわわ！ あわわ！」と意味不明な奇声を上げながらスカートを抑えるのに必死である。

知的な美人が「あわわ！ あわわ！」とか叫んでいる光景は、かなりシュールである。

その現況を作った連中と言え、

「おおぅ…本当に浮いたし」

「ええ……見事に浮きましたねえ」

「……………（ビククリしている）」

イマイチ反応は鈍いが、驚いていることには驚いているらしい。そ

れもそのはずで、この事象を引き起こすことがどれだけ出鱈目なことのなのか、マクスウェルたちは理解していた。

それはそうとして、問題なのはラプラスである。

同僚と上使は不気味だし自分の体は浮くし、そしてスカートは捲れるし：

「い、いったいなんなんですかああ！？　じよっ状況が理解不能なんですけどおおお！？」

いかに人外の存在である従人とはいえ、いきなり足場を失って体制が不安定になれば慌てふためくのは当然であろう。中途半端であるとはいえ、従人は人間を”模範”して存在しているわけなのだから。

「一体なにが目的なんですかッ！？……はッ！　まさか私のパンツ

「見たくもねえよ。あえての理由は面白そうだったからだ」

「見る価値ありませんよ。ボクは貴女が苦しめばそれでいいんです」

「ワタシに関してはそもそも女性体なんだけど……。まあ、面白そうだったからね」

「……………ですよねッ！……！　そう言うだろうと思っ
てましたよッ！！　ええ、勿論ですとも！……！！」

碌な奴がいない。まあ、ここではいつもの風景である。ちなみに、

”黒”である。何がとは言わないが。

「……しかし死書長。この程度のことではあまり面白くありませんし盛り上がりに欠けますよ？　もちろん、ボクのお慕いさせて頂いている死書長のことでですから、何かしらの展開があると予想してもよろしいですよね？」

「むしろ、フワフワ浮かんでてなんか楽しそうなんだけど……ねえ、あとでワタシもやってみたいんだけどさ……いい？」

本当に碌な奴がいない。ルールに関してはもはや外道である。エリユシオンに関してはこのトラップで遊ぶつもりらしい。

「展開に関しては問題ない。それとエリユシオン、遊ぶのは辞めといたほうがいいぞ……そろそろ時間だしな」

「時間って何のことですかッ！？　死書長さんルールさんエリユシオンさんッ！！　ただでさえ不気味だったのに今はそこはかとなく生命の危険を感じますよッ！！　今回ばかりは洒落にならないくらいにッ！！？」

ラプラスが必死に、美人が台無しになるくらいに必死に、唾を飛ばす勢いで訴えかけているが当然ながら無視である。

「このトラップはな、オレの知り合いが悪ふざけで造った代物だ。……悪ふざけで造っちまった代物だ。詳細は省く。時にルール、エリユシオン。図書館内部には明確な距離感というものが存在しないことは知っているだろう？」

図書館には距離という概念が存在しない。それはどうということなの

か？

例えば、そこそこの広さと規模と蔵書量をもつ書店が在ったとして、そこに一人の人間：仮にAさんがいたとしよう。そしてAさんは書店に来店したのだから、当然のことながらなにかしらの本を探しているわけだ。そして、ここからが重要である。Aさんはその本が陳列または納められている場所を探さなければならない。そして、過程や方法は多々あるだろうが、Aさんは目的の本棚まで辿り着いて目的の本を見つける。

そう。来店してから、本を探し出すまでにかかった”時間”。

その”時間”こそが図書館で言うところの距離であるのだ。

つまり図書館では、実質的に時間が距離となっていると言えるだろう。

しかしその逆、距離が時間になっているのかと言えばそうではなくて、それはまた別の機会にでも説明しよう。

「それは知っていますよ。……それが何か関係でも？」

ルールの言葉に、マクスウェルは頷いた。

そして右手の人差し指を伸ばし、天井を……否、天井が存在するのかどうかも怪しい、どこまでも続いているような広間の吹き抜けの、その先を指差した。

「前々から興味があったんだ。この吹き抜けの先には何があるのかって。俺たちの能力では、残念ながらそれを知覚することも、知る

手段さえもない。だからこそ、コレだ」

天井を指差していた指を、浮き慣れて安定したのか、こちらの話を茫然と聞いていたラプラスに着きつける。能力だけは優秀な、このラプラス。なんとなく、まだまだ話は見えないが、本当になんとか身に迫る危険に感づき始めていた。

「そのトラップはな、一時的に定義を書き換えることができるらしい。つまり……」

マクスウェルの説明に、とうとう最悪の展開を思い描いてしまったラプラスが逃げ出そうとするが、どういう訳か浮いた状態から脱出できないでいた。そう言えはいきなり体が浮遊し、驚いて散々とジタバタと暴れふためいていたのだが、その時点で、その浮遊している地帯から抜け出せていないことに気付くべきだったのだ。

脱出不可能。そして、回避不可能。

「……床への重力の定義を、一時的に”反発”に書き換えることだってな」

「あ……」

徐々に、ラプラスの浮かぶ高度が増す。

「中央区画第十二階層32番地担当の死書長補佐であるラプラスには、これからこの吹き抜けの先を調査してもらってこようと思う」

「ふむ、”ルールを司る”ボク的能力も、この図書館ではほとんど意味を持ちませんからねえ。それに、吹き抜けのことも気になって

「おい…………やばいんじゃないのか？」

「今回ばかりは悪乗りしたボクも悪いですしね…………どうしまし
う？」

マクスウェルとルールの二人がやつちまった顔で、ラプラスの身を
本格的に心配しだした。とにかく、なんとかして対処せねばなるま
い。”従人”に死の概念は存在しないがここは図書館であり、何が
起こっても不思議ではない。

この吹き抜けの先で、ラプラスが最悪の場合”消滅”する可能性も
あるのだ。

「俺ちよつと探してくる」

「ボクも知り合いに当たってみましょう」

本気で洒落にないと思ったのだおうか、マクスウェルとルール
の二人は無駄に豪華で無意味で華美な扉を潜って広間を後にしてい
った。

…

…

…

再び、広間に静寂が訪れる。先程までの騒がしさを失い、無機質な空間へと巻き戻ったかのようだ。しかしそんな中でも黙々と業務を続けるモノが存在がし、そしてその存在とは言うまでもなくエリュシオンである。

エリュシオンは卓上に置かれたティーカップを手に取り、マクスウェルが先程淹れた紅茶を啜る。マクスウェルは紅茶を淹れるとは言ったが、これが本当に紅茶であるのかどうかの真偽は怪しいところである。なぜならこの広間には紅茶を淹れるような設備も道具も無く、そして彼女が啜ったこの紅茶らしき飲み物は、マクスウェルが虚空から取り出した……否、いつの間にかマクスウェルがその手に持っていたものである。マクスウェルがそういう存在であることをエリュシオンは理解しているが、やはり信用おけないとも思う。

それにこの紅茶らしきものの、マクスウェルが取り出してから随分経つが全然冷めておらず、いまだ適温を保ったまま存在している。

マクスウェル。曰く、事象の観測者であり、干渉者。図書館に流れ着く存在たちの中でも、ぶっちぎりの規格外。図書館に来る以前の経歴があるという、希少事例。

本人曰く、「図書館に来る前の自分は魔王だった」……らしい。胡散臭いことこの上ないが、もしかしたら本当にそうなのかもしれない。そういうことがあってもおかしくないのが、この図書館いう空間である。

エリュシオンはふと、ラプラスが死書長補佐として配置される以前の自分たちのことを回想したが……別に大して変わらなかったの

はないだろうか？

その当時当時の死書長補佐と自分たちとで、やはり騒がしい日常を送っていたような気がしないでもない。

エリュシオンは、静寂した雰囲気の間を好んでいる。だからといって無駄に騒がしく喧しいあの連中たちが嫌いなのかと聞かれればそうではない。むしろ、彼女なりにその連中たちのことは気に入っているのだ。……顔には出さないが。

しかし偶に、女性としてはわりと高めの身長を持つラプラスを、本当に極端に射殺さんばかりの視線で睨むことはあるが。

別にエリュシオンはラプラスを嫌っているわけではない。体格的な、どうしようもない現実へのささやかな抵抗である。

それに、彼女が”全存在を否定したいほどに嫌悪しているモノ”は別にある。

それはそうとして、である。

死書長補佐は行方不明。死書長はその死書長補佐を搜索中。戒説も同じ。

ということは、そいつ等の分の業務を彼女はこなさないとならないのだろう。死書長補佐の分はもともと少ないので何とかなるが、死書長と戒説はそうにもいかない。とにかく、量が多いのである。

残りわずかとなった紅茶を喉に流し込み、視線を眼前の脅威（雑務）たちに固定する。大量の”処物”の塔がそびえ立っている。そびえ

立って、いた。

目を……………逸らしたくなった。

「あゝあ、めんどくさいわね」

しかしなんだかんだで彼女は真面目なので、結局一人で業務を終わらせてしまうのだろう。

彼女は、そういう存在なのだから。

この物語は、ココではない何処かに確かに存在して、決して存在しない場所。《図書館》の中央区画第十二階層32番地で牢働する4人の従人たちのが繰り広げる、異世界でも、現実が舞台でもない、非日常的な日常風景を綴った、ただの業務記録である。

2-0. とある蝕員のプロローグ（後書き）

駄文を長々と本当にすみません。ジャン太です。

毎度毎度こんな駄文を読んでくださる読者の皆様方には最大の感謝を。

本当にありがとうございます。

さて、新章です。メインキャラはエリュシオンです。

実は各章にテーマがあったりします。

ラプラスさんの”疑問”に始まり、今回はエリュシオンさんの”否定”です。

次回は一気に多数の新キャラがでます。

こんな駄目作者に描写しきれるのは不安ですが、頑張りたいと思います。

では、次回も読んで頂ければ幸いです。

2-1. 死の三姉妹（前書き）

今回は新キャラが6人登場します。

混乱されるかもしれんせんのでご注意を。

2-1. 死の三姉妹

家族。

同じ家に住む夫婦・親子・兄弟などの、近い血縁の人々を指す単語である。まれに犬や猫などのペットという存在もコレに含むモノたちがいるが、ペットの正しい意味はその家庭で家族の一員のように可愛がられる動物、または小動物のことなので、まあ家族と言えなくもないだろう。価値観がそれぞれであるのは当然である。

ちなみに、ペットという単語にはお気に入りや年少者や年下の恋人にも用いられることもあるらしいが、それはどうでもいいことである。

姉妹。

姉と妹。同じ親から生まれた女性同士の兄弟のこと。または同じ系統の二つの物。姉妹都市・姉妹雑誌などがコレにあたる。

さて、どうして冒頭にて家族と姉妹の一般的認識を説明したのかと言うと、今回の話においてその二つの単語が、重大ではないがそれなりの重要性をもつことになるからである。

図書館。ココではない何処かに存在して、しかし決して存在しない場所。それが図書館。ありとあらゆる”いい加減”で”不安定”な出来損ないたちが、最後の最後に辿り着くという、そんな場所。

そして図書館に流れ着く意思のある存在たちのことを従人と呼び、そして今回の話に重要となるのはソレである。従人たちはそもそも

の話生物ではなく、だからといって無機物という訳でもない。あえて表現するならばシステム——プログラムの様なものである。しかし従人たちには確固とした自我と意識をもっており、それらがどの様にシステム……プログラムと例えられる要素を持っているのかと聞かれても説明は難しい。彼らはそういうものだとしか、言いようがない。

それはともかく、従人である。それらの存在に家族と言えるものが存在しないということは言うまでもない。従人は図書館に流れ着いた時点で”未完成”に”完成”しており、そんな存在たちに親兄弟など存在するはずもないのだ。いやしかし、従人としての”存在の根源”が似通っているモノたちをグループとするのならば、それを親子や兄弟と例えることも出来なくはなく、それらの存在が同一の空間（この場合は図書館内部全域のこと）に集まっているのならば、まあ親兄弟の関係とも言えなくはない。

しかしそんな曖昧な関係が家族であるはずもなく、また根源が似通っていたとしても、あくまで似通っているだけで血縁の関係などありあしない。図書館は狭く、しかしそう表現するにはあまりにも広大な空間であるという矛盾を抱えており、そんな中で根源が似通ったものと出会う確率は、もはや天文学的である。

結局のところで、正しい意味での家族は図書館内部には存在しない。……存在しないのだが、しかし例外というものは存在する。

ある一つの現象・事象を多視点多角度から眺めた場合、それらがまったく同じものに映るとは限らない。当たり前である。当たり前であるが、コレが重要なのだ。

そしてコレから紹介する”彼女たち”もまた、多視点多角度の解釈

によって定義が曖昧になった存在である。もともと曖昧であった概念が信仰の解釈の違いによって分裂派生した、”従人”たちの中でも一際奇異な存在たち。

通称、死の三姉妹。

全くの同時期に凶書棺に流れ着き、全くと言っていいほどに容姿は瓜二つ——ではなく、瓜三つ。

死の”虚無面”による信仰解釈から発生した従人、死の三姉妹が長女——”ゲヘナ”

死の”恐怖面”による信仰解釈から発生した従人、死の三姉妹が次女——”ヨモツクニ”

そして、中央区画第十二階層32番地にて牢働する彼女。

死の”安息面”による信仰解釈から発生した従人、死の三姉妹が三女——”エリュシオン”

彼女たちは歪で、屁理屈で、根本的な意味では違うのだろうが、間違はなく”姉妹”で”家族”であった。

2-1. 死の三姉妹

「あゝ……………ダルい」

「早々に何言ってやがる。まあ……………何というか——酷い様だな」

「酷いというか……………マクスウェルの美形としての要素が要素なだけにむしろ——惨いわね」

図書館の一角。疲労を蓄えた従人たちが業務の合間——休憩時間にこぞって利用する区画がある。そこは”処物”による不気味な圧迫感や、本棚による異質な束縛感とは無縁の、図書館という空間では異色な解放感に溢れる空間で、いわゆる和洋中その他諸々含んだあらゆる様式・ジャンルの喫茶店が立ち並んでいる場所。

通称”喫茶エリア”。

それは”自称棺長”が図書館を監理し始めてから創られた区画である。

従人たちは人間ではない。そもそもの話、生物ですらない。ヒトの形を中途半端に模範したモノ——それが従人という存在なのだ。ところが中途半端にヒトを模範したせいで、従人には食事や睡眠も必要ないが、しかし食欲や睡眠欲などの欲求は存在する。それらの欲求を満たすために従人たちには”居住エリア”に各々の自室と、喫茶エリアに存在する各店舗の無銭無料飲食権利が与えられていた。

とにかく、喫茶エリアの片隅。洋式の開放的なオープンカフェ風の喫茶店。”メビウスの喫茶店”という、シンプルかつ意味有り気な店名を掲げたその店に、マクスウェルは居た。否、マクスウェル達はいた。

店外に設置されたテーブルの一つを陣取って、これでもかというくらいにくつろいでいた。というか、マクスウェルはテーブルに突っ伏して、注文した”コーラ”らしき黒い炭酸飲料を、容器に突き立てられたストローでチュウチュウと飲んでいた。これが美少女ならば多少は絵になって可愛げの一つでもあったのであろうが、現実としてマクスウェルは青年といってもいい外見をしており、そしてなにより”男性”である。顔だけをみれば、間違はなく美形——いや、疑いようもなく美形なのだろう。しかし、テーブルに突っ伏し、そしてストローでチュウチュウと飲料を啜っている様な惨状では、もちろん台無しである。

「ダルいんだから酷くも惨くもなるだろう。これも全部、死書長補佐の所為だ。いやしかし…」この三人”で集合するのは随分と久しぶりに感じるな……御前たちは最近どうなんだ？」

「ダルいのはお前自身の問題だと思うが……しかし、死書長補佐と言うと”請付”から推選されたヤツだったか？ まあ、オレのほうは相も変わらず命懸け——いや存在懸けの業務しかしてないぜ。あと実際問題、本当にかなり久しぶりなんじゃないか？」

「アタシのほういつも通り……ていうか最近”凍結指定”が増えてる気がするんだけどね。……ま、いつも通りその内減るんじゃない？ 減らないなら減らないで”自称棺長”とかが動くんだろうし。……そう言えば、”請付”から推選された死書長補佐の娘って、アタシ見たことあるかもしれない」

「オレに関しては業務中に見かけた気がするな。その見かけた娘が死書長補佐かはともかくとして、その娘、なんとなく……こう……」

”マクスウェル達”と表現したからには、彼の他にもこのテーブルを占拠する存在が居る訳なのだが、ココには”色々と残念な理知的な美人”は居らず、”ゴスロリ服の気だるげな少女”も居ないし、ならば当然という具合に”丸眼鏡の似合うスーツ姿の少年”もいない。

この場に居るのは何もかもが白い青年——言うまでもなくマクスウェルと、その他に二人の従人である。

一人は特撮番組——特に戦隊モノの主人公たちが着ていそうな制服を”着飾った”、赤いマフラーを巻いた青年。彼の着る制服はマフラーと同じく赤を基調としたもので、まるで戦隊モノの番組に出てくる”レッド”のような佇まいである。彼はサクサクとビスケットを齧っているのだが、彼の着る制服よりも濃い紅い髪は、特にポーズを決めているわけでも、風が吹いているわけでもないのになびいており、まさしくヒーローの様な”漠然とした格好良さ”が滲み出ていた。

彼が”自称棺長”に名付けられた名称は——正義である。

悪を倒す、正義。悪を”倒せる”——正義

「こう……なんというか、巧く言葉が見つからないんだけど……」

「アタシの見た娘も……その、なんというか……ね？ 言葉は見つからないんだけど……」

もう一人は中世の——例えば貴族や王族が侍らせていそうな執事服を着た、首から懐中時計をぶら下げた女性。彼女の着る執事服は俗に言う燕尾服であるが、女性としては”かなり”長身に部類され

るであろう彼女には良く似合っていた。そして茶髪をショートカットにし、執事服も相まって男性らしさが伺えるも、それらを感じさせることなく彼女は、身体的に”女性”としての特徴が”自己主張”していた。

しかし、そんなものよりも彼女を認識する上でのもっともたる特徴がある。

彼女は——ラビット。

彼女の根源と、彼女の身体的特徴になぞらえた、最高で最適でこっぴどかしい名称である。

なぜなら、彼女の頭には見事な——これまたみごとな”ウサミミ”が生えてたからだ。

「御前達の言いたいことはなんとなく——といか、むしろ理解した」

そんな正義とラビットの前で突っ伏すマクスウェルが、途端に起き上がった。先程の酷い——惨い様子よりは幾分かましだが、それでもストローでチュウチュウとコーラを吸い続けているのは流石にいただけない。

二人は言葉を探して言い淀んでいたが、黙ってマクスウェルに視線を合わせた。

「なんというか……言葉にしようのない”残念”さがあったんだろ？」

「しかし………本当に客が来ないな」

「――」

正義とラビットがそれぞれ業務に戻り、その場にはマクスウェル一人が残った。この白い青年はコーラが好物なのか、すでに4杯を飲み干して5杯目に取り掛かっていた。相も変わらずストローでチュウチュウと吸って、だが。

「――」

”常連しか知らない隠れ家的な店を目指した”？ 常連………というか”御前が気に入ったヤツ”しか入店できないようにしている、というのは問題があったりするんじゃないのか？」

そして、その彼の傍らに立つ侍女服の女性がいた。侍女服――…つまりメイド服。だとすれば、まさか今までにも度々物語に登場してきたこの喫茶店――”メビウスの喫茶店”は俗に言うメイド喫茶であったのだろうか？。こんな説明に文字を浪費するのはアレなので簡潔に言うと、是であり否とだけ言っておこう。

その理由は、この喫茶店を経営しているのがいままさにマクスウェルの隣に佇む侍女服——メイド服の女性で、そして彼女こそがこの”メビウスの喫茶店”の唯一の従業員だからである。

「——」

「御前は御前で都合があるのは知っているが……だとしても、従業員の一人くらい雇えばいいだろう？」

従業員が一人しか居らず、そしてその従業員がメイド服ならば、正しい意味（しかし少々微妙ではあるが）でのメイド喫茶とは言えないが、決してメイド喫茶とも言えなくもないのだろう。

この店の経営者であるその侍女服の女性は、別に”メイド喫茶”を意識したわけではない。古今東西ありとあらゆるジャンルに富んだ喫茶店の立ち並ぶこの喫茶エリアには、当然……というのもアレだが、メイド喫茶なるモノも確かに存在している。

「————！」

「”素人に任せたくない”って、この店御前が趣味で始めたヤツだろうに……」

この二人、一見では会話など成立しておらず、一方的にマクスウェルがメイド服の女性に話しかけているように見えるが、ちゃんと会話は成立している。まあ、一般認識における会話とは少々異なるが、メイド服の彼女——メビウスにはこれが通常であり一般なのである。

彼女は、そういったものだった。そういった感じだった。

ここでマクスウェルがただ一人で居残っている理由について説明しよう。別に彼がコーラ（と、思われる炭酸飲料）好きで、コーラ（かもしれない黒い炭酸飲料）を飲み足りただけなのかと言えば、そうではない。いや、もしマクスウェルがコーラ（らしき炭酸飲料）が好物なのであれば、そういった理由もあるのかもしれないが。

とにかく、理由だる。マクスウェルがこの場に残っていた理由は、待ち合わせ……そう、待ち合わせである。この物語はラブコメではないので、実はマクスウェルには交際している相手が存在し、その誰かを待っているという訳では決してない。

「――」

「ん？ ああ、ようやく来たか」

そしてストローでチュウチュウとコーラ（かもしれない謎の炭酸飲料）を吸い飲んでいたマクスウェルの前に、“喫茶メビウス”に彼女たちは――現れた。

三姉妹。否、正確には……三つ子だろう。マクスウェルの目の前に現れたのは三人の少女であった。しかしやはりココが図書館で、その彼女たちも”従人”ならば、当然普通であるはずが無い。普通を求めてはいけないのだ。

彼女たちは、“似すぎていた”。三つ子だとか姉妹だとか、そんな言葉が陳腐に思えるくらい、彼女たちの姿は瓜二つ――否、瓜三つだった。

マクスウェルから見て右から、“強烈な暖色系の服を着た少女”、

” 淡い寒色系の服を着た少女 ”、 ” 無機質な無彩色の服を着た少女 ”。

背格好も、来ているゴシックロリータ調のフリルとリボンがふんだんにあしらわれたドレスも。

なにもかもが同一で、全てが同等で、あらゆる点で同様な少女たちだった。

「よう、ずいぶん遅かったな？」

声をかけるマクスウェルに反応したのは少女たちの中央、淡い寒色系の服を着た少女。お気づきの通り、死の三姉妹が三女——エリユシオンである。

気だるげな声で、言い放つ。

「うるさいわね。面倒だったけど来てあげたんだから感謝しなさいよ」

死の三姉妹。

全くの同時期に図書棺に流れ着き、そして”死”という同一の根源をもつ彼女たちは、面白半分にそう呼称されることがある。妥当で、適切で、不親切。そんな呼称であるが、彼女たち——当の本人たちはそれなりに気に入っているらしいことを、マクスウェルはエリユシオンから聞いたことがあった。どこがどう気に入っているのかと聞けば、「……なんとなく？」という要領をえない解答が返ってきたが。

長女のゲヘナは死の虚無面を司っているらしく、次女のヨモツクニは死の恐怖面、三女のエリユシオンは死の安息面をそれぞれ司っている。

死。生物に訪れる末路。生物の身体が活動が停止すること。他にも物体的な死など、さまざまな定義思想をもつ単語ではあるが、大きく分類してしまえばこの三つの思想に辿り着くらしい。

無機質な無彩色の服を着た少女、ゲヘナは死の先にある絶対的な真実——虚無。

強烈な暖色系の服を着た少女、ヨモツクニは死への絶対的な感情——恐怖。

淡い寒色系の服を着た少女、エリユシオンは死への絶対的な幻想——安息。

彼女たちは本来一つの存在であり、不自然がもはや自然な図書棺内

部においても奇異な存在である。どれくらい奇異かといえば、あの”いい加減”と”不安定”の代名詞である”自称棺長”のパラドクスが、思わず驚愕したほど……と言うくらいだ。

とにかく、とんでもないことなのだ。

そして本当にとんでもないのは、彼女たち三姉妹は死という曖昧な概念の、それぞれの思想に沿った能力”のみ”を行使することができる。

”のみ”である。本来なら三人ともが、三人の能力の全てを行使できる……ということなのだ。

しかしそれは、ある理由によって本人たちが封印し、それぞれがそれぞれの能力のみを行使できる程度に限定した。そうしなければならない理由があったのだが、それはまた追々説明しよう。

ここまで大仰に説明しておいて何だが。

「むぐむぐモグモグコクコクうまうま」

「がつがつゴクゴクむしゃむしゃバクバク」

「ぱくぱくはむはむモキュモキュくぴくぴ」

「……いやあ。本当に良く食うな……」

「――」

料理にスイーツと、なんでもすごく美味しいと評判な”メビウスの喫

茶店”にて、テーブルに陣取ってこの様に猛烈な勢いで食事している姿を見れば、お人形の様な佇まいも、いままで大仰に説明してきた彼女たちの本質も台無しにはなってしまうが。

外見相応の姿として見れば、微笑ましいものがある。

そして。

特に何事もなく長女のゲヘナと次女のヨモツクニは帰っていった。還っていった、とも言う。去り際に「……………ありがとうございました（ぺこり）」、「ま、今回はサンキューな。——でも勘違いすんなよ、普段用も無いのに声掛けてきたらぶち殺すからな!」と、このゴスロリ姉妹はそれぞれが別属性をもっているらしいことを証明しているような言葉を残していった。ちなみに、前者がゲヘナで後者がヨモツクニである。

マクスウェルがエリュシオンたちを待っていた理由。それは、埋め合わせである。

少し前に”とある事情”によってエリュシオン一人に仕事を任せつきりになってしまったことがあり、その埋め合わせという形で、エリュシオンが前々から噂を聞くだけで当の本人がたどり着けなかった幻の喫茶店”メビウスの喫茶店”に、常連であるマクスウェルが連れていかれた訳なのだが。それに待ったをかけたのがエリュシオンである。行くのなら姉妹全員でと条件を付け、マクスウェルがそれを了承した——という理由があったのだ。

べつにマクスウェルが”そのテの趣味”の人で、彼女たち三姉妹が彼のドストライクだった、という訳では決してない。

「しかしエリュシオン、今回は本当にすまなかった。なんなら暫くの間業務を代理してやってもいいんだが――」

「別にいいわよ。コッチはコッチで美味しいもの食べられたし……で、これからは”ワタシたち”も常連扱いしてくれるってことでいいの？」

「――」

メビウスは、話さない。声帯に何らかの損傷しているはけではなくて、彼女は図書棺に辿り着いたその時からこんな感じだったのだ。しかし、どうにも会話そのものは成立しなくとも意思の疎通は可能ならしい。

「――――」

「そう？　じゃあお言葉に甘えさせてもらうわよ」

「……：そうか、傍から見ると奇妙な光景なのか」

マクスウェルも、当人達では理解することのできないであろう奇妙な感覚に気づいたらしい。まあ、今一番奇妙なものは、相も変わらず、というか相も変わっていないかった、未だにコーラ（もうこれで定着させる）の入った容器にストローを突っ込んでチューチューとコーラを吸い飲み続けている、マクスウェルである。

「――」

「ん。じゃあオレは業務があるからコレで失礼するが、御前らはどうするんだ？」

「————」

「なんだ？　——ああ、”清葬活動”なら四十三階層の連中が申請していたらしい」

「——」

「わかった。オレのほうで連絡しといてやるから、御前はそのまま”現地”に行くといい」

「…………へえ、なんていうか。本当に奇妙な光景ね」

マクスウェルとメビウスの一連の遣り取りをみて、どうやら自分が大変奇妙な風に周囲に見られていたらしいことにエリュシオンが気付いた。ちなみに彼女。先程のメビウスとの”会話”で、喫茶メビウスの常連客になることができたらしい。初回の来店で常連客、というのは少々おかしいが、喫茶メビウスの来客システムは基本的にこんなかんじなのだ。

「じゃ。オレは行くとするから。それとエリュシオン、メビウスに迷惑をかけるな」

「かけないわよ…………じゃ、また今度ね」

「————（挨拶をしているらしい）」

マクスウェルが彼女たちの視界から見えなくなったところで、メビウスはエリュシオンに一声？かけ、店内に消えていった。自然と、彼女は一人になる。

死の三姉妹。

と呼称される程度には、そして呼称を気に入る程度には、彼女たち姉妹間の仲は良い。

しかし死の三姉妹などと彼女たちは呼称されているが、じつはこの呼称を最初に定着させてのはエリュシオンで、その真相と言えば、存在の奇異ゆえに、ことあるごとに様々な呼称が付けられるのを彼女が面倒がったからである。

彼女は面倒臭がりで、気だるげで、目つきは攻撃的だが――優しい。

死の安息面。その本質は死の恐怖から逃れたいがための、所詮は救いの無い幻想である。死への真実があつて、それ故に恐怖し、恐怖から逃れるために安息を求める。

彼女たちの姉妹序列は、驚くほどに、忌々しいほどに、適切で不親切であつた。ちなみに、彼女たちの姉妹の順番を決定したのは、例の如くパラドクスである。

長女のゲヘナは虚無。それ故に感情表現に乏しいが、死への真実、または終末の本質を知っているために、中央区画第八十七階層721番地の死書長を管轄している。

次女のヨモツクニは恐怖。それ故に攻撃的で狂氣的で、その人格と能力適正から”葬除屋”を担っている。

そして三女のエリュシオンは安息。それ故に温厚で怠惰的で、死の

逃避という能力適正から”蝕員”を担っている。

背もたれに身を預け、”空”を見上げる。エリュシオンは”空”を見上げた。この喫茶エリアが他の区画と一線を引くその理由は、この区画には”空”があるということだろう。しかし本当の、本物の空であるはずが無い。これもおそらく、図書館内部のどこかにいる”従人”によって映し出されたものなのだろう。

本当を言うとエリュシオンは、そこまでメビウスの喫茶店に興味があったわけではない。無口な長女と、やたら攻撃的な次女が興味をもっていたから、それとなく情報を集めていただけである。他ならぬ、姉たちのために。

彼女は、姉想いだった。そして面倒くさがりで子供っぽく、少々ツンデレッ気の彼女は、自分の人格についてこう思うのだ。

「あゝあ、面倒くさい」

それでも、自分自身を否定しない。それが彼女、エリュシオンである。

そう、彼女が存在の全てを否定したいのは――”他にある”。

2-1. 死の三姉妹（後書き）

どうも。ジャン太です。

またまた訳のわからないキャラが登場して申し訳ないです。

こりずに訳のわからない単語が登場して心苦しいのですが、それは本編で。

次回もまた、こんな駄文ですがよろしくお願いいたします。

2-2. 葬除屋

正義。

まあ、正義などと言われても漠然としない者がほとんどだろう。広義的には、道理にかなって正しさを指す。

そして道理とは、世間で正しいと認めた、行いの筋道のことを指すのだという。逆に言えば、世間に認められてしまえば、それは正義たりえるということだ。

さて、正義を語る上では欠かせない存在がある。

例として挙げるならば、物語において、主人公たちとは対極の立場にいる存在たちや、戦隊ヒーロー番組において、ヒーローたちの敵として登場する存在たち。

それは、悪だろう。

物語において非道を働き、いずれはヒーローに殲滅される、そんな存在。

捻くれた人間なら、正義と悪は表裏一体だとか、もしくは、誰かの正義が誰かの悪になりうる、だとか言っているのだろうが、今回はそんなことは関係ない。

別に今回の話は、定義不定な正義の探求を目指したものだとか、正義の矛盾を突いた自己満足だとか、そういった話ではない。

正義というものは確かに存在して、そして滅ぼされるべき存在が”悪”だとするのなら、悪もまた存在する。

宗教や思想、伝統や認識。千差万別で統一感などは皆無であるが、”正義”も”悪”も確かに存在している。

要は、考え方次第なのだ。

そして図書館に流れ着き、大変不本意で、不親切にも”正義”と名称された従人がいた。

戦隊ヒーロー番組のヒーローたちが普段着にしていそうな、赤を基調とした服装である。彼の首に巻くマフラーは、完全無風地帯——というか、微風突風疾風強風とは完全無縁な図書館内部においても、風に揺られたかの如く不自然になびいており、彼の赤い頭髮もまた不自然に：しかし、”漠然とした格好良さ”を演出してなびいていた。

その”漠然とした格好良さ”を醸し出す青年は”正義”という。

彼の呼称が正義と言うだけであって、別に彼は正義の使者と言う訳でも、正義の味方と言う訳でもない。ならば悪かと聞かれても、そうではない。

彼は彼。正義は正義。

しかしココが図書館で、彼が従人であるのなら、彼もまた”不安定”で”いい加減”な存在であることは、言うまでも無い。

彼の本質にして根源は”理不尽”であった。

2-2. 葬除屋

図書館の、その中央区画32番地。

前後左右上方（さすがに下は床である）と、どんな方向を向いても”本”という情報記録媒体が半ば強制的に視界に映る、そんな場所。まあ図書館においては、”本”の存在しない区画のほうが珍しい訳だが。

とにかく四方を本棚に囲まれたそんな場所を、無然とした表情で歩を進める”従人”がいた。

黒髪で黒衣の女性。理知的な表情と雰囲気美人——ラプラスである。

つい最近理不尽な要因で、文字通り生死の境（従人には死の概念は存在しないのだが）を彷徨う体験をした彼女ではあるが、奇跡的に一命を取り留め、業務に復帰していた。

その彼女の傍ら。

背の低い、リボンとフリルがふんだんにあしらわれたゴスロリ服を着た少女が、ラプラスと並ぶように歩いていた。

淡い寒色系のゴスロリ服によく似合う銀髪を腰の位置まで伸ばし、

少々攻撃的な雰囲気のあるツリ目をした、西洋人形の様な少女――
―エリュシオンである。

「……………」

「……………」

この二人は同じエリア――中央区画第十二階層32番地で牢働する同僚ではあるのだが、しかしこの二人のみの組み合わせはかなり珍しい。

言うておくが、今は業務の合間に設けられた休憩時間ではなく、彼女たち二人が交友を深めるために一緒にいる訳では決してない。

「……………」

「……………」

休憩時間で無いのならば、彼女たちが行動を共にしているのは業務のためではあるのだが、これがラプラスのみならば説明がしやすい。
”例の如く”なにかしらの失敗をやらかして、その罰として嫌がらせの様な雑務を押しつけられたということで説明がつくが、今回はそうでもない。

今回彼女たちが並んで歩いているのは、エリュシオンの用事である。

「……………」

「……………」

エリュシオン。中央区画第十二階層32番地を担当している”蝕員”。

異様な雰囲気、漂う図書館内部においても、異例で、異端で、異色な、姉妹として存在している従人。

死の三姉妹が三女にして、死の安息面を司る。

「……………」

「……………」

ともかくエリュシオンの事情で、彼女たちは行動を共にしており、そして共通の目的地を目指している……………のだが、お気づきの通り——随分と空気が悪い。

別にラプラスにしてもエリュシオンにしても、お互いがお互いのことを嫌っているという事実は全くない。ではなぜこんなにも沈黙が続いているというのか？

彼女たちは三点リーダー——無言の間にも目と目で、視線と視線で会話していたりするのかというと、当然ながらそんな事はない。

ならば互いの考えていることを理解できる能力をもっているのか……まあ、そんな訳もない。

「……………」

「……………」

先程も説明したとおり、この二人のみの組み合わせというのは、かなり珍しい。

事実から言うと、別にラプラスはつい最近の”事件”のことを気にしているわけではなくて、むしろその発端が自分にある訳なのだし、”実行犯”ではないエリュシオンには、それほど腹を立てている訳ではない。

単純に、話のタネが無いだけである。

「……………」

「……………」

エリュシオンに関しては別に大した理由もなく、ただ黙っているだけである。

エリュシオンは性分が面倒臭がり屋なので、話すのも、声を出すのも、声帯を震わせるのも、会話するのも——まあ、どれも同じなのだが、とにかくラプラスと話すのが面倒臭いので黙っているだけであった。

彼女たちは沈黙を保ったまま、コツ、コツと規則的に靴が木張りの床を叩く音だけが残響する。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

このまま次の話をしてもいいのだが、ちょっとした余談を挟もう。

この二人、目的地へと向かい出してから一言も会話らしい会話を行っていないのだが……エリュシオンは、特に問題ないだろう。問題なのは、ラプラスである。以外に子供っぽく、色々と残念な要素が多いことで評判（ラプラスは自分の残念についての自覚が無い）のラプラスは、この気まずい沈黙に耐えかねていた。

無然とした表情ながらも、ダラダラと冷や汗を流し、地味に胃を痛ませていた。

「……………」

「……………」

沈黙。

「……………」

「……………」

沈黙。

「……………」

「……………」

沈黙。

「……………あの、エリュシオンさん？」

「……………なによ？」

「……………いえ、えーと——別に」

「……………そう」

沈黙が続く。

しかしこんな沈黙がいつまでも続く訳もなく、唐突に、エリュシオンにとってはなんでもないが、ラプラスにしてみれば地獄の様な、その沈黙は終了した。

「よ！ 随分久しぶりじゃないか、”死の三”」

「その呼び方は好きじゃないわね。……やめてもらえないかしら？
……”ジャステイス”」

「その呼び方はやめろッ！！！」

赤い髪の毛、戦隊ヒーロー番組にできそうな赤い制服を着た、赤いマフラーが無意味になびいている青年。図書館の従人にしてマクスウェルの友人にして”葬除屋”、エリュシオンが”ジャステイス”と呼んだ青年——正義である。

…

……

……

図書棺の、その第十二階層32番地を進む三つの影がある。ラプラスと、エリュシオンと、彼女たちと先程合流した正義である。

三人は黙々と――ではなく、少々騒がしく歩を進めていた。

「本つつつ当に！　ありがとうございます！」

「いや、何を感謝されてるのかわかんないんだけど？」

「それでもですッ！　このままだと沈黙死するのかと思いましたよ、ええ」

ジャステイス――もとい正義と合流したわけだが、ラプラスは”何故か”正義に感謝し倒していた。まあ、地獄の様な沈黙を打ち破ってもらえたのだから、ラプラスにしてみればまさしく救いだっただろう。

「……で、正義？　今回の”補醜”対象はどんな感じなの？」

そして先程”死の三”と呼ばれた少女。エリュシオンが問いかける。

”死の三”とは、”死”の三姉妹の”三”女である彼女を指してい

ることは、言うまでもないだろう。ちなみに、長女であるゲヘナは”死の一”と呼ばれ、次女であるヨモツクニは”死の二”などと呼ばれているが、彼女たち三姉妹はその呼称は好きでは無いらしい。

この場にいたのがエリユシオンだからこそ良かったものの、もし長女のゲヘナや次女のヨモツクニに対してそのような呼称を使えば、問答無用で叩き潰されるだろう。ヨモツクニに関しては、彼女の人格が人格だけに、最悪存在が消滅させられる可能性もある。

「ランク的には、かなり”上位”らしい。事前の調査によれば”神”に近い存在らしいぜ?」

「……そう。”神”なのね?」

「ああ。”神”だ」

ここで、話に置いていかれるのはラプラスである。何しろ彼女、上使であるマクスウェルになんの脈絡もなくエリユシオンについて行けと命じられ、正義と合流するまでギリギリと胃の痛い思いをしながら、ここまで来た訳なのである。

「あの……いいでしょうか? 実は私、今回の業務について何も知らされていない訳なんですけど……?」

「ん? ああ、死書長補佐の——”残念な娘”?」

「ラプラスですッ!! ていうかッ! なんで私が残念なことが周知の事実みたいになっているんですか!!?」

「マクスウェルからだ」

「あの野郎!？」

ラプラスと正義は初対面である。しかし、正義のみに関しては少々事情が異なり、マクスウェルの友人である正義は度々ラプラスの話（主に愚痴）を聞かされ、そして一度だけではあるが、遠目からラプラスを見かけたことがある。たったそれだけのことである。

仕切りなおして。

「……ともかく、私には事情がまったくわからないんですけど？」

「ワタシが説明してあげてもいいんだけど、正直面倒だから。……パス」

「で、オレが説明しなければならぬわけか……ま、いいや。ところで残n——ラプラス。君は、”蝕員”と”葬除屋”の業務についてどこまで知ってる？　というか、どこまで聴かされてる？」

ラウラスは、さりげなく、なんとなく残念と言われかけたような気がしたが、そのことを指摘してしまえば、また無意味で文字数だけを使う遣り取りを繰り返さなければならなくなるので、ぐっと我慢する。

「いえ、何も。……あの、もしかして知ってないと駄目だったりするんですか？」

「それはないさ。ただの確認だよ。心配しなくても、マクスウェルは一度体験させてから説明する方針らしいから。だから今回も一度体験させてから、オレが説明してあげよう。……まあ体験もなにも、

今回はキミにできることは何もないんだけどね？ 多分——いや
確実に、今回キミは”観て”いるだけしかできない」

「はあ、それはいいんですけど……」

「まあ、前知識としての幾らかは、説明してもいいかな？ とりあ
えず——というか、前提として葬除屋と蝕員の協力関係について
を教えようか」

：

……

……

話は変わるが、ここで先程エリュションが正義のことを”ジャステ
イス”と呼称した理由についての、どうでもいい、しょうもない経
緯を説明しよう。

正義がまだ”正義”ではなかった頃。図書館に流れ着いて、自我と
意識を認識した、正にその瞬間。

あまりにも異様で、あまりにも規則的な図書館の内部においても、
そのなかでも特に異様で、そして規則と言う概念から最も無縁な区
画。

通称”ゴミ箱”にて他の従人たちと変わらず、正義もまた、そこで目覚めた。目覚めてしまった。

本の平原。まさにそう表現するのが妥当な、視界に広がる大地と言う大地が、すべて乱雑に積み重なった本によって構成されている、そんな場所。

虚空から無秩序に本が”発生”し、それらがバタリ、バタリと大地に落ちて積み重なっていく、そんな光景の真ただ中で、正義は目覚めた。

そして、目の前に佇む”ソイツ”に気づいてしまった。

大変ふくよかな、頭髮を不思議な形で結わえた、全裸に腰に巻いた紐状の着衣だけの佇まい。

圧倒的な威圧感を放ち、そしてふくよかな脂肪の下には、強靱な筋肉があるのだろう。

そして鍛え上げられたその身体からは力強い息吹を感じる。それは、まさしく戦士だった。

というか、力士だった。

力士でしかなかった。

否定しようのないくらい、力士だった。

「……………うへえ」

「おいおいおいおい失礼だに」チミ”は。キミの瞳に映るこの姿はね？ 誇り高くも慈悲深い、とある世界では最強で最高の戦士なのだぜ？ どうせなら、なんで力士なんだよ！？ くらいのツツコミをしたらどうなんじゃい？」

「いや……目覚めたばかりのオレに、ツツコミを求めるのは酷だと思っただけど」

まあ、いきなり目の前に力士が現れれば、それも正義に関しては自我が目覚めたばかりなので、そういったところも考慮したら、正義が茫然としてしまうのは仕方のないことである。

というか、目の前の存在は口調が一貫していない。正義は目の前の、この力士に感じたことは違和感の塊であった。事実、それで正解である。

この力士の――否。正義に力士のような姿として認識されている従人の名称は、この図書館の”自称棺長”――パラドクスである。

「そんなにことは……！……どうでもいいんだっ」

「聴けよ……いや、もういいや」

力士と、戦隊ヒーロー番組のレッドをやっているような青年の組み合わせが、やはり異色であることなど説明するまでも無い。

諦めた正義を余所に、力士――パラドクスは彼の周囲を旋回し、彼を観察する。

「うんうんうん。そうかそうかそうか。なるほどにや」

なるほどにゃ。よし決めた!!」

再び正義の目の前に戻り、パラドクスは正義に宣言した。

「キミの名称は”ジャスティス”だ!!?」

ジャスティス。正直な話、妥当である。妥当で、適切で、的を得ていた、不親切。

”正義”が図書館に流れ着いた経緯を当てはめれば、あまりにも洒落にならない。

だからこそ、一言。

「チェンジで」

こんなことが、あったらしい。

：

……

……

「へえ〜。そんなことがあったんですね」

「……………なあ、エリュシオン。残n……死書長補佐の様子が変なんだけど？」

「……ラプラス……このバカが残念なのは”いつもの”ことよ。気にしないほうがいいわ」

結局、こんな感じである。

ともかく蝕員と葬除屋であるが、役割的に葬除屋から説明したほうがいいだろう。

葬除屋。掃除屋ではなく、葬除屋。

その業務内容は、物語——”処物”から溢れ出た残骸を葬ること……つまり、滅ぼすことである。

”処物”——”処理されるべき出来損ないの物語”。

そして出来損ないであるがゆえに、”設定不足”であるがゆえに、それらが暴走してしまうことがある。

要因も、症状も、そして暴走の度合いも様々だが、ここで一例を上げよう。

例えば全知全能の神がいたとして、ソレが”物語”において破壊神と定義されていたとしよう。その神は無意味に、無意識に破壊を繰

り返す存在だったとする。全知全能。

万能、と言ってもいいだろう。

そして”処物”とは、ココではない何処かの誰かが妄想、想像したことによって形作られた世界の設計図である。正確には、その世界が最低限辿るべき過程だと言ってもいい。そして処物には、ソレが記されているのだ。

つまり何らかの形で、処物とそれに記された世界は”リンク”しているということだ。

そしてその”リンク”——繋がりを通して、その神が、全知全能で万能であるがゆえに、図書館へと這い出で来る現象が、稀に起こる。

しかしである。図書館内部でヒトの形を保つことができるのは”従人”——不確定で不安定な要素だけであり、神という存在は確かに曖昧で不確かな存在なのだけれど、一応の形で定義された存在であることには違いないだろう。

そんなモノが図書館に侵入すればどうなのか？

答えは……存在そのものが、”不安定”になる。

どのように不安定になるかと聞かれれば、その説明は難しい。しかし、何もかもが不安定になってしまうのだ。そんな状態が、まともな状態であるはずが無い。そしてまともな状態で無いがゆえに、制御が利かない。

そんな状態になってしまったモノを完全に消滅させる役割を担ったモノたちのことを、葬除屋というのだ。

その業務内容ゆえに、従人たちの中でも攻撃的で暴力的な根源を起源とするものしか、その役職を全うすることはできない。であるからして、葬除屋に求められるものは圧倒的な攻撃力であり、そしてその圧倒的な攻撃力を誇る従人がそうそう存在するはずもなく、だからこそその蝕員との協力関係という話になる。

ここで一旦話を区切り、今度は蝕員の話をしよう。

蝕員。職員ではなく、蝕員。

その業務内容は、物語——”処物”になにかしらの要因で欠損、破損といった”欠陥”が生じた場合に、それを修正、補修すること……つまり、復元することである。

それはまさに、葬除屋と対極な業務内容であると言えるだろう。事実、葬除屋が壊すことを主とするならば、蝕員は治すことを主としている。

しかし、ならばなぜ役職名に”蝕”などという単語がつけられているのか？

よくよく思い返してほしい。”処物”に生じた欠損——それはつまり、世界に生じた破損であると同義になる。蝕員は物語——世界に干渉して、そこに生じた問題を無理やり復元して、”なかったこと”にする。

復元。治療ではなくて、復元。乱暴な言い方をすれば、蝕員の業務

とは、世界に生じた矛盾を誤魔化するための作業ともいえる。

それは、世界を蝕んでいることと同義である。

さて、ここで二つの業務のおおよその説明を終えよう。葬除屋にも蝕員にも、その他に多種多様の業務があるが、今回に関係のる話に絞れば、これ以上に話すことは特にない。

全体的な総数で言えば、葬除屋よりも蝕員のほうが圧倒的に多い。極端な話をすれば、蝕員は足りているが、葬除屋は足りていないのだ。

だからこそ、協力関係である。

まだ図書棺が、今よりもよっぽど”狭かった”ころは、葬除屋によって葬除された処物を一旦回収し、そして各所にて”葬除”された処物を一か所にまとめて蝕員たちが”補醜”していた訳だったのだが、二度手間ということもあり、各エリアに蝕員を配置して、必要に応じて葬除屋を要請して同時進行で”葬除”と”補修”を行うということにしたのだ。

：

……

……

「え〜とつまり、葬除屋の方たちが”壊し”て、蝕員の方たちが”治す”ということですか？」

「……まあ、ニュアンスはちょっと違うけど、概ねそんな認識で間違いないよ」

目的地に着くまでの長い道のりで正義は、マクスウェルの教育方針である”一度体験させてから事後説明”に反さない程度の前知識をラプラスに与えた。与えたが、いまいちニュアンスが異なっているらしい。

まあ、教育方針を考慮すればそれがベストとも言えなくもない。

「じゃあ、今回私はお二人の業務を見学するだけということですか？」

「いやいや、そうではなくて。いや、確かにそうなんだけど……マクスウェルとしては、その業務が意味することを、”君なり”に感じ取ってほしいんだと思うよ？ 多分ね」

マクスウェル。白い白い青年。中央区画第十二階層32番地を管轄する死書長。ラプラスの上使。

なんだかんだでラプラスのことを考え、不親切だけど、その実とても親切的な、ラプラス曰く厄介なヤツ。

まあ、マクスウェルにとってもラプラスは厄介な奴だろう。残念的な意味で、だが。

それはともかく一応の説明が終了して、少々の暇ができる。彼女たちの目的地は、まだまだ遠い。

「あの、正義さん。つかぬことを聞きますが、死書長とはご友人なんでしょうね？」

どうもこのラプラス。沈黙や静寂といった、なんとなく気まずい空気が苦手らしい。とりあえずの話題をふり、無理やり沈黙を打ち破る。

「いや、まあ：そうなんだけど？　　というか、図書館に流れ着いたのが似たような時期だったし——もしかして、マクスウェルの弱みとか握ろうとしてないよね？」

「ええッ！？　　ちちちち違いますよッ！！」

怪しい。というか、ばればれである。

「あまり好きじゃないんだよね。当人のいないところでソイツの話をするのは——まあ、マクスウェルならいいかな？」

「いや、いいんですか？」

「いいもなにも……聞きたいのはキミのほうでしょ？　　とはいっても、話せることは殆どないんだけどね。残念なことに」

正義はあっさり友人を売るつもりらしい。マクスウェルの友人とはいえ、否、あのマクスウェルの友人だからこそ、こんなマネができるのだろう。そしておそらく、“ウサミミ”の友人のほうも、聞かれればあっさりとマクスウェルの秘密とか機密とか、わざと口を滑

らせるのではないだろうか？

きっとその通りなのだろうが。

「ねえ、ワタシにも教えてくれない？ マクスウェルって、本当に自分のことを話さないしね」

蝕員と葬除屋の業務説明をしていた時も、全くと言って声を出さなかったエリュシオンが、会話に入る。というか、エリュシオンは”蝕員編”のメインキャラクターなのだからもう少し頑張ってほしいのだから。

「努力するわよ」

努力するらしい。ならいいか。……いいのか？

「そんなに迫られてもなあ……キミらも知ってる通り、あいつは”確立”そのものだからなあ。とにかく、出鱈目な存在だよ。出鱈目さ加減で言えば、自称棺長といい勝負なんじゃないかな？ あとは——そうそう。マクスウェルは図書館に辿り着く”以前”が存在する珍しい従人らしい、ってことくらいかな。ハハ、ごめん。それくらい知ってるよね？……って、どうした？」

正義がマクスウェルの設定を暴露し、しかし”その程度のこと”くらい知っていると思ってるべらべらと喋りに喋った訳だが、ラプラスもエリュシオンも茫然としていた。

どうやら、彼女たちが知らない情報を

「……知らなかったの？」

「“確立”云々の話は聞いたことがあるわ……それ以外は初耳。というか、なに？ あいつ図書館に流れ着く”以前”が在るの？ ワタシたち”姉妹”も珍しい存在だけど、そっちのほうがよくほど珍しいじゃない」

「私に関してはじめて知った事ばかりなんですけど？ え？ エリュシオンさん、姉妹が居られたんですか！？」

ラプラスがズレたことに驚いているが、”死の三姉妹”についての話は以前にもしたと思うので省略しよう。

とにかく、マクスウェルである。

図書館に流れ着く存在は”不安定”で”いい加減”だ。しかし、マクスウェルにはそれ”以前”が存在する。つまり、図書館に辿り着く前から”マクスウェル”という存在が定義されていたということになるが、それだと矛盾が発生する。

図書館に流れ着く以前ということは、どこかの世界——いずれかの”処物”に記された世界に存在したということになるが、その時点で”彼”という存在が”在った”というのに、どうやって図書館に流れ着いたというのか？

世界に存在していた。つまり、なんらかの定義が存在していたというのに、図書館に流れ着いた。

「その時点で……不安定。つまり、不確定でいい加減な存在だったとでもいうの？」

「さあ、そこから先は知らないよ。ただ、マクスウェルはうつかり一度だけ口を滑らせたことがあってね。図書館には”流れ着いた”訳じゃなくて、”流れ着かざるをえなかった”……だとか」

「えっと…何が何だかで、良くわからないんですけど？ 凄いいんですか？」

「凄いいなんてもんじゃないわよ。……なんて規格外。まさかとは思うけど、マクスウェルが以前居た世界って——」

「エリュシオン」

エリュシオンが言おうとしていたことを、寸前で正義が止める。ラプラスは未だに「あれ？ あのか？」と混乱しているが、今回ばかりは彼女の残念さがいい方向に働いた。

「多分、その通りだと思うよ」

「……………そう」

正義は、肯定した。流れ着かざるをえない状況——それはつまり、マクスウェルを除いて”世界が消滅した”ということだ。エリュシオンと正義はそう結論付けた。……まあ、この結論”自体”は間違いないのだが。

なにやらマクスウェルの裏設定がとんでもないことになっているが、読者様方には言っておこう。安心してほしい。概ね、その”とんでも設定”は間違いではない。

ちなみにエリュシオンと正義の傍らで、「いいんだいいんだ、どう

せ私は”残念”なんだ……」などと負のスパイラルにはまりかけている黒髪黒衣の人物がいるのだが、放ってこう。どうせすぐに復活するし。

しかし、また空気が悪くなってしまった。

なので再びラプラスが（もう復活した）、別の話題を振る。

「……あの、唐突で申し訳ないんですが……話が変わるんですけど、正義さんって”根源”はなんなんでしょうか？ あっいえ！！興味本位で聞いただけなんで、別にお答えしていただかなくても——」

「本当に唐突に変わるわね……」

本当に、唐突でわざとらしく話題を振ったラプラスだが、今までの空気を一新させたことには違いあるまい。

”根源”。従人が従人であるが故の本質。

例えば、先程話に上がったマクスウェルは”確立”を根源とし、ラプラスは”未来”、エリュシオンは”死”を根源としている。まあ、疑問と言えば疑問だろう。従人たちは在る存在に名称を与えられる訳だが、そのどれもが例外なく、それぞれ根源に対して適切で、あまりにも適当なモノなのだ。

別に、己の本質にかかわることだから容易に聞くのは失礼———ということはない。

自ら進んで公表することはなが、図書館内部では、初対面の従人に

対して自らの根源を教えるのは珍しくない。珍しくはないのだが、エリュシオンとラプラスの目の前にいる、漠然とした格好良さのある青年——正義は洩る。

「……ああ、オレの根源ね。……当ててみなよ」

どうにも、正義は自身の根源を公表することに積極的ではないらしい。しかし、別に公表すること自体には問題はないようにも見える。しかも、クイズ形式である。

「クイズ、形式ですか？」

「まあ、まだまだ目的地は遠いし。……暇つぶしにはなるかもね」

「二人で相談してもいいよ。景品はないけど」

景品はないらしい。つまらない。

「じゃあ、やっぱり”名称通り”の”正義”だったりするんですか？」

「……安直ね」

それは流石に安直だろう。エリュシオンもそう思っているらしい。というかエリュシオン、もしかしたら既にクイズへのやる気が無くなっている。

しかし安直な答えであるには関わらないが。

「”正義”か……確かに不安定で曖昧な定義だけど、オレの本質

はそうじゃない。そんなモノじゃないんだ。そんな立派なものじゃ、ね……」

なんか真面目に返される。驚いたのはラプラスだが、エリュシオンも瞑目している。エリュシオンは役職柄、正義とはそれなりの付き合いがる。正義の根源こそは知らないが、それでも、彼がこの様に弱々しい物言いをするのは見たことが無かった。

「確かにオレは——オレの根源は”正義”だよ……いいや、正確には”理想”かな？」

「”理想”……ですか？」

「うん。”理想”」

とうとう、クイズの方式を無視して自ら語り出し始める。もしかしたら、彼は己の根源に何かしら思うところでもあるのかもしれない。いや、間違いなく思うところが在るのだろう。無論、悪い意味で。

「”どんなことがあっても絶対に勝利して、そして絶対に負けない。あと、なんとなく格好良い”——子供が漠然と思い描いたような”不安定”で”不確定”な理想。それが”オレ”」

まだまだ目的地までは遠いが、正義は一旦歩を止める。ソレにつられて、ラプラスとエリュシオンも歩みが止まる。根源と本質は同義ではない。

「オレの本質は、”理不尽”なんだ」

弱々しく、少々の自己嫌悪を含めたその物言いすらも、彼は、正義は。

”なんとなく格好良かった”。

2-2. 葬除屋（後書き）

どうも。ジャン太です。

読んでくださった読者様方、ありがとうございます。

途中で帰られた方も、ありがとうございます。

作者は、そんな読者様方を崇拝しております。

さて、内容ですが、今回も中途半端で申し訳ないです。

いまさらですが死の三姉妹の名前って、それぞれが死後の世界の名前だったりするんですよ。

特に意味はありません。

この”蝕員編”が終わったら、一応の作中用語の解説をしようと思います。

とにかく、読みやすい文章。

わかり易くて面白い作品を目指そうと思いますので、今後ともよろしく願います。

2-3. 補醜作業（上）

眼前を歩くラプラスと正義から少々の距離を取り、淡い寒色系のゴスロリ服を纏った少女——エリュシオンは、お人形のような外見とは釣り合いな攻撃的なツリ目を僅かに細めて思考する。

従人の”根源”と”本質”。

根源とは従人の存在そのものだと言ってもいいだろう。従人が従人たる起源であり、それぞれが”不安定”で”いい加減”——そして”不確定”な要素を能力として、”限定的”に行使できる。

”限定的”

そう。限定的に、である。

そしてその要素を限定的に行使することに、本質は重大な意味を持つて関係してくる。

では従人の、従人にとっての”本質”とはなんなのか？

例えば。

黒髪黒衣の知的な美人——ラプラスの場合、根源は”未来”とし、その本質は——推測されるには、”結果”であるらしい。

らしい……というのは、マクスウェルが客観的に検討を付けただけで、そしてラプラス自身が能力の本質を理解していないということなのだが、大凡、十中八九、的は得ている筈だ。

それはそれとして、ラプラスの能力は、未来を存在するものと仮定したときに、その未来に干渉することができるというものである。

ラプラスの場合は未来を”視る”という形で干渉するというものであり、そして彼女が”視る”未来とは、彼女がその通りに行動すれば、実際にその通りになるだろうという、”結果”的事実である。

しかし彼女の視る未来は、確かに未来ではあるのだろうけども、ラプラスがその未来に変化をもたらす行動をしても、決して矛盾しない。

何故なら未来という不確定要素は、本来なら”存在しない”からである。

とにかく彼女が視る未来は、未来であって未来ではない。

彼女の能力とは、未来という不確定要素に干渉し、その結果から新しい未来を導き出すというモノなのだ。

未来を書き換える…とも、言えなくもない。

つまり本質とは、従人の根源を基盤とした能力の、その方向性——つまり、限定的に発動できる実質的な能力そのものであり、そして従人の”発生”経緯に深く結びつくものなのだ。

ともすれば、ラプラスは予言という概念における、予言した未来と実際に辿った未来とのギャップから生じた存在なのではないだろうか。

まあ、そんなことは今は関係なくて。

問題なのは、正義である。

戦隊ヒーロー番組の主役に抜擢されそうな青年——正義の根源は、
”理想”。

それも人間の子供たちが抱くような、正義という概念への漠然とした理想、である。

”どんなことがあっても絶対に勝利して、そして絶対に負けない。
あと、なんとなく格好良い”

子供が漠然と思い描いたような”不安定”で”不確定”な理想。

それが赤いマフラーを巻いた、戦隊ヒーロー番組に登場してそんな
彼の——正義の、根源である。

そして彼の本質は——理不尽。

”どんなことがあっても絶対に勝利する”——なるほど、確かに
”敵”と定義されたモノたちにとっては理不尽そのものだろう。

”絶対に負けない”——これも”敵”と定義される存在や、”敵”
に定義されてしまった存在には、たまったものではない。ソレら
にしてみれば、そのことは”絶対に勝てない”ということに同義で
あるからだ。

そして、”なんとなく格好良い”——これは、どうでもいいだろう。

まさか正義の巻くマフラーが、完全無風の図書館内部においても、無意味になびいているのはそのせいなのだろうか？ まあ、きっとその通りなのだろう。

本質とは、従人の人格構成にも関係しているらしい。

正義自身の人格にしてみても、理不尽な自分が許せない――あるいは理不尽を否定するべき”正義の味方”の如く、理不尽そのものを嫌悪しているからこそ、自分の本質が許せないのかもしれない。

まあ、図書館内部においては歪であることはむしろ日常的であり、矛盾が許されるこの場所においては、”そんなこと”はあまりにもどうでもいいことだ。

2-3. 補醜作業（上）

どこまでも、四方八方見渡す限りに砂丘が続き、生命という生命の存在が全く確認できないような場所。その景色の中に本棚は存在せず、本棚が存在しないのだから、本という情報記録媒体だって存在していない。

その生命が枯れた景色の中心に、ラプラスとエリュシオンと正義は居た。

「? 正義?」

「――――」

「ちょ!?! 正義ッ!?!」

先程にも言ったが、今現在彼女たちが居るこの場所は図書館ではない。もしかすれば図書館内部にも、どこかの従人が”趣味”で創った砂漠のような区画があるのかもしれないが、その話は今はどうでもいいことだろう。

ではなぜ彼女たちはこんな―――このような砂漠地帯のど真ん中に居るというのだろうか?

若干一名(正義)の安否が危ういところだが、一応の説明をしよう。

そもそも今回、エリュシオンとラプラスという、中央区画第十二階層32番地で牢働する従人の組み合わせの中でも、特に珍しい組み合わせの中に、葬除屋である正義が加わっている理由は、ラプラスの死書長補佐の研修の一環である。

葬除屋と蝕員の合同作業である、補醜作業の見学。

補醜作業―――葬除屋が壊して、蝕員が治す。

とにかく、ラプラスたちは補醜作業をするために来た訳であるが、それとこれとがどのように直結するというのか?

その理由は補醜作業の過程の一つである、”葬除”に関係している。

葬除屋という役職の、業務内容の一つである”葬除”

その業務内容は、何らかの形で本——”処物”から溢れ出てきてしまった存在を、文字通りに葬ることにあり、その業務内容ゆえに葬除屋は攻撃的な根源を保有する従人のみで構成されている。

攻撃的で、圧倒的で、暴力的。

とにかく、攻撃的で、圧倒的で、暴力的。

そのような能力を保有し、そして葬除という業務ではそれらの能力を行使して、なにかしらの”不訪侵入者”や”不侵物”の除拒、もしくは撃逮をするわけであるが、その強力な能力による二次的な被害が出ない訳が無い。

そういった被害を最小限に抑える必要があり、そしてそのための能力を保有する従人も存在しているのだが、今回の場合、そういった存在の助力はない。

そのような場合の為に存在するのが、今現在ラプラスたちが”滞在”するこの世界——通称”死んだ世界”である。

……

……

：

”死んだ世界”……ですか？」

「そう。死んだ世界——これからオレたちが向かうのはその一つ……まだ文明が生きていて、世界が世界として”成り立っていた頃”は、それなりに栄えていたらしいよ」

「“死んだ”とはいってもね、図書館がそう定義しただけで、世界そのものが崩壊したとかそういう訳ではないのよ。そういう意味では、世界はまだ”生きている”とも言えなくはないのよ」

なんらかの理由で世界の存続が不可能となり、打ち捨てられた——もしくは見捨てられた世界のことを、図書館では”死んだ世界”と通称している。

世界が”死ぬ”。

当然ながら、それが生物にとっての死と同義であるはずもなく、世界にとっての死とは、”変化の兆しが見られなくなる”ということである。

世界に生命体……それなくても、例えば”神”のような存在が一柱でも存在していれば、それは世界として成り立つらしい。およそ万分、もしくは億分、あるいは兆分、天文学的な数字であろうとも、なにかしらの変化の兆しが存在すれば、それは世界として成り立っている。

しかし、そういった存在たちが全くの皆無になってしまえばどうな

るのか：という話は、愚問である。

この場合問題となっているのは、星や惑星などの物理的な変化ではなくて、思想や思考の変化のことである。

世界というものは、ココではない何処かの誰かが妄想、もしくは想像した世界観によって創造される。つまり、である。知的生命体や神というものが存在しなくなれば、新しい世界が創造されることもなくなる――”変化の兆しが見られなくなる”ということなのだ。

図書館”は”、そういった世界を監理することに価値を見出していないらしい。図書館”は”。

従人たちが：ではない。

図書館という空間が、どういう基準で、どういう判断で、”死んだ世界”に価値を見出さなくなったのか？

そんなことがわかる筈もなく――というか、従人たちですら理解の範疇を超えている。もしかしたら、例外中の例外である”パラドクス”ならば、図書館の成り立ちについてを完全に知り尽くしているのかもしれないが。

パラドクス――”自称棺長”。その存在を語ることは、今はやめておこう。

とにかく”死んだ世界”である。まあ、世界が死んでいるからと言っても、図書館にはその世界に対応した”処物”が納められている。監理する価値を見出していないからと言って、監理しない訳ではない。

図書館とは、そういうところらしい。

「まあ、今回はその”死んだ世界”の一つで、葬除と補醜作業を行うことになっている。……理解できた？」

「はい……それは、理解できたんですけど……大丈夫なんでしょうか？ その、”私たち”が図書館の外に出ても？」

「ああ心配ない。大丈夫だよ。そのための”処理”も施してあるし、ね」

「本当に？ もしワタシが怪我でもしたら大変よ。多分だけど、ヨモツクニにズタボロにされてからゲヘナに消滅させられるわね」

ヨモツクニ。死の三姉妹が次女にして、死の恐怖面を司る。

その人格は凶暴そのもので、正義と同じく葬除屋の役職に就いている。

そしてゲヘナ。死の三姉妹が長女にして、死の虚無面を司る。

その人格は起伏に乏しいが、三姉妹の中で最も恐ろしいのは彼女であり、そして彼女は死書長の役職についている。

それぞれが別属性を持つ、この三姉妹。しかし、仲が悪いのかと聞かれればそうではなくて、むしろ姉妹仲は良好である。というか、過剰に良好である。

もし三女であるエリュシオンが負傷しようものなら、正義の命運は

決まったようなものだろう。

具体的には、グチャグチャのズタズタのボロボロである。

姉妹の話はほどほどにしておいて。

従人。それらの存在は不安定で、そしていい加減。

だからこそ図書館に流れ着いて、人間の姿形を模範することで一応の安定を得た訳であるが……そのような存在が、安定している場所——”世界”に降り立てば、果たしてどうなってしまうのか？

ラプラスの疑問はそういうものだったが、正義が言うには問題はな
いらしい。

「メビウスって知ってるかい？ あいつも葬除屋なんだけど、オレとは別系統の根源を持っていてね。死んだ世界の一つを”完全凍結”したらしい。で、今回向かうのは”そこ”。そこならオレ達従人でも、世界に滞在することを許されるらしい……というか、もうソコは世界ですら無いのかもしれないけどね」

”世界の完全凍結”それがどういうものなのか、このすぐ後にラプラスは知ることとなる。

「とにかく。葬除や補醜作業は、真路相談や軌録みたいな業務とは一線を引いているから……最悪の場合、この中の誰かが”消滅”する可能性もある。消滅したい？」

「イヤですね」

「だったら……細心の注意を払って、オレの後ろに隠れているんだ。大丈夫。消滅なんてさせないからさ」

消滅。従人に死という概念はないが、しかし従人も確固として存在していることに違いはなく、それ故に、消滅という概念は存在している。過去に、図書館内部における”禁”を破って消滅した従人が居たのだが、それは追々語るとしよう。

しかし、正義である。”漠然とした格好良さ”が定義されているためか、どんなことをやらせても、どんなことを言ってもなんとなく格好良く映る。

「絶対に、”死なせない”から」

：

……

……

そして現在。

「ふう……死ぬかと思った」

「”死なせない”とか言ってたやつが真っ先に死にそうになるなんて……」

「あつうううう………」

上から正義、エリュシオン、ラプラスである。なんだからラプラスがいつにも無く残念な気もするが、放っておいて話を進める。

”死んだ世界”……この世界にも一応の名前はあるのだが、あまり重要なものではないので省略しよう。この世界には、およそ生命体と言える存在が皆無である。

彼らの立つ一面の砂漠風景からもわかるように、この世界は物理的に死んで、そして生命体——あるいは思考を行える存在が居なくなってしまうがために、世界としても死んだらしい。

しかし世界として死んだとしても、そこが世界である事には変わりがなく、そのような場所には従人たちのような不安定な存在は立ち入れない。

だからこそ、”少々”の手を加えることによって、従人たちでも立ち入れる空間に変化させた。

世界を、”安定”した空間から”不安定”な空間に、変化させた。

「うるさいわよラプラス。ちょっとでいいから黙ってくれない？
コッチまで熱くなってくるんだけど……」

「しかたがないじゃないですかああああ……アツいものはアツいんですうううう……」

「………なんだか、どんどんアナタが残念になっていくのを実感す

るわね」

ラプラスは暑さに——熱さにやられたのか、何だか酷い様になっている。黙っていれば理知的な美人なのだろうが、こんな状態では黙っていないくても、いろいろと残念である。

「なんで”太陽”も”無いのに、こんなに熱いんですかああああ？」

この世界には、太陽が無い。存在しない。しかし、この砂漠地帯は灼熱が如く降りかかる”陽光”を跳ね返し、そしてラプラスたちをこれでもかと焦がしている。

「この世界から、”太陽”という要素だけを”消した”からでしよう？……確かに太陽も無いのに日光が存在するっていうのは納得がいかないんだけど、そんなことは今さらだし、ね」

「太陽というのは”当たり前”にそこに存在する”……”という認識だからね。その当たり前を”消した”からこそこの世界は不安定になったんだ。そして不安定になったまま世界を”凍結”した。だからこそオレたちが世界に侵入しても問題が無くなっている訳なんだけどね。しかし、毎回毎回思うけど……この暑さには、やっぱり慣れないよ」

「……いまいち納得できません」

「それでいいんじゃない？ ワタシたちが納得する必要なんてないし、納得する意味も無いんだろうしね？」

結局のところである。従人たちは牢働するしかないのだ。理解する必要はないし、理解する意味もない。そのような権利を、従人たち

は持っていないのだ。

「それはそうとして……で、いつ頃始めるんでしょうか？ その“葬除”というものは？」

「ん？ ああ、もう”そろそろ”かな？ 準備だけならできてるし——そうだ、確認しておこうか。これからオレとエリュシオンで葬除と補醜作業を始める訳だけど……この業務について、ラプラス。キミは理解する必要はないんだ。あくまで、キミがどう感じたかが大切なんだからね？」

「本当なら面倒なんだけど……事後の説明くらいはしたげるから、質問でも何でもしなさい」

珍しく、本当に珍しくエリュシオンがやる気を出すらしい。しかし今回の補醜対象は、”神”であるらしいので、エリュシオンも気を抜くことができないということなのだろうが。

「おっと！ 対象が来るらしい……じゃ、エリュシオンとラプラスはオレの後ろに移動して——」

正義が言い終わる前に、激震が走る。

轟音が轟いて、見渡す限りの砂の海が吹き飛ばされる。

現れたのは、巨大で、凶悪で、絶対的な——なにか。なにか、と表現したのは、それはもはや原型も、輪郭も、なにかもがブレにブレて、理解不能な形状をしていたからである。

触手の塊に見えなくもなく、だからといってヒトの形にも見えて、

そして形なんか存在しないようなゲル状の物体にも見える。

不安定。

不安定に、安定しているという矛盾。この”死んだ世界”は、何らかの形で図書館としての性質を取り込んでいるらしく、不安定に安定している矛盾が”許される”らしい。

「あれが……”神”ですか？」

巨大な”ナニカ”を見上げて、ラプラスが茫然と呟く。否。別に呟きに解答が欲しかった訳ではなく、その上の空な呟きは確認に近い意味合いだったのだろう。

巨大で強大。そして、見るからに絶対的で絶大。

「そう。あれが”神”よ。……正確には”神”だったナニカかしらね？」

エリュシオンが、一応の解答をする。彼女には、この異形で異様に異常な物体は見慣れたものなのだろう。それは、エリュシオンとラプラスの前に、彼女たちを庇うように立つ赤い髪に赤いマフラーの、なんとなく格好良い青年——正義にも言えることである。

「せっかちな……じゃあ——行きますか」

そして、正義は”ナニカ”に向かって駆け出した。

彼の根源は”理想”。ココではない何処かの誰かが思い描いた、子供らしい、漠然とした”正義”の理想。”どんなことがあっても絶

対に勝利して、そして絶対に負けない。あと、なんとなく格好良い”という、漠然とした理想から零れ落ちてしまった存在。

そして正義の——彼の本質は理不尽。

そんな彼が、負ける筈など——無い。

2-3. 補醜作業(上) (後書き)

はい。ジャン太です。

後書きは次回にまとめて書きますので。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9017n/>

死書長 - 忘れられた図書館 -

2010年10月29日13時14分発行